2014年度

青山学院大学
FD活動報告書

青山学院大学全学FD委員会

青山学院教育方針

青山学院の教育は
キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする。

青山学院大学の理念

青山学院大学は、「青山学院教育方針」に立脚した、
神と人とに仕え社会に貢献する
「地の塩、世の光」としての教育研究共同体である。
本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって
自ら問題を発見し解決する知恵と力をもつ人材を育成する。
それは、人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究を通してなされる。
本学すべての教員、職員、学生は、
相互の人格を尊重し、建学以来の伝統を重んじつつ、
おのおのの立場において、時代の要請に応えうる大学の創出に努める。

青山学院　スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
（聖書　マタイによる福音書　第5章13 ～ 16節より）

2014年度　青山学院大学　FD活動報告書　目次

1. はじめに …… 1
2. 本年度活動一覧 …… 2
3. 新任教職員研修会 …… 4
4. 授業改善のための学生アンケート …… 20
5. 学生FDスタッフの活動 …… 24
6. 教育改善・教育プログラム支援制度 …… 29
7. 学生意識調査 …… 48
8. FD講演会 …… 51
9. FDEagoプロジェクト …… 58
10. その他のFD活動 …… 76
11. 諸規則 …… 79
12. FD推進委員会及び全学FD委員会委員一覧 …… 83

1. はじめに

全学FD委員会委員長
副学長　長谷川　信

本学のFD（Faculty Development）活動は、2003年度から全学的な授業改善のための学生アンケートがはじまり、2005年度からFDプロジェクトチームが活動を開始しました。そして、2008年10月からFD推進委員会、2009年4月から全学FD委員会が活動を開始しました。

本学のFD活動は、次のような点を重視して進められています。第1に、大学を構成する教員、職員、学生、社会の4者が協力して、組織的に教育の改善を行うこと、第2に、学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」を実現すること、そして第3に、FD、SD（Staff Development）相互のバランスをとりながら、教職員が協力して教育力の向上に努めることです。

FD活動は、「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み」といわれますが、その内容は多岐にわたり、現状ではより幅広い活動が展開されて来ています。本学のFD活動も、単なる授業改善にとどまらず、さまざまな教育支援活動が組織的に展開されはじめています。2013年4月には教育支援課が発足し、FD活動の推進に貢献しています。

本来、個々の教員がおこなっている教育改善の蓄積は、潜在的にたいへん大きなものがあるはずです。しかし、これらの豊富な教育資源は、目に見えないままであり、継承することが難しい現状があります。これらの豊富な資源を可視化するとともに、情報システムを利用しながら、組織的に体系化することがいま求められています。教員と職員が協働しながら、より豊かな、質の高い教育の実現をめざして行きたいと思います。

本学のFD活動として、これまで GPA制度の導入、シラバスの整備、授業アンケートの公開、新任教職員研修、教育改善・教育プログラム支援制度などが推進され、教育力の強化が図られてきました。2010年度に開始された学生意識調査は、学年進行に伴って卒業時調査を含めた経年比較が可能になりつつあります。その結果の一部は「学生の意識調査からみる青山学院大学の学生像」としてホームページ上に公表されるとともに、2013年7月18日のFDフォーラムにおいて分析結果と活用事例が報告されました。また、2012年度からは「FD Eagoプロジェクト」によるFD意識の普及、教育活動の表彰などがおこなわれ、また学生FDスタッフによる「しゃべり場」の企画がはじまりました。2014年度からはFD講演会等による教職員の意識向上にも取り組むなど、新たな視点からFD活動の領域を拡げつつあります。

また、2015年度からは、科目ナンバリングの実施案の作成、授業改善のための学生アンケートのWeb入力の検討、スタートしたばかりの内部質保証システムのもとでのシラバスの点検など、取り組むべき課題が多く登場しています。これらの課題に取り組みつつ、本学としての特徴あるＦＤ活動を推進したいと考えています。

2.　本年度活動一覧

○ 2014 年度　月別活動一覧

	委員会開催	新任教職員研修会	授業改善のための学生アンケート	学生FDスタッフの活動	教育改善・教育プログラム支援制度	学生意識調査
4月	4月9日 ①FD推進委員会 ①全学FD委員会	4月2日 第1回開催	(2013年度後期実施結果報告)	4月9日 2014年度年間活動計画報告	(2013年度外部評価委員会全体講評の発表) (3月11日～) 公募開始	(3月29日)～4月4日 学生意識調査(1・2年生)・キャリアアプローチ(3年生)調査実施
5月	5月14日 ②FD推進委員会				5月9日 公募締切 外部評価委員事前審査 5月27日 第1回外部評価委員全体会(審査・配分額決定)	5月12日～16日 1～3年生対象フォローアップ講座
6月	6月11日 ③FD推進委員会 ②全学FD委員会			6月4日 学生しゃべり場	6月11日 採択プログラム決定 各プログラム活動開始	フォローアップ講座動画配信
7月	7月9日 ④FD推進委員会		7月8日～26日 前期アンケート実施	7月12日 教職員との交流会		結果報告会(各学部・大学執行部) 7月23日 事務職員対象結果報告会
8月				8月23・24日 学生FDサミット2014夏参加		
9月	9月24日 ⑤FD推進委員会 ③全学FD委員会	9月18日 第2回開催	9月19日 前期結果報告			9月18日～30日 4年生調査(9月卒業生)
10月	10月22日 ⑥FD推進委員会 ④全学FD委員会			10月21日～25日 学生ミニしゃべり場		
11月	11月19日 ⑦FD推進委員会					
12月	12月17日 ⑧FD推進委員会 ⑤全学FD委員会			12月16日 教職員との交流会		12月1日 4年生調査(全4年生)開始(～3月25日)
1月	1月28日 ⑨FD推進委員会(休会)		1月5日～26日 後期アンケート実施	1月10日 学生しゃべり場		
2月					2月27日 プログラム活動期間終了 活動報告書・決算報告書提出	
3月	3月4日 ⑩FD推進委員会 ⑥全学FD委員会		(4月1日) 後期結果報告	3月8日・9日 学生FDサミット2014春参加	外部評価委員事前審査 3月20日 第2回外部評価委員全体会(最終審査・全体講評作成)	3月25日 4年生調査終了

	FDフォーラム FD講演会	FDEagoプロジェクト Happyくらす 作品コンテスト	FDハンドブック	教員のための英語研修プログラム	全国私立大学FD連携フォーラム	関東圏FD連絡会
4月						
5月	5月28日 FDフォーラム 第1回開催					
6月		6月11日 募集開始（～9月27日）		6月25日 第1回プログラム 実施	6月14日 総会出席	6月30日 連絡会出席
7月						
8月						
9月	9月24日 FD講演会 第1回開催	9月27日 募集締切				
10月		審査 10月31日 入選作発表				10月1日 連絡会出席
11月		11月10日 授賞式 受賞者による座談会				
12月				12月3日 第2回プログラム 実施		
1月					1月14日 ミーティング及び懇談会出席	1月28日 連絡会出席
2月						
3月			（4月2日） FDハンドブック発行 （第2版）			

3.　新任教職員研修会

本学では、大学に新規採用された教員と学院全体で採用された事務職員を対象とした「新任教職員研修会」を年2回開催している。

第1回は本学就任直後の4月初旬に開催され、本学における教育研究活動の概要からFD活動の紹介、各種手続に関する説明を行い、本学での教育研究活動が円滑に開始できることを目的としている。

第2回は9月中旬～下旬に開催され、前期の授業経験を踏まえ、教育方法の改善に資する契機となる研修を行うべく、外部から講師をお招きし、より実践的な内容の研修会を実施している。2014年度は、2012・2013年度に引き続き、杉原真晃先生に講師をお引き受けいただいた。

なお2回目の研修会については、新任教職員以外に希望者も参加可能としている。

○　2014年度第1回　大学新任教職員研修会

日　時　　4月2日（水）12：45～14：45
場　所　　第19会議室（総研ビル11F）
司　会　　全学FD委員会委員長　長谷川　信教授

プログラム

(1)　聖書朗読・祈祷
「わたしたちは世の中で、とりわけあなたがたに対して、人間の知恵によってではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの下に行動してきました。このことは、良心も証しするところで、わたしたちの誇りです。」
（コリントの信徒への手紙二、第1章12節、2014年度学院主題聖句）
“In simplicity and godly sincerity”　2 Corinthians 1：12

(2)　本学のキリスト教活動について
大学宗教部長　伊藤　　悟教授

(3)　本学の教育研究方針と今後の展開について
学長　仙波　憲一教授
副学長　長谷川　信教授
副学長　林　　洋一教授
副学長　平澤　典男教授

(4)　本学のＦＤ活動と教育研究システムについて
全学ＦＤ委員会副委員長　杉谷祐美子准教授
情報メディアセンター所長　宮川　裕之教授

(5)　本学の事務について
事務局長　鈴木　寛也
学事暦、授業、成績評価等について　学務部部長　髙野　悦子
研究制度及び研究費等について　研究推進部部長　安部友紀枝
施設設備利用について　庶務部担当部長　山田　達二

以上

(4) 本学のＦＤ活動と教育研究システムについて
全学 FD 委員会副委員長　説明用スライド資料

青山学院大学のFD活動

青山学院大学全学FD委員会

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

1. 基本方針

◇FDとは？
Faculty Development＝教員の職能開発
「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み」
◇教育力の向上は大学の責務

◇青山学院大学は教育を大変重視
単なる授業改善にとどまらず、さまざまな教育支援を組織的に展開

2

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

本学のFD活動が重視している点

◇大学を構成する教員、職員、学生、社会の4者が協力して、組織的に教育の改善を行う
◇学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」を実現する
◇ FD、SD相互のバランスをとりながら、教職員が協力して教育力の向上に努める
※ SD（Staff Development）＝職員の職能開発

⇒ 教員、職員が一体となった教育改善へ

3

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2. FD活動のスタート

◇2003年度後期から全学自己点検・評価委員会で、「授業評価アンケート」を実施し、2004年度後期より「授業改善のための学生アンケート」としてスタート

◇2005年度にFDプロジェクトチームを発足

◇2008年10月、大学HPにFD活動のページを新設して、これまでの活動を外部に公表

4

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

3. FDプロジェクトチームの実績

［ 2005年度～2007年度］

- 「授業アンケート」の運用
- シンポジウムの開催
- 授業公開の実施
- 「教員アンケート」報告書の作成
- プロジェクトチーム活動報告書の刊行

5

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

4. FD組織の発足

発足の経緯

2008年4月　大学設置基準改正　第25条の3によるFDの組織的活動の義務化
（専門職大学院は2003年度、大学院は2007年度、学部は2008年度より義務化）
2008年10月　FD推進委員会発足
2009年3月　全学FD委員会設置
2009年3月　青山学院大学FD規則制定

6

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

本学のFD組織

全学FD委員会

FD推進委員会
内容：ＦＤ活動の啓蒙・企画・立案・実行
・授業改善、教育環境支援、啓発活動
構成員：副学長（委員長）1名
学長指名委員（教員より）7名　※副委員長1名を選出
学長指名委員（職員より）6名

全学教務委員会
内容：教学に関する全学的な調整
＜例＞学事暦、授業時間の設定、卒業延期制度
構成員：副学長（2名）、宗教部長、青スタ副機構長、学科主任（各学部より1名）学務部長、相模原事務部学務課長

7

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

FD推進委員会の役割

- 学長のもとに、少人数で機動的な組織を設置する
- 若手教職員の構想力によって企画立案を進める
- FD活動の啓蒙
- 学部のFD活動を活性化する起動力に
  ⇒ 全学FD委員会の構成員

8

5. これまでのFD活動
2009年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 授業アンケートの見直し
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の発足
- 次年度の新任教職員研修会プログラムの検討
- 各学部におけるFD活動の事例紹介
- 他大学との連携、交流
- 全国私立大学FD連携フォーラムへ加盟
- 関東圏FD連絡会への参加

9

2010年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施
- 授業シラバスの学外公開開始
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 「FD letter」の発刊
- 「実践的FDプログラム」上映会の開催
- 他大学との連携、交流

10

2011年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 授業改善アンケートのための教員アンケートの実施と分析
- 「FD letter」の発刊
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流
- シラバスのWeb公開

11

2012年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施と集計結果の外部公開
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- FDキャラクター FDEago の投入
- FD Tip の紹介
- FD Board の設置
- 「心に残る授業」をテーマとした「Happyくらす作品コンクール」の実施
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流

12

2013年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施と集計結果の外部公開をテーマとしたFDフォーラムの開催
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 「心に残る授業」をテーマとした「Happyくらす作品コンクール」の実施
- 学生FDスタッフと教職員の交流会実施
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流、包括協定締結
- FDハンドブックの制作

13

6. FD活動の紹介
教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

教育の質を高めるためのプロジェクトを学内公募し、採択されたものに補助金供与

2009年度

・シラバスと講義録の統合情報に関する高度活用システムの構築
・「科学・技術に関する意識データベース」の構築
・各種資格（司書・社会教育主事）教育プログラムの評価モデルの開発
・ティーチング＆ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援
・大学生に対するリーガルリスク教育

2013年度

・青山ビジネスゲーム（ABG）の開発
・学習資源・学習環境としての図書館を活用した授業実践モデルプログラムの開発　～「単位の実質化」に向けた授業時間外学習の拡充をめざして
・学習者個別進度に基づくIT演習支援

14

全学的な学生意識調査

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 調査の目的
  - 大学はカリキュラムや学生支援のあるべき姿を検討
  - 学生は学生生活の目標設定、学びと進路のつながりを意識
- **学年進行に伴って卒業時調査を含めた経年比較が可能**
  - 1年　新入生の現状把握
  - 2年　学生の満足度・成長感把握
  - 3年　学生の満足度・成長感把握、就職への動機づけ
  - 4年　学生が身につけた力・モチベーションの変化の把握、満足度・成長感把握
- **学生個人へのフィードバック**
  - 個人結果報告書の返却、フォローアップ講座
- 結果「学生の意識調査からみる青山学院大学の学生像」（⇒大学HP）

15

学生FD活動「しゃべり場」

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 学生FDスタッフ
  - 学生の視点から大学の授業や教育のあり方を考える学生団体
  - FD推進委員会への報告、全学FD委員会との交流、関東圏学生FD連絡会や全国学生FDサミットでの活動

全学しゃべり場「大学の授業ってなんだろう」（2013年6月）

学生・教員・職員での意見交換　⇒　大学へ意見提出

16

「心に残る授業」をテーマとした「Happyくらす作品コンクール」

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 授業を通して得た発見や感動、体験、成長などのよい思い出を表現した作品を学生から募集
- 2013年度審査結果　最優秀賞1作品、優秀賞1作品、佳作6作品

～最優秀賞作品～

「心に残る授業」　　総合文化政策学研究科　2年

「・・・・・・山内先生の講義を経験して、かつての僕が持っていた教える仕事に対しての疑問は氷解した。教師の本質とは、その教授内容を超えて、問題に対しての知的態度を見せつけることにある。具体的な題材から出発するとしても、最終的には知的な生き方を示すことに帰結するのだ。好奇心を持って対象に臨み、そこに訪れる新しい発見を楽しむという態度。ひとの歩いたところを歩くのではなく、自分の道は自分で発見するのだという態度。そのような態度を生徒の前で表現すること。教えるとはそういうことなのだ。・・・・・・」（⇒大学HP）

17

FDハンドブックの制作

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

本学の教育に関する各種情報、授業改善アイディア、「授業改善のための学生アンケート」の活用法等をまとめたFD ハンドブック

青山学院大学 FD活動マスコット
【FDEago（エフディーゴ）】

18

FDハンドブックの目次

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

目次

第１部　青山学院大学の教育概要 …2

学事暦 …2
授業時間　青山学院大学の教育研究活動－キリスト教による教育方針 …3
学生数　教職員数　卒業者数　教室数 …4
開講授業数　学生平均履修科目数　授業改善のための学生アンケート …5
学位授与方針 …6

第２部　授業改善のアイディア … 10

1 授業の心構え …11
2 授業のデザイン …12
3 シラバスの作成 …13
4 教材の選択・作成 …15
5 最初の授業 …16
6 多様な授業方法 …18
7 授業の展開Ⅰ・Ⅱ …20
8 授業のアイディアⅠ・Ⅱ・Ⅲ …22
9 授業の秩序 …25
10 学生への対応 …26
11 学生とのインターアクション …27
12 ICT の活用 …28
13 試験と採点 …30
14 授業評価の活用 …31
15 授業改善のために …32
FD Tip …33

第３部　青山学院大学の教育に関する制度及び設備・サービス … 34

1 成績評価 …34
2 試験 …35
3 休講・補講 …36
4 学生ポータル …36
5 教学関連事務 …37
6 教室設備（通常教室・演習室） …38
7 教材・補助プリントの印刷 …40
8 講師控室 …40
9 ラウンジ …41
10 オリエンテーション期間 …42
11 教育補助員(TA)制度 …42
12 教員ポータル …43
13 FD 活動について …43

参考文献 … 44

19

7. 今後のFD活動に向けて
近年の大学政策にみるFD

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

◇「全学的な改革サイクルの確立のため、ワークショップを中心に「プログラムとしての学士課程教育」という基本的な認識の共有や教育方法に関する技術の向上に資する充実したFDを実施する。そのために、専門家（ファカルティ・ディベロッパー）の養成や確保、活用を図る。」

◇「・・・単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず、広く教育の改善、更には研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般を指すものとしてFDの語を用いる場合もある。」

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012年8月28日　**専門性を高め、幅広く展開**

◇補助事業等の要件として、「学長を中心とした事業実施体制の整備、全教職員へのFD・SDの徹底等を求めるなど、既に様々な先行的な取組が行われている。」　**全学的な取組に**

中央教育審議会大学分科会「大学のガバナンス改革の推進について（審議まとめ）」2014年2月12日

20

本学の姿勢

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

◇「FDの実施自体を目的とするのではなく、FD活動を通じて**「学生に修得させる能力を明確にして体系的な教育課程を提供するとともに、学修の成果を厳格に評価する」**ことをめざしています。」

◇「**個々の教員がおこなっている教育改善の蓄積は、潜在的にたいへん大きなものがあるはずです。**これらの豊富な資源を**可視化**するとともに、情報システムを利用しながら、**組織的に体系化**することがいま求められています。教員と職員が協働しながら、より豊かな、質の高い教育の実現をめざして行きたいと思います。」

（大学HPより）

※学内・外の研修会やセミナー等に関する案内、FD活動に関する情報等は、大学HPやポータルにて発信

21

○　2014 年度　第 2 回大学新任教職員研修会

日　時　　9月18日（木）13：00 ～ 16：00
場　所　　第19会議室（青山キャンパス　総合研究所ビル11階）

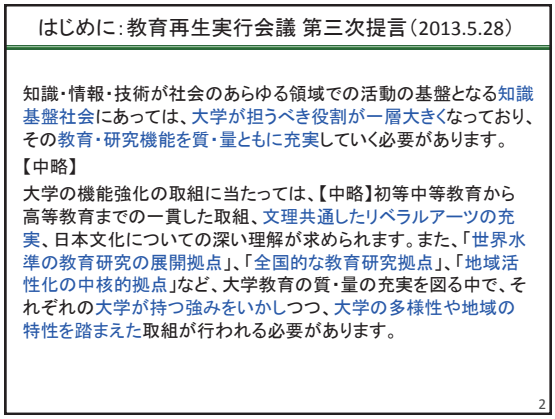
司会進行　　学務部教育支援課　鳥海　貴裕
開会祈祷　　大学宗教部長　伊藤　　悟教授
開会挨拶　　学務及び学生担当副学長
　　全学FD委員会委員長　長谷川　信教授

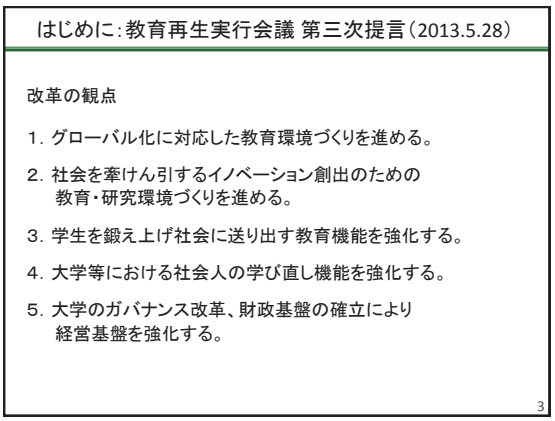
プログラム
　講師：杉原　真晃　先生
　　聖心女子大学　教育学科教育学・初等教育学専攻　准教授

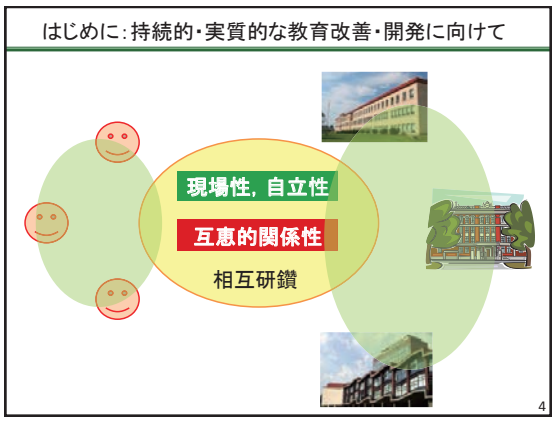
(1)　「学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」についての理論・実践事例
(2)　ワークショップ：青学での実践的課題を語り合う

以上

杉原　真晃　先生　説明用スライド資料







本日の目的

テーマ：

「学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」

目的：

・学生の主体的な学習をいかに引き出すのかについての意識を高める，理論や実践事例を知る。

・それをもとに，授業や業務における不安，課題，工夫，楽しみ等について，考える

・参加者間でそれを共有し，アイデアを交換する

5

本日の内容

(1)「学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」についての話を聞く。

(2) 青山学院大学での実践的課題を語り合う。
授業における，学生の主体的学習についての課題

例）・学生の学習意欲をどう高めるのか
・私語をどのようにコントロールすればよいか
・学生生活全体においていかに主体的・能動的にさせるか
など

6

学生の主体的な学習をいかにして引き出すか

1. ワーク：青山学院大学生の現状認識 【約20分】
2. 主体的な学習が求められる背景
3. 主体的な学習を引き出す教育方法 【約40分】
4. 主体的な学習をしない情意的要因
＜休憩＞ 【約10分】
5. 授業における主体的学習を引き出すための工夫事例 【約30分】
6. ワーク：青山学院大学生の課題についての、要因分析と対応策の検討 【約60分】

7

1. ワーク：青山学院大学生の現状認識

わたしが知っている，青山学院大学生の・・・，

(a) 素晴らしいと感じる学生像と，その具体的エピソード

→ 10分程度。1人2分程度×グループメンバー数

(b) 問題だと感じる学生像と，その具体的エピソード

→ 10分程度。1人2分程度×グループメンバー数

8

2. 主体的な学習が求められる背景

学生参加型の授業が求められる背景 （田中, 2003）

①高等教育のユニバーサル化にともなう学生の学習意欲の低下等への対応

②臨床場面で生きて働く臨床知の獲得や科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性等の育成

9

2. 主体的学習が求められる社会的事情

①高等教育のユニバーサル化にともなう学生の学習意欲の低下等への対応

(1) ボーダーフリー大学の学生の認識 （山田, 2009）
・ボーダーフリー大学の学生は，学習意識が高いが，授業に対する期待が低く，授業外であまり勉強しない
・サークルやクラブ活動にもあまり熱心ではない

(2) ボーダーフリー大学の学生の逸脱行動 （葛城, 2012）
・疑似出席：中抜け，エスケープ等
・ながら受講：私語，携帯電話，居眠り，飲食，ゲーム等
・教員への反抗：暴言，乱暴等

10

1. 主体的学習が求められる社会的事情

②臨床場面で生きて働く臨床知の獲得や科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性等の育成

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～」

(4) 教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28）
「これからの大学教育等の在り方について」

11

1. 主体的学習が求められる社会的事情

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

我が国は未曾有の災害である東日本大震災に見舞われたほか，政治，経済，社会，文化，その他多方面にわたり，当時よりも更に大きな構造的変化に直面している。グローバル化や情報化の進展，少子高齢化などの社会の急激な変化は，社会の活力の低下，経済状況の厳しさの拡大，地域間の格差の広がり，日本型雇用環境の変容，産業構造の変化，人間関係の希薄化，格差の再生産・固定化，豊かさの変容など，様々な形で我が国社会のあらゆる側面に影響を及ぼしている。さらに，知識を基盤とする経営の進展，労働市場や就業状況の流動化，情報流通の加速化や価値観の急速な変化などが伴い，個人にとっても社会にとっても将来の予測が困難な時代が到来しつつある。

12

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

将来の予測が困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる能力（学士力）

- 答えのない問題に解を見出していくための批判的，合理的な思考力等の認知的能力
- チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う，倫理的，社会的能力
- 総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力
- 想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養，知識，経験

13

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

14

cf. アクティブ・ラーニングとは

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（用語集）（2012年）

15

cf. アクティブ・ラーニングとは

発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によっても取り入れられる。

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（用語集）（2012年）

16

cf. アクティブ・ラーニングとは

発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク、のほかにも・・・。
ピア・インストラクション、個人のワーク、質疑応答、等も含まれる。

そのためのツール・環境としての、
クリッカー、ワークシート、ミニッツ・ペーパー、可動式の机・椅子、モバイル・タブレットPC、無線LAN、図書館、ラーニング・コモンズ、LMS、SNS 等。

17

（2. 主体的な学習が求められる背景）

学生参加型の授業が求められる背景　（田中, 2003）

①高等教育のユニバーサル化にともなう学生の学習意欲の低下等への対応

②臨床場面で生きて働く臨床知の獲得や科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性等の育成

① ⇒ 一般的アクティブ・ラーニング
知識の定着・確認を目的としたもの

② ⇒ 高次のアクティブ・ラーニング
知識活用・課題解決を目的としたもの　（河合塾, 2013）

18

（はじめに：教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28））

改革の観点

1. グローバル化に対応した教育環境づくりを進める。
2. 社会を牽けん引するイノベーション創出のための教育・研究環境づくりを進める。
3. **学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する。**
4. 大学等における社会人の学び直し機能を強化する。
5. 大学のガバナンス改革、財政基盤の確立により経営基盤を強化する。

19

(4) 教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28）

3. 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する。

○ 大学は、課題発見・探求能力、実行力といった「社会人基礎力」や「基礎的・汎用的能力」などの社会人として必要な能力を有する人材を育成するため、学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習法（アクティブラーニング）、双方向の授業展開など教育方法の質的転換を図る。また、授業の事前準備や事後展開を含めた学生の学修時間の確保・増加、学修成果の可視化、教育課程の体系化、組織的教育の確立など全学的教学マネジメントの改善を図るとともに、厳格な成績評価を行う。国は、こうした取組を行う大学を重点的に支援し、積極的な情報公開を促す。企業、国は、学生の多彩な学修や経験も評価する。

20

(4) 教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28）

3. 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する。

○ 大学において、学内だけに閉じた教育活動ではなく、キャリア教育や中長期のインターンシップ、農山漁村も含めた地域におけるフィールドワーク等の体験型授業の充実を通じて社会との接続を意識した教育を強化する。その際、学生が働く目的を考え自己成長を促す長期の有給インターンシップを産学の連携により進めていくことも考えられる。また、国は、行政機関における中長期インターンシップの受入れを率先垂範して行うとともに、民間企業の就職・採用活動時期の後ろ倒しも踏まえ、国家公務員試験についても必要な措置をとるよう人事院に要請する。

21

(4) 教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28）

3. 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する。

○ 大学・専門学校等が、地域の人材育成ニーズに応え、地域に貢献できるよう、地方公共団体や地域の産業界等との連携協力や、実践的な教育プログラムの提供などの取組を国が支援する。また、日本の伝統的な産業や優れた技術を伝承する職人等の養成に対する支援に取り組む。

22

(4) 教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28）

3. 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する。

○ 初等中等教育を担う教員の質の向上のため、教員養成大学・学部については、量的整備から質的充実への転換を図る観点から、各大学の実態を踏まえつつ、学校現場での指導経験のある大学教員の採用増、実践型のカリキュラムへの転換、組織編制の抜本的な見直し・強化を強力に推進する。また、学生の学校現場でのボランティア活動を推進するなど、大学と学校現場との連携を強化する。

23

3. 主体的な学習を引き出す教育方法

3-1. 主体的な学習を引き出す方法の全体像

3-2. どのような「主体的な学習」を期待するのか

3-3. アクティブ・ラーニングのメリット、デメリット

3-4. 主体的な学習を引き出すための「評価」

3-5. 主体的な学習にかかる問題・要因と対応

24

3-1. 主体的な学習を引き出す方法の全体像

主体的に学び続ける学生を育成するために必要な検討事項

①制度、カリキュラム、授業、課外活動の検討

②授業者の役割の検討

③学習に影響を及ぼす諸要因の検討

④人員、施設・設備、予算、組織構造の検討

26

①制度、カリキュラム、授業、課外活動の検討

・制度：単位認定、卒業要件、GPA制度、CAP制、
　　教員・学生報償制度、授業アンケートの運用　など

・カリキュラム：講義と演習・実習との連携、授業選択、
　　教養教育・専門教育・キャリア教育の関連　など

・授業：受講人数、学習目標、教授・学習方法、
　　学習環境、授業時間外学習、評価方法　など

・課外活動：クラブ・サークル、ボランティア、自主勉強会、
　　インターンシップ　など

27

②授業者の役割の検討

・研究者、専門家（research, profess）

・教授者、伝達者（educate, transmit）

・学習者の理解者（listen, understand, counsel）

・学習の支援者（advise, coordinate, coach）

・学生と協働者（collaborate, communicate）

28

③学習に影響を及ぼす諸要因の検討

・教育技術

・教育内容に関する知識

・学習者の学習プロセス

・学習環境

・学習者同士の学び合い

・教員の倫理観、学習観

29

④人員、施設・設備、予算、組織構造の検討

- 少人数教育の充実のための人員補強
- 可動式机・椅子のある教室、モバイル端末の貸出等、学習環境の整備
- TA・SA等の学習サポート体制の整備
- ラーニング・コモンズの設置
- LMS、e-learning 等の充実 （cf. 反転授業）
- 給料アップ
- 経営と教育の対話

29

3-2. どのような「主体的な学習」を期待するのか

主体的な学習のあり方、目標の例

- 受動的消費者・能動的生産者 （Riesman, 1986）
- 浅い学習・深い学習 （Biggs and Tang, 2007）
- 協同学習 （Johnson and Johnson, 1991）

→各大学、各学科、コース等で検討・共有

30

cf. 深い学習と浅い学習の理解のレベル (Biggs and Tang 2007)

振り返って熟考する（reflect）
離れた課題に適用する（apply: far problems）
仮説を立てる(hypothesize)
原理に結びつける（relate to principle）
身近な課題に適用する(apply: near problem)
客観的理由をあげて説明する、解説する（explain）
自分なりの理由をあげて主張する、論じる(argue)
関連づける(relate)
中心となる考えを理解する(comprehend :main ideas)
状況や特徴を述べる、記述する(describe)
言い換えていう(paraphrase)
文章を理解する(comprehend: sentence)
確認する、名前をあげる（identify, name）
記憶する(memorize)

Deep
surface

31

cf. 協同学習 (Johnson and Johnson 1991)

	古いパラダイム	新しいパラダイム
知識観	教員が知識を学生に移し、記憶・再現させる	学生が知識を発見・構築・変換するような環境を教員が創る
学生観	受身的な器（教員の知識で満たされる）	自分の知識を積極的に構成・発見・生成する主体
授業の目的	学生を分類・選別すること	学生の能力と才能を開発すること
人間関係	学生間、教員と学生の間で非人間的な関係	学生間、教員と学生の間で人間的なかかわりあい
学習環境	競争的・個別的な学習	クラスでは協同学習、教員間では協同チーム

32

3-3. アクティブ・ラーニングのメリット、デメリット

メリット

- 知の活用や問題の発見・解決のために、ある特定の知識・技能が必要なことが実感できる
- 学習者の学習意欲の向上、知識の定着、知の応用や問題解決の促進をもたらす
- 学生同士、学生と教員のコミュニケーションが盛んになり、学習進捗度・理解度の把握とそれによる授業計画・内容の修正が行われやすい
- 知識を活用・応用する能力が向上する
- 自ら学び続ける習慣や能力が身に付く

など

33

3-3. アクティブ・ラーニングのメリット、デメリット

デメリット

- 教員によるファシリテーションが容易ではない
- 活動的になったが学びが深まっていないこともある
- 学生と教員間で学習目標が共有されない場合がある
- 教えるべき内容が多くて、活動を取り入れる時間的余裕がない
- 教員の負担が高い、偏る
- 学生の負担が高い、偏る

など

34

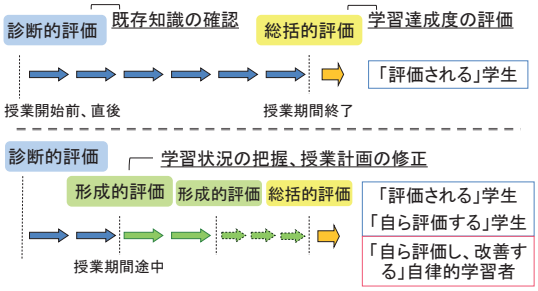
3-4. 主体的な学習を引き出すための「評価」

- 学生が能動的に学ぶように工夫して授業をしているけれど、いっこうに学生は能動的に学習しない。
- 活動的にはなったが、どうも学びが深まっていないように感じる。

→観察、質問紙、インタビュー、テスト等による評価

35

cf. ー診断的評価、形成的評価、総括的評価ー



36

3-5. 主体的な学習にかかる問題・要因と対応

ex.「能動的・深い学習」が発生しない要因

①知識的要因
（能動的・深い学習のあり方を）知らない

②技能的要因：
（能動的・深い学習のあり方を）知っているけれど、
うまくできない

③情意的要因：
（能動的・深い学習のあり方を）知っていて、
やればうまくできないことはないけれど、
やろうとしない・やる気を持たない

37

①知識的要因への対応例：能動的学習

＜授業内＞

・学習方法や学習利用できる場所等について、
教える、実践させてみる

・参照できるテキストを作成し、活用させる

＜授業外＞

・学習を実践させる

・ ICT、Teaching Assistant 等を活用する

・参照できるテキストを作成し、活用させる

38

①知識的要因への対応例：深い学び

＜授業内＞

・学びの基準について教える、実践させてみる

・学生が相互に評価し合う機会を作る

・基準にかかる資料を作成し、参照させる

＜授業外＞

・深い学修にかかる課題を実践させる

・ ICT、Teaching Assistant 等を活用する

・基準にかかる資料を作成し、参照させる

39

②技能的要因への対応例：能動的学習

＜授業内＞

・学習方法や学習利用できる場所等について、
繰り返し教える、実践させる、アドバイスする

・学生が相互に評価・改善し合う機会を重ねる

・授業外での学習を前提とした授業を展開する

＜授業外＞

・自主的な学習を繰り返し実践させる

・ ICT、Teaching Assistant 等を活用する

・参照できるテキストを作成し、活用させる

40

②技能的要因への対応例：深い学び

＜授業内＞

・学生が相互に評価・改善し合う機会を重ねる

・基準にかかる資料を作成し、参照させる

・授業外での学習を前提とした授業を展開する

＜授業外＞

・深い学修にかかる作業と振り返り（自己評価）を
繰り返し実践させる

・ ICT、Teaching Assistant 等を活用する

・基準にかかる資料を作成し、参照させる

41

③情意的要因への対応例

＜授業内＞

＜授業外＞

→対応を考える前に、
なぜ、「やろうとしない・やる気を持たない」のかを検討

42

4. 主体的な学習をしない情意的要因

学習意欲を高めるための「ARCS」モデル（Keller, J. M., 2010）

A：Attention（注意）

R：Relevance（関連性）

C：Confidence（自信）

S：Satisfaction（満足感）

43

ARCSモデル　A：Attention（注意）

①知覚的喚起
概念間の手順や関係をフローチャート・絵コンテ・略図・漫画
など目に見える方法で示す、強いアイコンタクトをとり熱意を
表わす、等

②探求心の喚起
トピックを問題含みに質問する、矛盾を感じさせる、未解決
の問題を説明する、等

③変化性
説明方法に多様性を持たせる（口頭、板書、スライドなど）、
内容の提示と回答を求める事象との間に多様性を持たせる
（質問、練習、パズルなど）、等

44

ARCSモデル　R：Relevance（関連性）

①目的志向性

獲得できる知識・技能が学習者のゴールに関連していることを説明する、ゴールに関連した事例や課題を用いる、獲得した概念やスキルを活用させる応用問題をさせる、等

②興味・動機との一致

個人ごとの達成機会とグループによる協同作業を組み合わせる、目的達成のロールモデルを提示する、等

③親しみやすさ

三人称や人類全般に言及する文章より人称代名詞や人々の名前の使用を含んだ文章を用いる、学習者にとって身近な場面から具体的に実例をあげる、学習者の名前を覚え・呼ぶ、等

45

ARCSモデル　C：Confidence（自信）

①学習要件

学習目標（行動目標）の提示・自己決定、最終レポートの基準や例の提示、等

②成功の機会

学習者に活動（簡単なものから難しいものへ）させ成功を支援する、成功のフィードバックを与える、等

③個人的なコントロール

学習内容・順序や評価方法等を選択させる、学習環境を選択させたり自ら作らせたりする、成功にかかる個人の努力を認める、等

46

ARCSモデル　S：Satisfaction（満足感）

①内発的な強化

新たに獲得した知識技能を使用する機会を与える、タスクを習得した学習者にまだ達成していない学習者を助ける機会を与える、等

②外発的な報酬

賞賛の言葉、個人的な注目（脅威・監視であってはならない）、成果が見えるように提示させる、等

③公平感

学習内容や要求水準等に関して、日常授業と最終テストとの間に一貫性を持たせる、等

47

「ARCS」モデルから見る要因：Attention（注意）

①知覚的喚起

・図解で示されないので理解しにくい。
・アイコンタクトがないので自分事と思わない。
・他に気になることがある

②探求心の喚起

・ただ知識が並べられるだけで思考する機会がなく受け身になる。
・所詮は「教員が知っている」から待っていれば答えが与えられると思う。

③変化性

・授業の展開が単調で退屈、眠くなる。

48

「ARCS」モデルから見る要因：Relevance（関連性）

①目的志向性

・授業内容や学習活動の意義（何に役立つのか、どのように活かすことができるのか）がわからない。
・能動的に学ばなくてもデメリットが生じない。

②興味・動機との一致

・教員が頭に描く学生の実態・ニーズと自分のそれとが異なる。
・そもそも興味がない。反感を持っている。

③親しみやすさ

・身近な・具体的な話がなく、抽象的な話に終始するので、理解が困難となる。

49

「ARCS」モデルから見る要因：Confidence（自信）

①学習要件

・学習の目標や内容の見通しが示されず不安になる。
・学習の目標や内容の見通しを示されても、日が経てば／活動自体に意識を持つことで忘れてしまう。

②成功の機会

・これまで成功体験が少なく、「難しい・できない」とあきらめている。
・「わからない・できない」ことが恥ずかしくて学習に積極的に取り組めない。
・獲得した知識・技能による成功体験を味わう機会がない。

③個人的なコントロール

・教職員の指示に学生が従うだけで、「やらされている」感覚を強く持ってしまう機会が多い。
・学習にかかる環境や内容の要求に教育者側が応えてくれない。

50

「ARCS」モデルから見る要因：Satisfaction（満足感）

①内発的な強化

・暗記ばかりでつまらない。
・理解できていない学生を対象にした授業展開のため、理解できている学生にとってはつまらない。

②外発的な報酬

・批判ばかりで賞賛が得られない。
・浮いてしまうのではないかと周りの視線が気になる。
・「満足できる」活動が身近にある（サークル、アルバイト等）。

③公平感

・かつて言っていたことと異なる授業日程・内容や評価方法を行う。
・私語や遅刻に対する対応が日によって、人によって異なる。

51

5. 授業における主体的学習を引き出すための工夫事例

5-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画

5-2. 学生の主体的な学習を引き出す授業実践

52

5-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画

(1) シラバスの構造

◇授業名
◇授業担当者名，開講日時，対象学年等
◇学習目標・到達目標
◇講義概要
◇授業計画
◇評価方法
◇授業時間外学習の質・量
◇教科書，参考書

53

5-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画

(2)「学習」を軸にしたシラバス

・読者は「学生」。学生が読んで次のことがわかる記述が大切。
- ・何を学ぶのか，どのような知識技能・能力が身につくのか
- ・どのような学習活動をおこなう必要があるのか（聞く，書く，調べる，議論する，体験する等）
- ・どのような知識技能・能力が評価の対象となるのか
- ・成績評価の対象となる活動（試験，レポート等）に，いつ頃，どのように備えればいいか
- ・授業時間外の学習をどの程度必要とするか　など

・学生が重視する項目は，
- ・成績評価にかかる内容と水準，方法（「評価方法」）
- ・学習内容，学習形態（「講義概要」「授業計画」）

54

5-2. 学生の主体的な学習を引き出す授業実践

(a) 授業の概要

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

(c) その他、授業の工夫

55

(a) 授業の概要

Ⅰ. 科目名「教育方法」

◆カリキュラム上の位置づけ
- ・専門科目（教職関連科目）
- ・幼稚園・小学校・中学校・高等学校教員免許選択必修科目

◆受講者
- ・2～4年生（平成26年度25名）

◆授業構造
- ・確認テスト10分、講義60分、演習20分

56

(a) 授業の概要

＜学習目標＞

学習にかかわる各種理論に基づく教育方法の在り方や、教育現場で起きうる諸課題に対する教育実践の在り方について知り、実践の素地を作ることを目指す。

そのような活動を通して、問題を発見する力、情報を収集・分析する力、論理的に考え・表現する力、公共性を身に付けることができ、現在、そして未来のより良い社会・より良い教育を創りだしていく基盤が身に付く。

57

(a) 授業の概要

＜授業内容＞

1. 「教育方法」の概要を学ぶ
2. 学力と学び方1
3. 学力と学び方2
4. 学習意欲の育て方1
5. 学習意欲の育て方2
6. 学習技術の育て方1

⋮

58

(a) 授業の概要

Ⅱ. 科目名「保育課程総論」

◆カリキュラム上の位置づけ
- ・専門科目
- ・幼稚園教員免許必修科目、保育士資格選択必修科目

◆受講者
- ・2年生（某大学短期大学部）。60名×2～3クラス

◆授業構造
- ・確認テスト10分、講義60分、演習20分

59

(a) 授業の概要

＜学習目標＞

保育課程（教育課程）の意義および保育内容の構造などを学び、保育課程の立案・作成ができるようになる

- ・保育課程の意義を理解し、説明する
- ・保育課程の構造を理解し、説明する
- ・保育課程を立案・作成する

60

(a) 授業の概要

＜授業内容＞

保育課程の概要について学ぶ

長期指導計画と短期指導計画の概要について学ぶ

幼稚園における教育課程の意義やあり方について学ぶ

保育所における保育計画の意義やあり方について学ぶ

実践編1：保育所 0～2歳児に関する保育計画について学ぶ

⋮

61

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

学生の状況（問題状況）

（1）メモをとる・質問をする等、
自主的な学習態度・習慣が発揮されない

（2）知識の定着や理解の具合が芳しくない

62

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

学生の状況（問題状況）

（1）メモをとる・質問をする等、
自主的な学習態度・習慣が発揮されない

①「教員の話を聞く」「板書を写す」という学習スタイルが身についてきている（知識的要因、技能的要因）

②何を・どのようにメモすればよいか・質問すればよいかがわからない（技能的要因）

③メモをとらなくても・質問をしなくても大きな問題が生じない（情意的要因：「関連性」の欠如）

63

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

教員の対策

（1）メモをとる・質問をする等、自主的な学習態度・習慣が発揮されない

①「教員の話を聞く」「板書を写す」という学習スタイルが身についてきている（知識的要因、技能的要因）

⇒大学生として求めたい学習スタイルを知らせる、実践させる。

・聞いたことのメモをとる（ペンを片手に話を聴く）
・わからないこと・考えたこと等を書き留める
・わからない・知りたいことがあれば遠慮なく質問する
など

64

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

教員の対策

（1）メモをとる・質問をする等、自主的な学習態度・習慣が発揮されない

②何を・どのようにメモすればよいか・質問すればよいかがわからない（技能的要因）

⇒実践する機会を多くつくる。

隣近所の学生同士で「わからない点」「連想した点」等について意見交換をしてもらう。

他の学生の実践の様子に触れる機会をつくる。

65

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

教員の対策

（1）メモをとる・質問をする等、自主的な学習態度・習慣が発揮されない

③メモをとらなくても・質問をしなくても大きな問題が生じない（情意的要因：「関連性」の欠如）

⇒テキストに掲載されていないが板書して説明をした内容について、確認テストに含める。

他学生とのグループワークを導入し、理解していないとワークがすすみづらくなるようにする。

66

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

学生の状況（問題状況）

（2）知識の定着や理解の具合が芳しくない

④一方向的な講義だけでは、学生が受け身になる、集中しなくなる（情意的要因：「注意」の欠如）

⑤テキストを読む・講義を聞く・ノートをとる・考える・書く等についてのより良い方法を知らない、うまくできない（知識的要因、技能的要因）

⑥知識が活用される機会がない。そのため、学んだ意義・学ぶ必要性を身近に感じることがない（情意的要因：「関連性」「満足」の欠如）

⑦知識が活用される機会が少ない。そのため、学んだ知識の価値や複数の知識間の関係性がわからず知識が剥落する（技能的要因）

67

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

教員の対策

（2）知識の定着や理解の具合が芳しくない

④一方向的な講義だけでは、学生が受け身になる、集中しなくなる（情意的要因：「注意」の欠如）

⇒途中で休憩を入れる。15分をひとまとまりとして授業を構成する。

学生に質問する。

テキストを授業時間外で読んできてもらい（予習）、授業内では教員と学生間の質疑応答や、学生同士のディスカッションを導入する。

68

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

学生に質問する。

・質問をしない理由（祐宗ら, 1994）
　・教師、まわりの学生がどう思うのか気になる
　・質問を悪口として受け取られること・目立つことを嫌がる
　・恥ずかしい、面倒くさい

・講義に対する質問への抵抗感（秋田, 1995）
　・口頭と記述では記述のほうが質問の抵抗感が低い
　・「教師との対人関係」「まわりの人との対人関係」「モニタリングや質問方略の不足」「面倒さ」「自分で解決可能」

・発言のしやすさ（北川, 2000）
　・発言のしやすさは、「発言に対する自信が持てる」「発言に対する肯定的評価を得る」等と関係がある

69

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

テキストを授業時間外で読んできてもらい（予習）、授業内では教員と学生間の質疑応答や、学生同士のディスカッションを導入する。

・次の点について意見交換を行う
　・わからなかったところ
　・もっと知りたいと思ったところ
　・疑問に思ったり反論を持ったりしたところ
　・他学生の「わからないところ」「疑問・反論を持ったところ」への自分なりの意見

70

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

教員の対策

（2）知識の定着や理解の具合が芳しくない

⑤テキストを読む・講義を聞く・ノートをとる・考える・書く等についてのより良い方法を知らない、うまくできない（知識的要因、技能的要因）

⇒読み方・聞き方・ノートの取り方・考え方・書き方等を（繰り返し）指導する。

段階をふんだ活動を設定する。

他学生のノートやワークシートを見る機会をつくる。

71

cf. 段階をふんだ活動の設定

①聴く・読む→考える→書く

②聴く・読む→考える→書く→教員からの質問・反論→書き直す

③聴く・読む→考える→書く→他学生の意見に触れる→書き直す

④聴く・読む→考える→書く→他学生の意見（多様な意見）を想定する→書き直す

72

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

教員の対策

（2）知識の定着や理解の具合が芳しくない

⑥知識が活用される機会がなく、学んだ意義・学ぶ必要性を身近に感じることがない
（情意的要因:「関連性」「満足」の欠如）

⇒形成的評価として確認テストを実施する。

知識活用・メタ認知促進を目的とした事例検討課題を導入する。（個人ワーク、グループワーク）

73

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

教員の対策

（2）知識の定着や理解の具合が芳しくない

⑦知識が活用される機会が少ない。そのため、学んだ知識の価値や複数の知識間の関係性がわからず知識が剥落する（技能的要因）

⇒形成的評価として確認テストを実施する。

知識活用・メタ認知促進を目的とした事例検討課題を導入する。（個人ワーク、グループワーク）

74

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

形成的評価として確認テストを実施する。

・前回、扱った範囲（学んだもの）を1週間後に確認する。
・虫食い箇所にキーワードを記入する。
・成績評価には組み入れない。
・採点は隣近所の他学生がおこなう。
・当該学生がわからなかった箇所を確認できるよう、採点者は色を変えて正しい用語を記入する。
・採点者は、当該学生が次の確認テスト（および本授業での学習）に意欲が出るようなコメントを付ける。

75

(b) 学生の状況（問題状況）と教員の対策

知識活用・メタ認知促進を目的とした事例検討課題を導入する。（個人ワーク、グループワーク）

・学校での指導場面のケーススタディ

・授業で学んだこと（学習態度・習慣、学習技術、学習環境等）を自分自身の大学生活に活かす課題

・ディスカッションやジグソー法を取り入れたグループワーク

76

cf. 学校での指導場面のケーススタディ

＜Caseの例＞

現在、小学校5年生の担任をしています。
4月の授業が始まってしばらくの頃、いつも机の上、中や机のまわりが散らかっている男子児童Uが気になりました。
家庭訪問のとき、母親からは、

「Uは、学校からの連絡プリントをいつもなくしてしまいます。友だちのお母さんから学校のことを教えてもらい、対応しています」

という話を聞きました。このような状況に、どのように対応すればよいでしょうか。

77

cf. 授業で学んだこと（学習態度・習慣、学習技術、学習環境等）を自分自身の大学生活に活かす課題

・1週間の生活実態表（スケジュール帳様式）の作成

→学習・生活目標の設定と生活改善計画表の作成

→その後の1週間の生活実態をふまえた、さらなる生活改善の工夫の考案

（問題解決法（IDEAL）によるプロセス）

78

cf. 問題解決のプロセスとしての IDEAL 法

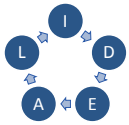
I：Identify problem（問題を同定する）

D：Define problem （問題を定義する）

E：Explore alternative solutions
（解決のための方略を探究する）

A：Apply solutions （方略に基づいて実践する）

L：Look at effect of solutions
（実践の効果を評価する）

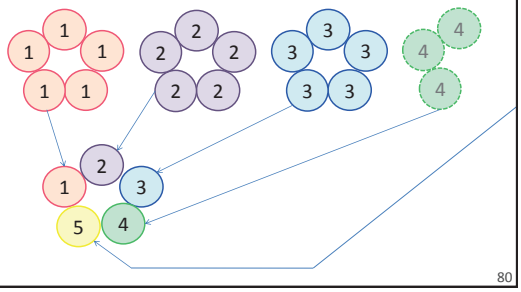


（Bransford et al, 1984）

79

cf.ディスカッションやジグソー法を取り入れたグループワーク

グループ・ディスカッションの全体シェア（報告・質疑応答）を、各グループのメンバーがそれぞれ集まって行う。



80

(c) その他、授業の工夫

・具体例を多く用いる
・授業時間外でのグループワーク課題を導入する
・グループウェア（ICT）を活用する
・段階的な指導・支援を行う
・他の教員の授業を参観し（あるいは、シラバスを見）、学生の能力を把握する

・・・などなど

81

6. ワーク：青山学院大学生の課題についての要因分析と対応策の検討

テーマ：

青山学院大学生の課題（主体的な学習に関するものにかかるもの）に関して，

なぜ，主体的な学習を行わないのか（知識、技能、意欲）

それに対して，どのような対応が有効だと考えられるか

→本日知った内容やこれまでの経験から考察してみる。

82

参考文献

Biggs, J., and Tang, C., Teaching for Quality Learning at University, 3rd edition, Open University Press, McGraw-Hill, 2007.

Bransford, J. & Stein, B. (1984). The IDEAL Problem Solver: A guide for improving thinking, learning, and creativity. New York: W.H. Freeman.

Johnson,D.W., Johnson,R.T., Smith,K.A.（関田一彦監訳）『学生参加型の大学授業―協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部, 2001年.

河合塾『「深い学び」につながるアクティブラーニング―全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂, 2013年.

83

参考文献

Keller, J. M.（鈴木克明訳）『学習意欲をデザインする－ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房, 2010年.

葛城浩一「ボーダーフリー大学が直面する教育上の困難―授業中の逸脱行動に着目して―」香川大学教育研究第9号, 2012年, 89-103.

田中毎実「大学授業論」京都大学高等教育研究開発推進センター編『大学教育学』培風館, 2003年, 21-38.

山田浩之「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第58号, 2009年, 27-35.

84

4.　授業改善のための学生アンケート

本学では、2003年度より、授業内容･方法に関する学生へのアンケート調査「授業改善のための学生アンケート」（以下、本アンケートと略）を全学的に実施している。全学FD委員会の発足に伴い、2009年度からは全学FD委員会が主催となり、本アンケートを実施している。

【実施概要】

［実施の目的］

「大学が、学生により良い授業を提供し、授業改善を図るための手段」として、学生によるアンケートを実施する。

［実施概要］

本アンケートは、全学共通の質問・回答項目にて、演習科目、実験・実習科目等の一部を除いた全ての科目を対象として実施している。

各学期末の授業時間内、授業担当者の教室からの退室を前提とし、無記名による17問の選択式回答（マークシート）及び2問の自由記述式回答から成るアンケート調査を行っている。学部・学科及び授業担当者により、独自に質問を追加することが可能となっている。アンケートの回収は受講生の協力によって行われている。

本アンケートの結果は、当該科目の成績評価への影響がない時期に各授業担当者へ報告される他、一定の集計を経て全教職員及び学生に報告される。一部の学部においては科目単位での結果開示を実施している。

※　本アンケート集計結果の一部を、本学WEBサイト（http://www.aoyama.ac.jp/）に掲載している。

「授業改善のための学生アンケート」設問項目

A.　授業への取り組みに関する質問

1. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか。（複数回答可）
   ［回答］授業内容に興味があったから、教員に魅力があったから、空き時間があったから
   単位がとりやすいから、必須科目だから
2. あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。
   ［回答］ほとんど出席した、3分の2程度出席した、半分程度出席した、3分の1程度出席した
   ほとんど出席しなかった
3. あなたは授業内容を理解するため積極的に取り組んだと思いますか。［※］
4. 1回の授業につき、あなたは予習・復習を平均してどのくらいしましたか。
   ［回答］3時間以上、2時間、1時間、30分以下、全くしていない

B. 教員（授業内容・教授方法）に関する質問

5. この授業は「講義内容」（シラバス）を基本にして授業が行われましたか。［※］
6. この授業の難易度はどうでしたか。
   ［回答］とても難しい、やや難しい、適切、やや易しい、とても易しい
7. この授業の進行速度は適切でしたか。
   ［回答］速すぎた、やや速かった、適切、やや遅かった、遅すぎた
8. 教員の説明の仕方は分かりやすいものでしたか。［※］
9. 教科書や配布資料は授業内容を理解するうえで効果的でしたか。
   ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
   この授業では教科書・配布資料を使用しなかった
10. 黒板やプロジェクター等の使い方は効果的でしたか。
   ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
   この授業では黒板・プロジェクター等を使用しなかった
11. この授業に対する担当教員の熱意が感じられましたか。［※］
12. 授業時間内外における質問への対応は適切でしたか。［※］
13. 補佐教員（助手、TA）のサポートは適切でしたか。
   ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
   この授業には補佐教員がいなかった

C. 授業の成果に関する質問

14. あなたは、この授業の開講時に示された到達目標を十分に達成したと思いますか。［※］
15. この授業の内容は興味深いものでしたか。［※］
16. この授業の総合評価を5段階で評価してください。
   ［回答］とてもよい、よい、どちらともいえない、悪い、とても悪い
17. この授業を履修して、自分のためになったことは何ですか。（複数回答可）
   ［回答］新しい知識・技能が身に付いた、新しいものの見方が身に付いた、
   関連分野をさらに学びたくなった、問題発見・解決能力が付いた
   人間形成に役立った、コミュニケーション能力が向上した

D. 担当教員による個別質問　（13問まで設定可）

E. 自由記述回答

・この授業の良かった点、改善すべき点等について書いてください。
・担当教員による個別質問　（希望教員のみ）

※ 設問3・5・8・11・12・14・15は共通の回答
［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない

2014年度「授業改善のための学生アンケート」実施状況

学期	前期									後期								
ｷｬﾝﾊﾟｽ	青山			相模原			合計			青山			相模原			合計		
学部	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率
青山ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ(専任)	112	103	92.0%	26	24	92.3%	138	127	92.0%	105	87	82.9%	30	28	93.3%	135	115	85.2%
青山ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ(非常勤)	404	316	78.2%	91	79	86.8%	495	395	79.8%	385	311	80.8%	82	77	93.9%	467	388	83.1%
文学部(専任)	63	59	93.7%				63	59	93.7%	128	106	82.8%				128	106	82.8%
文学部(非常勤)	144	123	85.4%				144	123	85.4%	292	238	81.5%				292	238	81.5%
教育人間科学部(専任)	31	29	93.5%				31	29	93.5%	37	32	86.5%				37	32	86.5%
教育人間科学部(非常勤)	30	18	60.0%				30	18	60.0%	89	75	84.3%				89	75	84.3%
経済学部(専任)	78	66	84.6%				78	66	84.6%	85	70	82.4%				85	70	82.4%
経済学部(非常勤)	25	20	80.0%				25	20	80.0%	107	82	76.6%				107	82	76.6%
法学部(専任)	56	49	87.5%				56	49	87.5%	68	56	82.4%				68	56	82.4%
法学部(非常勤)	13	10	76.9%				13	10	76.9%	108	98	90.7%				108	98	90.7%
経営学部(専任)	95	90	94.7%				95	90	94.7%	93	88	94.6%				93	88	94.6%
経営学部(非常勤)	105	88	83.8%				105	88	83.8%	135	111	82.2%				135	111	82.2%
国際政治経済学部(専任)	91	74	81.3%				91	74	81.3%	87	69	79.3%				87	69	79.3%
国際政治経済学部(非常勤)	139	109	78.4%				139	109	78.4%	152	116	76.3%				152	116	76.3%
総合文化政策学部(専任)	32	24	75.0%				32	24	75.0%	30	23	76.7%				30	23	76.7%
総合文化政策学部(非常勤)	35	31	88.6%				35	31	88.6%	41	32	78.0%				41	32	78.0%
理工学部(専任)				146	138	94.5%	146	138	94.5%				144	125	86.8%	144	125	86.8%
理工学部(非常勤)				81	72	88.9%	81	72	88.9%				90	88	97.8%	90	88	97.8%
社会情報学部(専任)				91	76	83.5%	91	76	83.5%				73	56	76.7%	73	56	76.7%
社会情報学部(非常勤)				36	32	88.9%	36	32	88.9%				41	34	82.9%	41	34	82.9%
教職課程科目(専任)	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%
教職課程科目(非常勤)	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%
理工学研究科(専任)				44	33	75.0%	44	33	75.0%				35	24	68.6%	35	24	68.6%
理工学研究科(非常勤)				8	7	87.5%	8	7	87.5%				6	5	83.3%	6	5	83.3%
合計	1453	1209	83.2%	523	461	88.1%	1976	1670	84.5%	1942	1594	82.1%	501	437	87.2%	2443	2031	83.1%

＊　前期は前期科目、後期は通年科目および後期科目が対象

＊　実施対象科目は演習・実験・実習科目等を除く全開講科目、ただし演習科目等については学部の判断により実施する科目がある

＊　実施率は小数点第2位を四捨五入した

5. 学生 FD スタッフの活動

学生FDスタッフ活動とは、学生が大学における授業改善のために行う諸活動を指す。本学では2011年度よりFD推進委員会の直下組織として学生FDスタッフの位置づけが確立され、学生の視点による教育の質の改善に取り組んでいる。本学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動や企画を通して、学生視点で授業や教育のあり方を追求している。

具体的な活動としては、全学的なしゃべり場や学生FDスタッフと教職員との交流会を学内で開催している。学生･教員･職員の3者が集い、大学の授業改善について意見を交わすことで、学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」の実現を目指している。

学外においても、東洋大学、法政大学、立教大学及び本学によって構成される関東圏学生FD連絡会に所属し、積極的に活動している。全国規模で開催される学生FDサミットにも例年参加し、他大学での学生FDスタッフ活動や教育改善への取組から学びを得て、その知識と経験を本学のFD活動に活かしている。

○　2014 年度学生 FD スタッフ活動一覧

◆しゃべり場企画

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
しゃべり場	2014年6月4日（水） 4時 限（15:05 ～ 16:35）	青山キャンパス17716教室	学生 教員 職員	今も良いけどもっと楽しく授業を受けたい！より良い青学ライフを送りたい！と思っているあなた！日頃の授業について気になる点や、もっとこうであって欲しいという思いを仲間と共有する事で、改善へ向けて一歩踏み出してみませんか？意見セッションを通じて学校授業で気になることについて様々なことを話し合い、気づきを得る。	学生FDスタッフ主催、FD推進委員会・教育支援課共催 学生5名、職員1名、学生FDスタッフ4名での開催

◆学外イベントへの参加

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
2014年度第1回学生FD活動連絡会議	2014年6月7日（土）	東洋大学白山キャンパス	学生	2014年度の各大学の活動の充実に向けた情報交換	本学学生FDスタッフ3名参加
2014年 第1回 研 修 セミナー（ワークショップ）	2014年6月7日（土）	東洋大学白山キャンパス	学生	アクティブ（Active）なラーナー（Learner）を増やすために～学生の意識改革をめざして～	本学学生FDスタッフ6名参加
学生ＦＤサミット2014夏	2014年8月23日（土）、24日（日）	京都産業大学	学生 教員 職員	あなたがキヅク未来	本学学生FDスタッフ4名、職員1名参加
2014年度第1回神奈川大学FD研修会	2014年11月8日（土）	神奈川大学	学生	「大学教育の再構築－学生を成長させる大学へ―」	学生FDスタッフ1名参加
大学教育再生加速プログラム(AP)推進フォーラム	2015年2月21日（土）、22日（日）	横浜ベイホテル東急	学生	「学生のための、学生を成長させる「学修成果の見える化」とは」－学生の主体的な学びの確立をめざして－	学生FDスタッフ1名参加

◆学生FDスタッフと教職員の交流会

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
学生FDスタッフと教職員の交流会	2014年7月12日（土）9:30-11:00	第17会議室	学生FDスタッフ、全学FD委員（教職員）	・教職員のFD活動の内容（取り組み）と学生のFD活動の内容（取り組み）の共有 ・青学生の授業に対する意識についてどう思うか。 （学生側、教職員側、両者からの意見を聞いてみたい） ・どうすれば学生の意識を変えることができるか。 （今年度の活動「自ら考え、行動するよう、学生に気づかせ、積極的に授業にいきたくなるような活動をし、協力し合って大学を活性化させていく」） ・文系学生と理系学生のキャンパスが全く別になってしまい交流が少なくなったことについてどう思うか。 ・新しい学部の設置について ・（現在の青学といえば、立地条件が良いことがよく挙げられるが）現在の青学の売りとなっている学科や授業はあるか。	学生FDスタッフ4名、教員3名、職員2名参加

○しゃべり場企画

・全学しゃべり場（2014年 6月 4日 4限）

学生FDスタッフ主催の全学しゃべり場が、6月4日（金）4限（15:05 ～ 16:35）17716教室において開催されました。

学生FDスタッフとはFD推進委員会の下で活動する学生団体であり、青山学院大学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動・企画を通して学生視点で授業や教育のあり方を考えています。今回のしゃべり場では、「学生生活について感じること」というテーマの下、議論が展開されました。

学生、職員が集った、全学しゃべり場

グループに分かれ、それぞれが学生生活について日頃気になっている様々な事柄についての意見交換を行いました。より充実した学習、より楽しい学生生活を送るためにはどうしたらいいのか、率直な議論が展開されました。学生だけの議論では気付けなかった職員の視点からの意見を聞き、学生からの疑問に答え、お互い気付きを得ることができた有益な話し合いが行われました。

グループに分かれ、各々意見を交わす

意見交換後は、各グループが話し合いの結果を発表し、他グループの異なる視点での意見を聞くことで、それぞれ学生生活の改善について考察を深めたようです。また、発表された意見は大学へ提出され、授業改善に役立てられます。

各グループによる発表

今回のしゃべり場は学部や学年を越えた学生と職員が集まる、貴重な意見交換の場となりました。

次回開催の際には、学生、教職員の皆さんの更なるご参加をお待ちしています。皆さんの力で、より良い授業をつくり上げていきましょう。

○　学生 FD スタッフと教職員の交流会

学生FDスタッフと教職員の交流会　次第

日　時　2014年7月12日（土）9:30 ～ 11:00
場　所　17会議室（総研10階）

1. 開会挨拶および学生FD活動の紹介

学生FD団体3F代表　３年
宮田　潤

2. 今回の交流会を開催する目的

学生のFDと教職員の取り組んでいる活動をお互いに共有し、理解すること。
そして次につなげ、FDの活動をより良いものにしていく。

3. 歓談および意見交換

・教職員のFD活動の内容（取り組み）と学生のFD活動の内容（取り組み）の共有

・青学生の授業に対する意識についてどう思うか。
（学生側、教職員側、両者からの意見を聞いてみたい）
・どうすれば学生の意識を変えることができるか。
（今年度の活動「自ら考え、行動するよう、学生に気づかせ、積極的に授業にいきたくなるような活動をし、協力し合って大学を活性化させていく」）

・文系学生と理系学生のキャンパスが全く別になってしまい交流が少なくなったことについてどう思うか。
・新しい学部の設置について
・（現在の青学といえば、立地条件が良いことがよく挙げられるが）
現在の青学の売りとなっている学科や授業はあるか。

以上

6. 教育改善・教育プログラム支援制度

2009年度より学内公募による「教育改善・教育プログラム支援制度」を実施している。

この制度は、本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発を支援することにより、教育の改善・改革を進めることが目的としている。学部・学科や研究科、青山スタンダード教育機構、あるいは学部横断的なグループを単位とし、採択されたプログラムに対して、予算補助を行っている。

【実施概要】

［実施の目的］

本学の教育現場において実践され、成果を得られるような「教育内容の質的改善」や「教育プログラムの導入・実施」などの取り組みが期待される。また、得られた成果は全学で共有し、発展的に活用するとともに、将来的には学外GPなどへの発展によって、本学の社会的評価が高められるような取り組みが期待される。

［採択件数］　2～4件程度

［予算配分予定額］　総予算500万円程度（申請額）

使途について

※　懇親会等での飲食代としての使用は不可

※　物品購入費としての使用は、できる限り避けること

※　同テーマの助成金との併用は認めない

［「申請グループ・単位」の考え方について］

申請の単位は、学部・学科、研究科など既存の組織に限定せず、学部・学科等を横断したグループでも可能である。

ただし、本制度の目的を「本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発」としているため、学外者は含めない。

［プログラムの採択・予算配分額の審査および実行後の評価］

大学執行部が選定した、約3名程度の他大学の高等教育の専門家等を外部評価委員が、プログラムの採択、予算配分額の審査、及び実施後の評価を執り行う。

［審査の基準］

・本制度の目的にふさわしい企画であること

・実効性をもち目標を達成する可能性があること

・本学の特徴を生かした企画であること

・予算的に妥当な計画であること 等

［採択後の義務］

期限内に定められた報告書を提出すること

成果について学内発表する機会を設けること

ホームページ、刊行物によって成果を公表すること

［スケジュール（2014年度）］

（2014年3月3日（月））	募集開始
2014年5月9日（金）	応募締切
2014年5月23日（金）～6月6日（金）	評価委員会による審査・配分額の査定
2014年6月下旬	プログラム代表者へ採用・不採用の連絡、採用の場合は決定配分額の連絡、各プログラムの活動開始
2015年2月27日（金）	活動終了、各プログラムより活動報告書及び決算報告書の提出
2015年3月中～下旬	評価委員会による活動成果の審査及び結果講評
2015年5月20日（水）	各プログラムの成果報告会を開催し、取り組み内容を公表

○　2014 年度 「教育改善・教育プログラム支援制度」 採択事業一覧

代表者氏名	諏訪　牧子（理工学部化学・生命科学科）
事業計画テーマ	生命系講義とバイオインフォマティクスの融合型教育プログラム構築
メンバー	田代　朋子、宮野　雅司、阿部　文快
支援金額	1,500,000円
採択理由	本制度の趣旨に合致し、十分な成果が期待できるプロジェクトと考えられる。今年度はe-learning自習支援システムの最初のバージョンであり、その検証実験の成果を反映して、学生達の授業内外の学習の充実につなげていくことを期待する。また、バイオインフォマティクスの進化を踏まえた上で、教材としての充実が必要になるであろう。そのために、教育コンテンツへの追加改善も求めたい。
結果コメント	「課題1」のカリキュラムの策定では、メンバーの合意形成の上に、コンテンツの共通化が図られており、活動の過程にもブレがない。予算も計画通りに執行され、支援に見合う成果につながっている点は高く評価できる。 「課題2」の教育コンテンツの設計や学習画面の表示は、使いやすいユーザーインターフェイスが実現され、eラーニング教材の分析・設計・開発プロセスが整理されている点も評価できる。 今後、本事業の継続にあたっては、クラウドサーバーをより有効に利用する等、新しい教材の更新を容易にしていくことを期待する。

代表者氏名	薄上　二郎（経営学部　マーケティング学科）
事業計画テーマ	海外留学生のキャンパスライフに関する問題点の把握と多言語表記の推進―英語と日本語表記を中心として―
メンバー	平塚　広義、安田　洋史、橘田　正造、近藤　嘉智
採択理由	本制度の目的にふさわしいテーマではあるが、企画の内容説明が不十分である。多言語と記載されているにも関わらず英語表記にのみ触れられており、その整合性と補足説明が必要である。また、予算の執行計画がずさんである。今年度は、海外留学生のキャンパスライフに関する問題の調査を行っていただき、学内の多言語表記の試行をされることを期待する。
支援金額	300,000円
結果コメント	限られた予算の制約の中で、期待以上の調査の実現と成果を得られたことは評価できる。また、予算執行も妥当である。 活動の観点からは、留学生および関係部署へのヒアリング調査が丁寧に行われており、ビジュアルハンドブック等の作成につながった点も高く評価できる。 本プログラムの成果が、例えば多言語の学内案内板の作成等、今後の継続的、効果的な展開につながることを期待する。

○　2014 年度「教育改善・教育プログラム支援制度」採択プログラム活動内容

（2015年5月20日開催　2015年度第１回青山学院大学ＦＤフォーラム
～ 2014年度教育改善・教育プログラム支援制度成果報告会 ～　報告内容より）

・事業計画テーマ「生命系講義とバイオインフォマティクスの融合型教育プログラム構築」

1

生命系講義とバイオインフォマティクスの融合型教育プログラム構築

2015 年　5月20日　17308教室

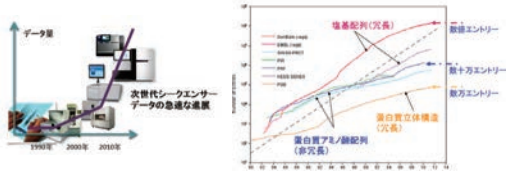
諏訪牧子　理工学部　化学・生命科学科　教授

田代朋子教授、宮野雅司教授、阿部文快教授

2

生命科学と生命情報

現在、ゲノム配列情報やタンパク質立体構造情報、遺伝子発現情報、医療情報など、生命系の大規模かつ異質・多階層・多次元の情報（生命系ビッグデータ）が急増中。



生命科学はこれらの情報を総合的に扱って生命現象の全容を捉えて行く学問に急速に移行しつつある。

3

今後、生命科学に必要とされる人材

生命科学分野を広く、深く理解した上、大量の生命情報解析へバイオインフォマティクスを自由に活用できる人物。

↕

生命科学分野やバイオインフォマティクス分野がカバーする範囲が極めて広く、多様化・高度化が非常に速いため、その習得を極めて困難にしている。

↓

上記の解決を目指した教育プログラムを構築する。

4

問題点1

- 本事業が目的とする人材を育成するには、生命科学の基礎から最先端知識までをバランスよく教育する必要がある
- 現状の化学・生命科学科のカリキュラム全体では、重複する箇所がある反面、必要な部分が抜けている箇所もある。
- バイオインフォマティクス科目が、一昨年度の新設科目であるため、まだ他の講義との連携に於いてその分野横断的な特質が生かし切れていない。

↓

以上を改善したバランスの良いカリキュラムを検討定する必要がある。

5

問題点２

・生命科学分野やバイオインフォマティクス分野は、膨大、広範囲
自分が学習している箇所の分野全体での位置づけが見えにくく
一方で、全体を俯瞰するには学習時間の絶対量が不足。
＝＞知識が有機的に結びつかない。

・本学の学生は、大学で初めて生物学に触れる者が多く、学力差がある。100人規模の教室では、教育効果を高めるのは困難

↓

授業を補う、効果的な自習の支援が必要

6

e-ラーニングの必要性

1）e-ラーニングによる繰り返しの自己学習が効果的
生命科学やバイオインフォマティクスは、生命情報系ビッグデータ扱うため、を最近のIT技術の特性を活かすのに最適。
＝＞e-ラーニングの選択肢は適切。

2）国際的にも、この流れ
ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学が2012年に設立した教育機関（edX）が世界のトップレベル大学の講義をインターネット配信している。

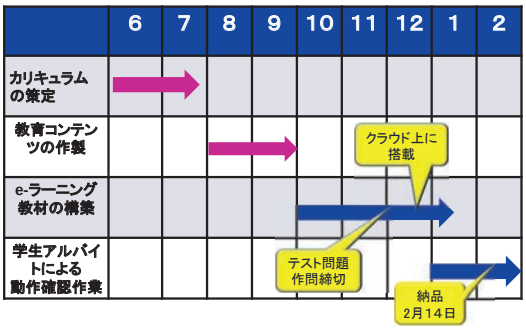
7

本事業の課題

課題　1）　生命科学系講義とバイオインフォマティクス
　　融合型教育カリキュラムの策定

課題　2）バイオインフォマティクスと融合した、生命科学
　　教育支援教材の開発
　　a) 教育コンテンツの作製
　　b) e-ラーニング教材の構築

8



（委託企業）シカデン株式会社：
各大学や産業技術総合研究所などでe-ラーニングシステムを構築してきた実績）

9

カリキュラムの検討

10

物理化学、無機分析化学、有機化学、生命科学
の4系列の専門コア科目を基盤

「化学分野及び生命科学分野から構成される多様な選択科目群から、広い視野と柔軟な思考力を身につけ、学問の発展及び変化する社会のニーズに対応できる人材を養成することを目的とする。」

11

誰が対象なのか？

生物学初学者から、修士レベルまで

学部レベル：生命現象の知識
　　解析に用いるバイオインフォマティクス技術
大学院レベル：最先端研究、社会とのつながり、

数学、物理学などと異なり上記をレベルごとに
切り分けるのは難しい。トピックごとに分けて、各
々が、大学院レベルまで話題を含むことが必要。

12

課題1）生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムの策定

1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期	4年後期
生命科学A（生命科学入門）	生命科学B（セントラルドグマ）岡部F	生命科学C（エネルギー代謝）田代	生命科学D（タンパク質科学）宮原	生命科学E（シグナル伝達）田代		
	生命物質と生体分子 岡部	生体膜 非常勤	分子遺伝学 非常勤	バイオインフォマティクス 岡部		医薬品科学 非常勤
	生体物質分析 木村		代謝と調節 非常勤	バイオテクノロジー 岡部F		
				生物倫理 田島		
				生命科学の最前線 コース教員		

従来の基礎知識を確立し、実際の生命現象やその解析において現在どのような生命情報が産出され、
どのような課題が存在するかの最新知識と、その解決にバイオインフォマティクスをどのように活用するかを教える。

13

課題1）生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムの策定

d（管理用）	Chapt	Sect	ite	subi-item	subsubi-item	title（スライドタイトル）
0-0-0-0-0	B	0	0	0	0	転写と翻訳
0-0-0-0-0	C	0	0	0	0	転写と翻訳
1-0-0-0-0	1	0	0	0	0	染色体
1-1-0-0-0	1	1	0	0	0	ヒトの染色体セット
1-1-1-0-0	1	1	1	0	0	電顕現像写真
1-2-0-0-0	1	2	0	0	0	ゲノム
1-3-0-0-0	1	3	0	0	0	ヌクレオチド(nucleotide)
1-3-1-0-0	1	3	1	0	0	RNA名の決まりこと
1-3-2-0-0	1	3	2	0	0	塩基:ピリミジン塩基
1-3-3-0-0	1	3	3	0	0	塩基:プリン塩基
1-3-4-0-0	1	3	4	0	0	リン酸基
1-3-5-0-0	1	3	5	0	0	5'末端/ペントース
1-4-0-0-0	1	4	0	0	0	核酸(DNA、RNA)
1-4-1-0-0	1	4	1	0	0	DNA(デオキシリボ核酸)二重らせん概念図
1-4-1-1-0	1	4	1	1	0	塩基間の相補性
1-4-1-2-0	1	4	1	2	0	典型的なDNAの構造
1-4-1-3-0	1	4	1	3	0	DNAの構造（DVD）
1-4-1-4-0	1	4	1	4	0	DNAの多形
1-5-0-0-0	1	5	0	0	0	染色体の構造ーDNAの高密度な折り畳み
1-5-1-0-0	1	5	1	0	0	DNAは非常に細くて長い
1-6-0-0-0	1	6	0	0	0	DNAニ重らせんの構造決定
1-6-1-0-0	1	6	1	0	0	構造決定に貢献したこつの研究
1-7-0-0-0	1	7	0	0	0	まとめ

用語、項目の洗い出し
番号付け

- 本年度は、「核が関連する生命現象」に関して生命科学系の講義のカリキュラムを概観。
- 教える必要がある最先端知識で抜けている部分や、各講義でバイオインフォマティクスと融合を図れる課題をピックアップした。

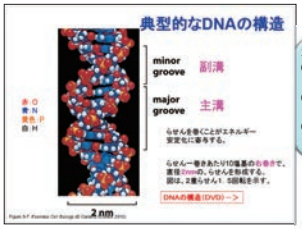
14

教育コンテンツの作成

15

a) 教育コンテンツの作製

教育に効果的なイラスト図や、それらを載せたPPTスライドを作成



コンテンツの一例

本年度はモデルケースとして
❶ゲノム情報の転写・翻訳およびタンパク質の立体構造と機能　90枚
❷遺伝子発現解析および細胞内シグナルパスウェイ　15枚
❸「バイオインフォマティクスの活用」　44枚。

・静止画に限らず一部動画も含む。

・ビジュアルかつ簡潔な説明文を心掛けた。

16

e-ラーニングシステムの構築

17

edX　https://www.edx.org/

生命科学とバイオインフォマティクスの融合と関連が深い内容
8週間分のコース。各教員の講義ビデオを配信している。

生命科学関連　67コース
うち、
バイオインフォマティクス関連5コース

各コースはその完成度によって分類
完成しているものは23件。

各コースで担当する大学とリンクし、
講義を配信。

動画画像のクオリティは極めて高く、これと同じレベルで1コース作成するには、本教育改善・教育プログラム支援制度の予算の数倍はかかる。(業者見積)

同じレベルのシステムをここで作るのは非現実的なため、本制度の予算内でできる内容を追及することにした。

18

Moodle

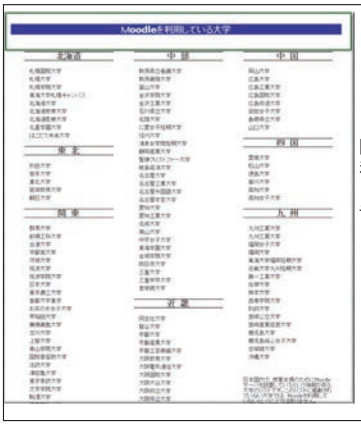
(Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment)

質の高いオンライン学習コースを作ることを支援するパッケージソフト

特徴

1)フリーソフト
2)ライセンスコストは不要。
3)インストールやアップグレードが容易。
Linux用などに自動インストールパッケージが提供されている。
多くのサーバに追加費用なしにインストールできる。
4)機能が豊富
コンテンツ管理、クイズ形式の問題作成や会議システムなど各種機能を持つ。

19



国内では107の大学が
利用している。

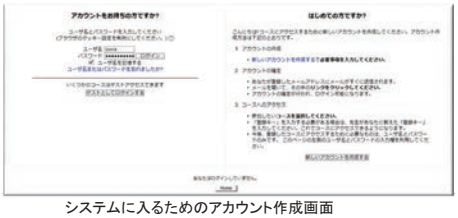
青山学院大学でも

http://www3.u-toyama.ac.jp/kihara/eL/moodle/univ.html
から引用

20

ログイン画面

http://bio-aoyama.jp/bio/moodle/

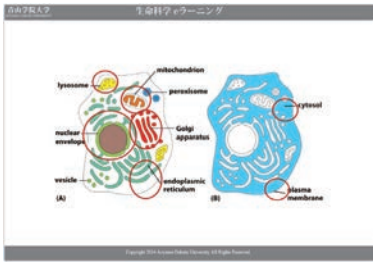


システムに入るためのアカウント作成画面

生命科学系の講義で共通に使う教科書教利用者のみがログインできるようにアカウントとパスワードを作成。
（この本を購入した場合のみに版権を利用できるイラストを含むため）

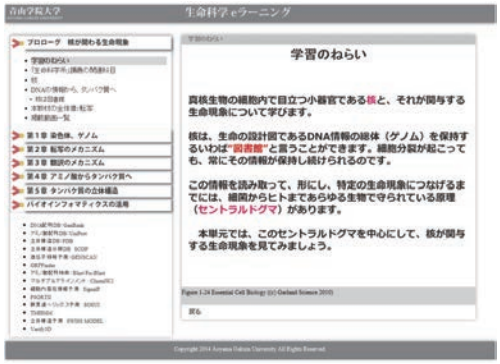
21

ログイン画面



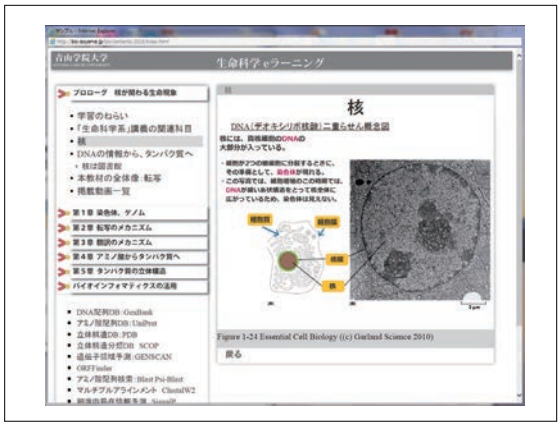
生命科学分野全体を細胞の各小器官が関わる生命現象ととらえて分類し、
それぞれの小器官をクリックするとそれらが関連する生命現象の講義に移行する。
本年度は、モデルケースとして「細胞の核の関わる生命現象」を扱った。

22

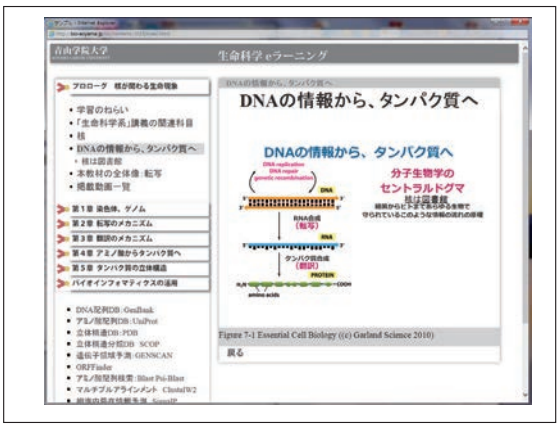


23

24

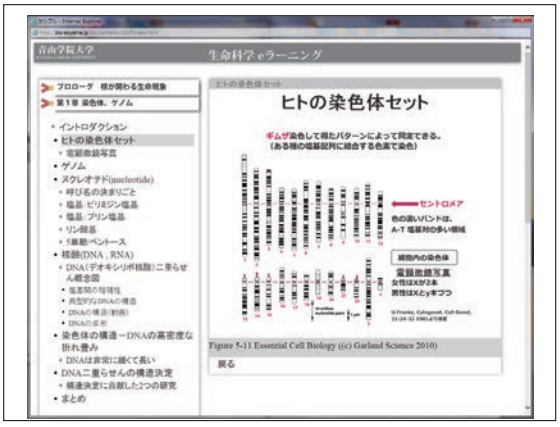


25

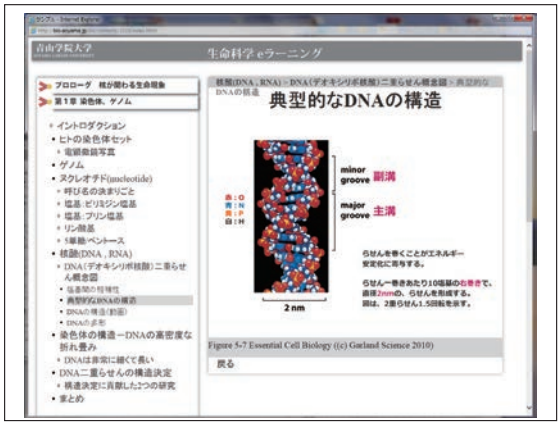


26

27

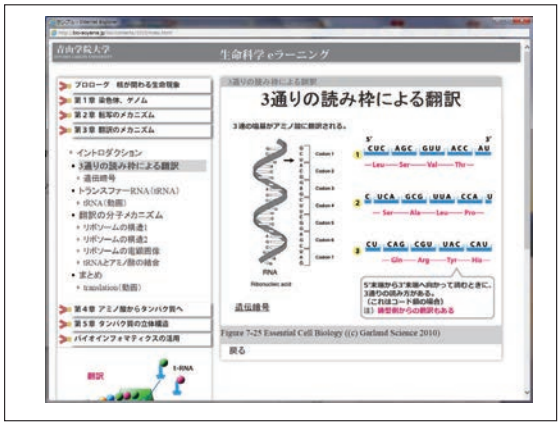


28

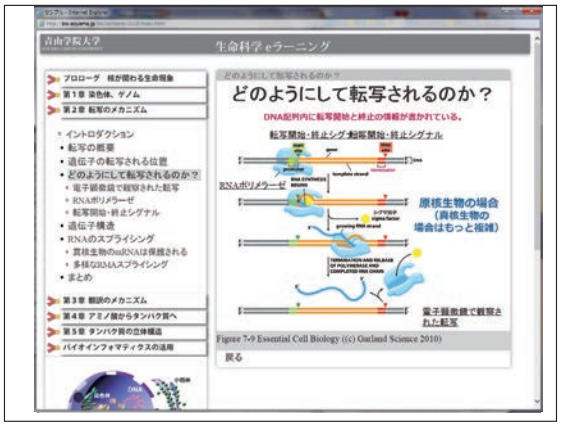


29

30

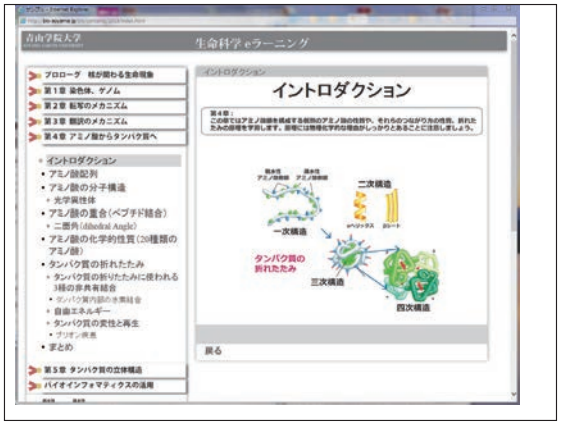


31

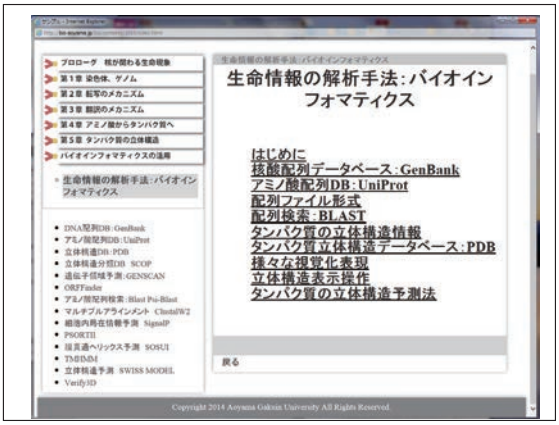


32

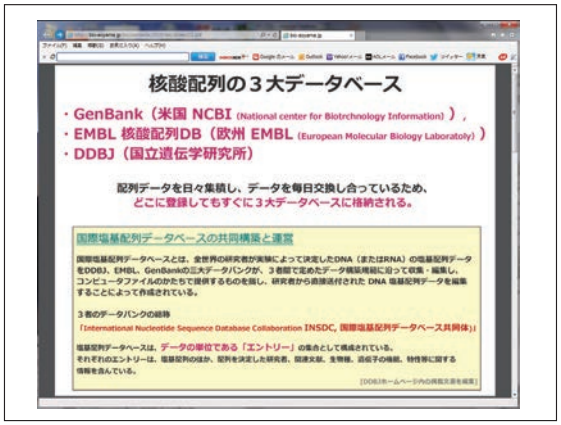
33



34

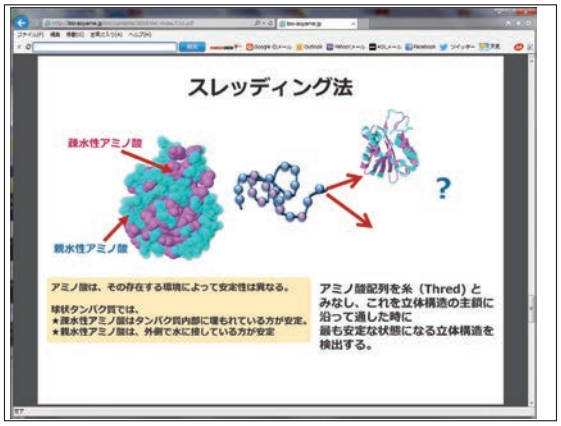


35

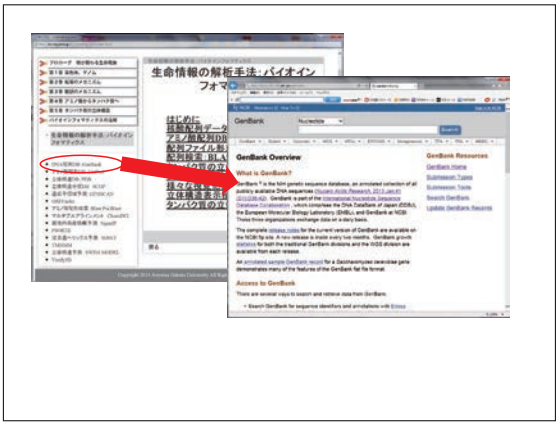


36

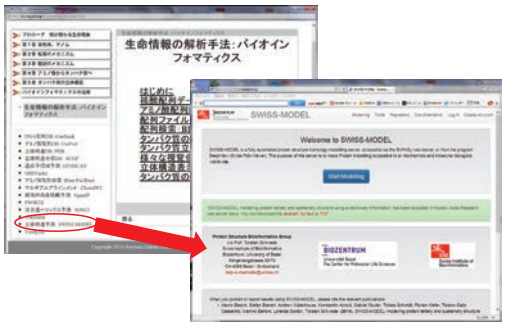
37



38



39



40

41

42

43

44

45

46

e-ラーニングシステムの動作確認

47

e-ラーニング動作確認

システム試作品と完成品（納品物）の動作確認と評価

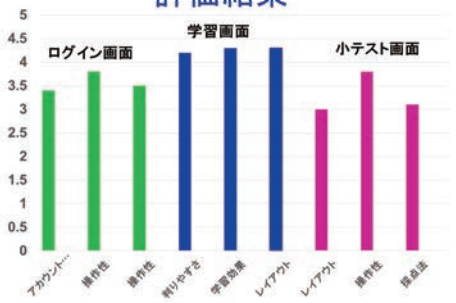
学生アルバイト　28人
実験系22人、計算機系6人
学部4年生18人、修士1年6人、修士2年3人
博士2年1人

システムの画面全てのリンク状況をチェックさせ、
各項目を5段階で評価させ、その加重平均を算出した

気がついた改善点がある場合は自由記載で
レポートさせた。

48

評価結果



ログイン画面、テスト画面に関しては、改善点が多く残されている

49

まとめ

- 本プログラムでは課題1）生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムの策定、課題2）バイオインフォマティクスと融合した生命科学教育支援教材の開発の2課題を行った。
- 課題1）では、「細胞の核に関連する生命現象」に着目して関連科目を整理し、
  キーワード抽出と　それらの関連付けを行った。
- 課題2－a) では150枚程度の教育コンテンツを作成した。
- 課題2－b) では、必ずしもedXと同様なシステムを作る必要は無く予算の範囲内で可能な独自のシステムの構築を目指した。
- 開発環境ソフトとしてMoodleを用い、単に知識を覚えるだけではなく、設問に答えながら知識を深めるようなインタラクティブな実習システムにし、クラウドサーバーにe-ラーニング教材のWEBシステムを搭載した（http://bio-aoyama.jp/bio/moodle/）。
- 学生アルバイトにより、本システムの動作確認と評価を行ったところ、学習教材の操作性や必要性の評価は高かったものの、まだ多くの改善点が残されていることが判った。本プログラムはモデルケースの作成を通じて多くの知見を得た。

50

今後

1）昨年度中に明らかになった改善点に対応してe-ラーニングシステムを改良した上、学習分野を拡大し、内容を深めた上で学生が利用可能なシステムに完成させることをめざす。

2）　細胞核内の生命現象に比べて、新たな学習項目、すなわち別の細胞内小器官の生命現象に広げ開発を続けて行く。

3）　3月の評価委員会において「クラウドサーバーをより有効に利用して新しい教材の更新を有効にすること」とコメントを頂いた点にも対応して行く。

・事業計画テーマ「海外留学生のキャンパスライフに関する問題点の把握と多言語表記の推進」

1

海外からの留学生のキャンパスライフに関する問題点の把握と多言語表記の推進
－英語と日本語の併記を中心として－

2015年5月20日
17308教室

薄上二郎（経営学部）
平塚広義（前経営学部、現地球社会共生学部）

2

発表内容

- プロジェクトの目的
- 活動内容
- SMIPRPとは
- 留学生への質問と回答
- 関係部門への質問と回答
- ビジュアルハンドブックの概要
- よくある質問への回答
- まとめと今後の取り組み課題

3

プロジェクトの目的

- 海外からの社会人留学生が直面する言語的障壁から生じる問題点を把握すること
- 多言語表記の推進によりキャンパスライフにおける利便性の向上を図ること
- 留学生と他の学生・教職員との交流を促進することを目指すものである

4

活動内容

- 留学生と関係部門に対するヒアリング調査およびフィールドワーク調査を実施した。
- 次に、調査の結果を踏まえ、言語的障壁を低減しキャンパスライフにおける利便性を向上させるために、英語表記によるビジュアルハンドブック（バージョン1）の作成とフィードバック、青山学院大学『学生生活の手引き』の一部の翻訳作業を行った。

5

SMIPRPとは

- 「戦略経営・知的財産権プログラム（SMIPRP）は、世界各国の税関等で指導的役割を担うことを期待される将来のリーダーのために、世界税関機構（WCO：World Customs Organization）のスポンサーシップの下で提供される、1年間の修士課程コースである。
- 2011年4月に開講した。

6

SMIPRPとは

- コース内容は、戦略経営に関する学術的・実践的知識と、知的財産権に関わる実践的な知識の提供という2本の柱で構成され、授業はすべて英語で行う世界中のプロフェッショナルに開かれたコースである。過去4年間の卒業生は、アジア、中東、中南米、アフリカ、欧州からの30ヵ国、約40名になる。

7

選考プロセス（2015年度入学）

◆出願者募集　（2014年6月20日~8月21日）
＊ホーム・ページで募集要項を公開
＊WCOから各国税関に対して通知

◆オンライン・エントリー

◆第一次審査（書類審査）
＊履歴書、推薦書
＊小論文、研究計画書

◆第二次審査（面接審査）
＊Skypeを活用したインターネット面接
＊口頭試問によりコミュニケーション能力を確認

http://aoyamasmiprp.jp

◆奨学金支給審査（WCO）

◆合格者発表（2014年11月13日）

20150318

8

選考結果

2015年度
◆50人が出願、10名が合格
◆出願者の出身国（合計29ケ国）
アフリカ（12）、アジア（10）、中南米（3）、中東（2）、旧ソ連（1）大洋州（1）

2014年度
◆ 56名が出願、10名が合格

2013年度
◆ 48名が出願、10名が合格（1名辞退）

9

出願者出身国（2015年度）

アフリカ地域
ブルキナファソ１
ブルンジ２
ガーナ３
モーリシャス １
ギニナ １
ケニア　1
リベリア1
マラウィ1
モザンビーク　1
ウガンダ３
ザンビア　3
ジンバブエ4

欧州・旧ソ連地域
ウクライナ3

中東地域
ヨルダン１
イエメン3

アジア・大洋州地域
アフガニスタン１
バングラデシュ１
ブータン２
ラオス1
ミャンマー２
スリランカ２
タイ３
ベトナム2
モルジブ　1
インド１
フィジー２

中南米地域
メキシコ １
ベリーズ　1
ブラジル １

10

学生への質問

- Q1：キャンパス内で主にどのような施設を利用していますか。
- Q2：施設を利用したときに英語表記がないために、不便を感じたことがありますか。
- Q3：キャンパス内で主にどのような機器を利用しますか。
- Q4：機器を利用したときに英語表記がないために、不便を感じたことがありますか。
- Q5：キャンパス内で掲示物を見たときに英語表記がないために、不便を感じたことがありますか。
- Q6：キャンパス内でどのような英語表記による掲示物やアナウンスが必要と感じますか。

11

学生から回答（1）

- キャンパス内の施設全般にわたり、英語表記が少ないために不便を感じる。特に、何らかの操作が必要なとき（自動販売機の利用、トナーの交換、図書館の自動書庫の利用など）に、不便を感じている。

12

学生から回答（2）

- 他方、銀行のATMのように、言語の選択（日本語・英語の切り替え）ができる機器については、不自由を感じない。
- キャンパス内のアナウンスについて、日本語のみであるため、自分たちに関係のある情報か否かを判断できない。

13

学生から回答（3）

- 地震などの自然災害が発生したとき、キャンパス内、通学途中、住居内のそれぞれで、どのように対応してよいかわからず不安である。
- ゴミの分別の意義、分別の仕方をよく理解できない。
- 入学式や卒業式のとき、登壇者（学長、学生）が何を言っているか理解できない。スピーチの内容を知りたい。

14

学生から回答（4）

- 英語のデータベースを活用している人は約半数と、活用率が非常に低い。
- フィットネスセンターの利用方法をよく理解できない。
- 繰り返し質問すると迷惑になると感じ、あきらめるケースが発生している。
- 来日間もない時期は、特に不便を感じる。施設や機器は１～２回使うと慣れてくる。

15

関係部門へのヒアリング調査

- 関係部門へのヒアリング調査
- 関係部門として、国際交流センター、購買会・食堂、図書館、経営学部教務担当、学生生活課に対し、2014年7月から2015年１月にかけて、個々にヒアリング調査を実施した。

16

購買会・食堂部門へのヒアリング（2014年7月）

- 留学生による食堂の利用状況や、留学生に対する取り組みについて質問した。ヒアリングの結果、留学生の利用は少数にとどまることが明らかになった。
- メニューの理解については、写真を添付するだけでは不十分で、料理に使われている材料の説明をするために、豚、牛、鶏などを表す印をつける必要であるという指摘があった。現在のところハラルフードは提供していないが、ハラルフレンドリーフードは提供しているという。
- 「食べ終わったらトレイを下げてください」などの表記も英語を併記する必要があると指摘された。

17

図書館へのヒアリング（2014年12月）

- 留学生による図書館の利用状況、図書館利用に関する質問の傾向や内容、英語に翻訳されている印刷物の内容などについて質問した。ヒアリングの結果、4月、7月、9月、10月に留学生の利用率が高いことがわかった。留学生のために、自動書庫の利用方法、施設の配置、指さしマニュアルなどが英語表記で整備されていることが明らかになった。
- 返却の延滞に対するペナルティについて、留学生が理解しにくいと指摘された。

18

フィールドワーク調査・その他

- 政策研究大学院大学（GRIPS）における観察調査、キャンパス内の写真撮影、英文による学則の有無および既存表記の著作権に関する確認作業、他機関に対する状況調査を、それぞれ2014年11月から2015年2月にかけて実施した。

19

ビジュアルハンドブック（バージョン1）

- ヒアリング調査とフィールドワーク調査の結果を踏まえて、留学生向けの6ユニットから構成されるビジュアルハンドブック（バージョン1）を作成した。
- 各ユニットに共通する特徴は、次の3つである。

20

ビジュアルハンドブック（バージョン1）

- 留学生の利用頻度が高い施設、利用してもらいたい施設など、留学生の行動に重点を置いた記述を施した。
- 写真やイラストを多く取り入れて、手順（ステップ）などをわかりやすく示す工夫をした。
- 今後の改定に備え、内容をチェックしやすいように、英語と日本語を併記した。

21

ユニット1：キャンパスマップ

ユニット1：キャンパスマップ

青山キャンパスの全体像を示し、留学生がよく利用する場所・利用してほしい場所を表記した。教室、経営学部教務課（17号館2階スチューデントセンター）、購買会・食堂、図書館、フィットネスセンター、国際会議場、保健管理センター、ウエスリーホール、青学会館などを掲載した。

22

English and Japanese
Campus Life Guidebook
英語日本語
キャンパスライフガイドブック

Unit 1
ユニット1

Campus Map
キャンパスマップ

2015 edition (Ver. 1.0)
2015年度版（Ver.1.0）

Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP Program
青山学院大学SMIPRPプログラム編集

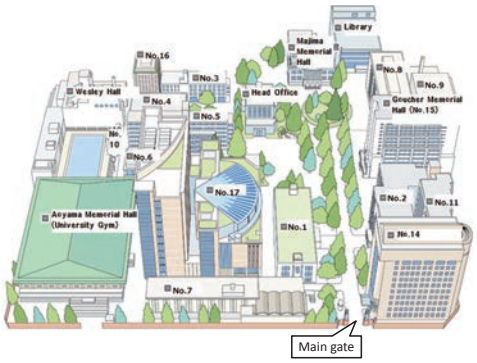
23

Classroom Locations
授業が行われる場所について

Classes are held in the following buildings:
以下の建物（ Building ）の中で授業が行われます。

- University Building 11 (11号館)
- University Building 14 (14号館)
- University Building 17 (17号館)
- University Building 8 (8号館)
- University Building 3 (3号館)

24



25

大学の英文マップ

12　Research Institute Building (University Building 14)

20　University Building 17

12番は、14号館

20番は、17号館

26

Follow the ➞ on the green sign (Student Recruitment and Public Relations Department) after entering the main gate. This leads to University Building 11.

正門を入ると緑の案内図（入学広報部）の→の奥の建物が11号館です。

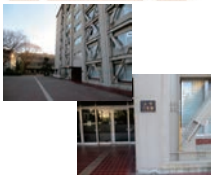
27

University Building 8
8号館

Some classes are held in University Building 8.
この建物は8号館です。

Faculty members have offices in this building.
教員の研究室はこの建物の中にあります

The Global Business Institute Center (GBI), part of the Aoyama Gakuin University Graduate School of Business Administration, is located on the 6th floor of this building.
青山学院大学大学院経営学研究科のグローバルビジネス研究センター（GBI）はこの建物の6階にあります。



28

English and Japanese Campus Life Guidebook
英語日本語
キャンパスライフガイドブック

Unit 2
ユニット2

How to Use the Cafeteria and Vending Machines
食堂と自動販売機の使い方

2015 edition
2015年度版

Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP Program
青山学院大学SMIPRPプログラム編集

29

Cafeteria
食堂

There are two cafeterias in our university.
大学のカフェテリアは2つあります。

The new one is located in building 17.
新しいのは17号館にあります。

Let's enter the cafeteria and see how to use it.
カフェテリアへ入って使い方をみてみましょう。

30

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

TV screens on the left side of the entrance, up high, display daily choices.
入口の左側上方のテレビスクリーンに日替わりメニューが表示されています。

The food item name (Japanese only) is above the picture, with a number inside a circle at the left.
メニュー名（日本語のみ）の左側に番号が丸で囲んであって、その下に写真が表示されています。

Remember this number and the price of your choice.
あなたが選んだメニューの番号と値段を覚えてください。

31

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

Tickets must be purchased at the ticket machine before getting in line.
食券を販売機で買ってから列に並びます。

32

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

There are two types of ticket machines: [push button] and [touch screen].
食券機は2タイプあります：
[ボタンを押すタイプ]と[スクリーンにタッチするタイプ]

33

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

Insert money.
先にお金を入れます。

Push the correct button (choose by Japanese food name or by the small number inside the circle).
食べたい物のボタン（日本語のメニュー名または丸で囲んだ番号）を押します。

34

How to Buy a Meal Ticket
食券の買い方

Insert money.
先にお金を入れます。

Push the correct button (choose by Japanese food name or by the small number inside the circle).
食べたい物のボタン（日本語のメニュー名または丸で囲んだ番号）を押します。

35

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

The machine will not automatically give change.
おつりは自動的に出てきません。

You must push the change button (black or red circular button).
おつりのボタン（黒または赤の丸いボタン）を押してください。

36

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

Get in line at the food serving counter.
フードサービスカウンターの列に並びます。

*Get in the correct line!
* 列を間違えないように注意してください。

Noodle corner and daily menu items are each have a different line.
麺類と日替わりメニューの列は別になっています。

37

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

Pick up tray and utensils.
トレイと箸類をとります。

Put your ticket on the food serving counter.
食券をフードサービスカウンターに置いてください。

38

How to Use the Cafeteria
食堂の利用の仕方

Cold and hot water, Japanese green tea and condiments are available free from a central service island.

中央に置いてあるお水、お湯、日本茶や調味料はすべて無料です。

39

English and Japanese
Campus Life Guidebook
英語/日本語
キャンパスライフガイドブック

Unit 3
ユニット3

Rules About Trash on Campus
キャンパス内のごみ箱利用のルール

2015 edition (Ver.1.0)
2015年度版

Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP Program
青山学院大学SMIPRPプログラム編集

40

This unit describes rules about trash on the Aoyama Gakuin University campus.
このユニットは、青山学院大学のキャンパス内のごみ箱利用のルールを説明します。

There are 4 types of trash on campus.
キャンパス内には4種類のごみ箱があります。

The rules for trash on campus are different from the rules at you accommodations.
キャンパス内と宿泊施設でのごみ箱利用のルールは異なります。

41

Why are the 4 types of trash?
ごみ箱を4種類に分ける理由

There are two main reasons for dividing trash on campus into 4 types.
キャンパス内のごみ箱が4種類に分けて設置してある主な理由は、2つあります。

There is limited space at disposal areas, so we want reduce the amount of trash sent there. We also want to collect recyclable items as a reusable resource.
少ない最終処分スペースへ行くゴミを減らすため、資源として再利用できるゴミを集めるためです。

42

Trash Can Setup
ごみ箱の設置のようす

The trash cans on campus are lined up in a set of 4.
キャンパス内のごみ箱は、4つ並べて置いてあります。

Each of the 4 trash cans is set up for each of the different types of trash.
4つのごみ箱はそれぞれ、ごみの素材や内容によって区別されています。

43

The 4 Types of Trash Cans
4つのごみ箱の区別

- Combustibles (もえるごみ)
- Incombustibles (もえないごみ)
- Plastic bottles (ペットボトル)
- Bottles·Cans (ビン・カン)

The trash cans in University Building 17 have pictures and coloring to help you with the different types.
17号館のごみ箱はピクトグラムと色で区別されています。

44

What are “combustibles”?
‘もえるごみ’ の箱に入れるごみ

The items considered as “combustibles” include:
‘もえるごみ’ の箱に入れるごみは次のものだけです。

- Documents that do not contain personal information
  個人情報を含まない書類
- Newspapers, magazines
  新聞、雑誌
- Other paper items
  その他の紙類

etc.

45

What are “incombustibles”?
‘もえないごみ’ の箱に入れるごみ

The items considered as “incombustibles” include:
‘もえないごみ’ の箱に入れるごみは次のものだけです。

- Plastics（プラスチック）
- Metal（金属）
- Pottery（陶器）
- Glass（グラス）

etc.

46

What about “plastic bottles”?
‘ペットボトル’ の箱に入れるごみ

The items that go in the “plastic bottles” trash can are:
‘ペットボトル’ の箱に入れるごみは次のものだけです。

- EMPTY plastic bottles (with or without cap)
- 空のペットボトル（キャップはつけたまま捨ててよい）

Empty all plastic bottles first before throwing away
＊ペットボトルは必ず空にして捨ててください。

47

Items You Cannot Throw Away on Campus
キャンパス内で廃棄禁止のもの

The following items cannot be thrown away on campus.
以下のものは、キャンパス内で廃棄することが禁止されています。

- Trash from your accommodations (apartment)
  宿泊施設（アパート）のごみ
- Documents with personal information
  個人情報を含むもの
- Electronics, including smartphones, printers, etc.
  スマホ、プリンターなどの電子機器
- USB memory sticks, CDs, etc.
  USBメモリー、CDなど
- Hazardous materials (cigarette butts, spray cans, etc.)
  危険物（タバコの吸い殻、スプレー缶など）
- Other (if it’s unclear where to throw it away)
  その他（どこに捨てて良いか不明のもの）

48

Documents with Personal Information Cannot Be Thrown Away
個人情報を含むものの廃棄禁止

Documents that contain personal information should not be thrown away in trash cans.

個人情報を含むものは、ごみ箱にすてないでください。
Example [例]:

- Documents with names, email, addresses, etc.
  個人の名前、アドレス、住所が特定されるもの
- Lists of student names
  学生の名簿
- Lists that show the results and ranking of the university
  大学での成績や成績順位リストがわかるもの
- CV/Resumes
  履歴書
- Medical certificates written by a doctor
  医師による診断書

49

English and Japanese
Campus Life Guidebook
英語/日本語
キャンパスライフガイドブック

Unit 4
ユニット4

Disaster Response
災害への対応

2015 edition(Ver.1.0)
2015年度版

Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP Program
青山学院大学SMIPRPプログラム編集

50

This unit describes the disaster response for earthquakes, typhoons, fires, etc.
このユニットは、地震、台風、火災などの災害への対応を説明します。

It is most important to remember to think about your own safety first.
あなた自身が「自分の身の安全を図る」という意思が最も大切です。

51

University Disaster Response
災害時の大学の対応

Earthquakes
地震

When it has been confirmed that an earthquake of seismic intensity of a lower 5 or greater has occurred in Shibuya, Tokyo, or Sagamihara, Kanagawa, an emergency operations center will be set up on campus, and the situation will be dealt with.
東京都渋谷区または神奈川県相模原市で震度5弱の地震発生の情報を確認した時点で、学内に災害対策本部を設置し、対応にあたります。

Fires
火災

If a fire occurs on campus, or a fire occurs nearby with the possibility of spreading to campus, an emergency operations center will be set up immediately, the private fire department will be called in, and the initial fire will be dealt with.
学内または学内への延焼の可能性のある近隣で火災が発生した場合、直ちに災害対策本部を設置し、自衛消防隊を招集し、初期消火にあたります。

Other disasters
その他

If it is estimated that damage from a natural disaster will increase, an emergency operations center will be set up based on the decision of the president, and the situation will be dealt with.
自然災害の発生による被害の拡大が予測される時、学長の判断により災害対策本部を設置し、対応にあたります。

52

Response to Earthquakes
地震への対応

The response to a large earthquake is different based on the situation.
大きな地震が発生した時の対応を、主要な状況の別に説明します。

53

If There is Unexpected Heavy Rain
集中（ゲリラ）豪雨がきたら

Unexpected heavy rain is called "guerrilla rain" in Japanese, and it means very heavy rain in a short amount of time.
集中（ゲリラ）豪雨は、短時間に非常に激しく降る雨です。

There is a possibility of flooding. Move away from dangerous places, such as low ground and near rivers, and move to as a high a place as possible.
冠水や氾濫の可能性があります。低い土地や川の近くなどの危険な場所から離れて、できるだけ高い場所に避難してください。

54

If There is Snow
雪が降ったら

In Tokyo, it may snow between January and March.
東京では、1月～3月に雪が降ることがあります。

When it snows, the roads and walkways become slippery. Please be careful not to fall. Try wearing some non-slip shoes.
雪が降ると、道路で滑りやすくなります。転倒に気をつけてください。滑りにくい靴をはいてください。

Public transportation may stop if there is snow.
雪が降ると、交通機関がストップすることがあります。

If a lot of snow falls in one day, classes may be canceled for the day.
雪が多く降ると、休講になることがあります。

55

English Information Service
英語による情報配信サービス

Tokyo Metropolitan Government
Disaster Prevention Website

Tokyo Metropolitan Government Disaster Prevention Website
東京都防災ページ
http://www.bousai.metro.tokyo.jp/foreign/english/index.html

56

English Information Service
英語による情報配信サービス

This is the official account of Foreign Nationals' Affairs Division, Ministry of Foreign Affairs.
This Facebook account aims to provide information that foreign nationals in Japan may need in case of large-scale disasters, and it also aims to share information with government-related organizations. For individual inquiries during non-emergency situations, please contract the local government or other relevant organizations.
大規模災害の発生時に、外国人が必要とする情報の提供及び関連団体等との情報共有を行うことを目的としています。平常時は、個別のご質問には対応しておりませんので、自治体や各種団体へお問い合わせください。

Ministry of Foreign Affairs Foreign Division's Facebook Page
外務省外国人課／Facebook
https://www.facebook.com/mofa.saigai

57

English Information Service
英語による情報配信サービス

Tokyo Amesh is Rainfall information system

Tokyo Amesh
東京アメッシュ
http://tokyo-ame.jwa.or.jp/en/index.html

Tokyo Fire Department (English site)
東京消防庁 （英語サイト）
http://www.tfd.metro.tokyo.jp/eng/index.html

58

English and Japanese Campus Life Guidebook
英語/日本語
キャンパスライフガイドブック

Unit 5
ユニット5
Reminder About Rules and Manners on Campus
キャンパス内のルール・マナー・注意喚起
2015 edition(Ver. 1.0)
2015年度版

Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP Program
青山学院大学SMIPRPプログラム編集

59

Rules to Follow
順守事項

The following rules must be followed while on campus. "Guide to Student Life"
キャンパス内では次のことを順守するように定められています。「学生生活の手引き」

- You will not do any sales or publicity-related activities without a license, such as handing out fliers, putting up posters, or using a microphone.
  許可なくビラ・ポスター・マイク等による情宣活動をしない。
- You will not hold fund-raising or sell items without a license.
  許可なく募金もしくは物品の販売をしない。
- You will not smoke outside of designated smoking areas.
  指定した喫煙所以外で喫煙をしない。
- You will not drink alcohol.
  飲酒しない。
- You will not do any other activity that is prohibited by the University.
  その他、大学が禁止する行為をしない。

60

Rules for Smartphones and Cell Phones
スマホ・携帯電話のルール

You may not use smartphones, cell phones, or electronic devices that make a sound while in the classroom, in the library, or in the office.
教室内、図書館内、事務室内で、スマホ・携帯電話、音がでる電子機器を使用することは禁止されています。

You also may not charge smartphones or cell phones in the classroom, in the library, or in the office.
教室内、図書館内、事務室内で、スマホ・携帯電話を充電することは禁止されています。

61

Classroom Conducts and Addressing Disruptive Behaviors

Meaningful and constructive dialogue is encouraged in this class, and requires mutual respect, willingness to listen, and tolerance of opposing viewpoints. Disruptive behaviors, including excessive talking, arriving late to class, sleeping, reading newspapers, using unauthorized electronic devices during class is not permitted. Also, unnecessary use of electronic devices (i.e. cell phones, smart phones, and/or tablet devices) is not encouraged as they create disruptions to teaching and learning during the class hours. Repetitive and seriously disruptive behavior, i.e. fighting, using profanity, personal or physical threats or insults, damaging property, may result in your removal from class in accordance with policies and procedures outlined in the AGU's Student Codes Article 10-2(1). In addition, a student will be subjected to University Policy Article 62 (Removal from the class).

Notes About Class
受講上の注意

62

Warnings About Theft
盗難・置き引きに注意

There have been cases of unattended bags being stolen on campus from classrooms, cafeterias, gym locker rooms, the library, etc.
教室、食堂、体育館更衣室、図書館など、キャンパス内でバッグを放置して、盗難・置き引きの被害にあうケースが発生しています。

Keep valuables with you at all times.
貴重品は、常に身から離さないようにしましょう。

63

Warnings About Theft
盗難・置き引きに注意

Please take extra care in the following locations.
特に次の場所では注意してください。

- Getting up from your seat in the library with valuables left on the table.
  図書館で貴重品を机に置いたまま、席を離れる
- Standing in line at the cafeteria after placing your valuables at a table to save a seat.
  食堂で席取りのために貴重品を置き、列に並ぶ

64

English and Japanese Campus Life Guidebook
英語日本語
キャンパスライフガイドブック

Unit 6
ユニット6
How to Use ProQuest
PROQUESTの使い方
2015 edition (Ver. 1.0)
2015年度版（Ver.1.0）

Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP Program
青山学院大学SMIPRPプログラム編集

65

よくある質問への解答

Q1：なぜ日本語を教えないのか

Q2：英語以外の言語は必要ないのか

Q3：ここまでやる（やってあげる）必要があるのか

66

まとめ(1)

- 海外からの社会人留学生が直面する言語的障壁から生じる問題点
- キャンパス内の施設全般にわたり、英語表記が少ないために不便を感じる
- 地震などの自然災害が発生したとき、キャンパス内、通学途中、住居内のそれぞれで、どのように対応してよいかわからず不安である

67

まとめ(2)

- 資源（金銭的、非金銭的）が限定されている中で、キャンパス内の施設、機器の使い方等すべてを多言語表記することは、不可能・無駄である。
- 留学生の行動パターン、ニーズを特定しそこら優先的に改善した方が良い。
- ビジュアルハンドブックの開発と留学生へのフィードバック活用

68

今後の取り組み課題

- ハンドブックの改定と開発
  IT関係
  フィットネスセンター
  災害・安全対応（AED）
- 先進事例の調査
  名古屋大学など
  紙ベースとスマホベースのハンドブックの作成

7.　学生意識調査

本学では、2010年度より学生の学習に対する期待や姿勢、大学における成長感等に関する調査を全学的に実施している。

各学部や各部門がカリキュラムや学生支援のあるべき姿を検討するにあたり、教職員が共通認識を持ち、FD活動を深めていくきっかけにしている。

この調査は、学生に対しては進路･就職適性検査としての役目も果たしており、学生へのフィードバックに際しては、進路･就職支援部門との連携を図っている。

【実施概要】

○　実施目的

１年生（４月実施）

（学生にとって）　学生生活の目標設定・学びと進路のつながりを意識するきっかけとする

（大学にとって）　新入生の現状把握。PDCAサイクルの起点のデータとする

２年生（４月実施）

（学生にとって）　学生生活の振り返りをもとに、２年次以降の目標の再設定をするきっかけとする

（大学にとって）　１年間の学生生活の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

３年生（４月実施）

（学生にとって）　就職活動のための自己分析のツール。結果を元に自己PRと志望動機の作成をする

（大学にとって）　学生の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

４年生（３月実施）

（大学にとって）　４年間で学生が身につけた力・モチベーションの変化の把握、満足度・成長感を把握し、入学～４年間の総括データとする

○　実施概要

［実施方法］

１～３年生は４月、４年生は後期（11月～３月）に実施する。

マークシート方式のアンケート調査で、設問内容は学年によって異なり、１～３年生は「基礎学力調査」と「学生生活に関するアンケート」の２部構成。所要時間は約90分。４年生は学生生活及び進路選択における満足度に関するアンケートで、所要時間は約30～40分。４年生についてはWEBアンケート調査も実施している。

［実施結果］

アンケート委託業者による回答の集計と分析をおこない、各学生（１～３年生）へフィードバックする。その際、前年以前に受検している場合は経年の変化も掲載する。

［集計結果のフィードバック］

１～３年生については､各自へ回答結果と分析結果をまとめた｢集計結果シート｣を用い､外部講師によるフォローアップ講座（進路指導）を実施している。

また、全実施結果および分析結果を学部教授会にて報告、学部運営の参考としているほか、全教職員対象の報告会を開催し、学院関係者で情報を共有している。

○　2014 年度　学生意識調査　実施状況

1年生

学部	学生数(2014/5/1)	受検者数	受検率
文学部	766	729	95.2%
教育人間科学部	330	327	99.1%
経済学部	561	528	94.1%
法学部	489	471	96.3%
経営学部	511	484	94.7%
理工学部	652	636	97.5%
国際政治経済学部	296	291	98.3%
総合文化政策学部	275	264	96.0%
社会情報学部	211	211	100.0%
合計	4,091	3,941	96.3%

2年生

学部	学生数(2014/5/1)	受検者数	受検率
文学部	742	533	71.8%
教育人間科学部	314	219	69.7%
経済学部	563	304	54.0%
法学部	577	379	65.7%
経営学部	535	217	40.6%
理工学部	581	374	64.4%
国際政治経済学部	312	157	50.3%
総合文化政策学部	256	153	59.8%
社会情報学部	211	185	87.7%
合計	4,091	2,521	61.6%

3年生

学部	学生数(2014/5/1)	受検者数	受検率
文学部	844	625	74.1%
教育人間科学部	321	220	68.5%
経済学部	515	188	36.5%
法学部	508	259	51.0%
経営学部	611	214	35.0%
理工学部	843	548	65.0%
国際政治経済学部	332	142	42.8%
総合文化政策学部	308	122	39.6%
社会情報学部	270	177	65.6%
総計	4,552	2,495	54.8%

4年生

学部	学生数(2014/12/1)	回答者数	回答率
文学部(※)	833	654	78.5%
教育人間科学部(※)	386	281	72.8%
経済学部	674	482	71.5%
法学部	633	430	67.9%
経営学部	665	471	70.8%
理工学部	594	453	76.3%
国際政治経済学部	358	247	69.0%
総合文化政策学部	318	224	70.4%
社会情報学部	235	180	76.6%
文学部第二部	36	14	38.9%
経済学部第二部	2	1	50.0%
経営学部第二部	8	4	50.0%
合計	4,742	3,441	72.6%

※　文学部教育学科および心理学科は教育人間科学部に含む

8.　FD 講演会

○　2014 年度 第 1 回 FD 講演会　（青山学院大学 WEB サイト(http://www.aoyama.ac.jp/)掲載記事より）

9月24日（水）青山キャンパス大会議室において、2014年度第1回FD講演会が開催されました。全学FD委員および学内希望者が参加した本講演会は、玉川大学教学部長 菊地重雄先生を講師として迎え「学生の主体的な学びの実現をめざして―新たなマネジメントシステムの構築―」というテーマの下に進められました。講演後は情報交換会が設けられ、菊地先生を囲んで実りある意見交換がおこなわれました。

講演会

情報交換会

【講演会次第】

日　時	9月24日（水）14：30 ～ 16：00
場　所	大会議室（青山キャンパス　総合研究所ビル12階）
司会進行	全学FD委員会　副委員長　杉谷　祐美子
開会挨拶	学務及び学生担当副学長 全学FD委員会委員長　長谷川　信

【プログラム】

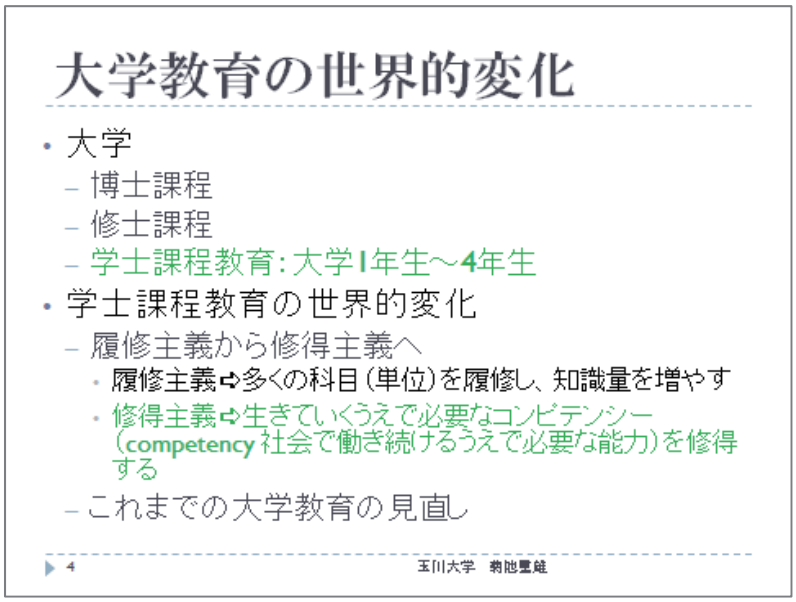
1. 講演

「学生の主体的な学びの実現をめざして―新たな教学マネジメントシステムの構築」

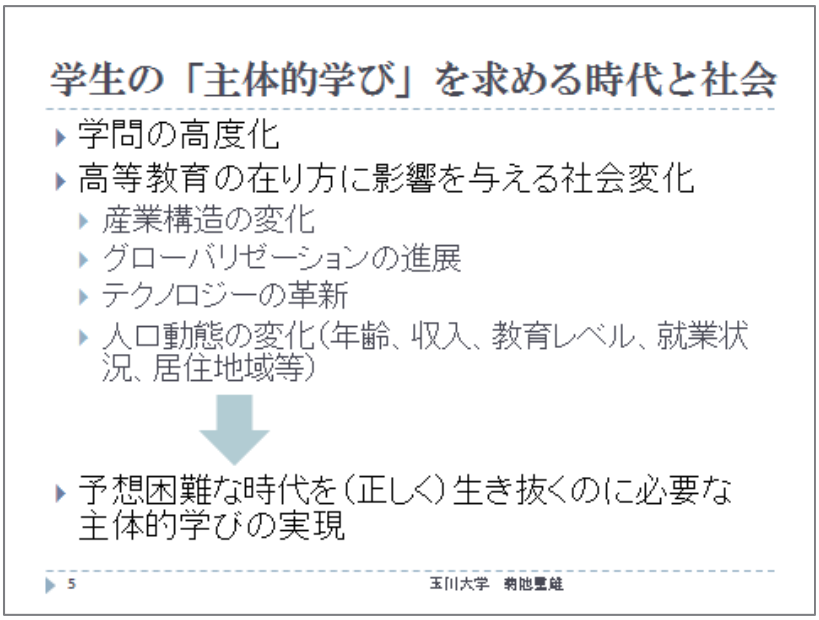
講師　　菊池　重雄先生（玉川大学教学部長・経営学部教授）

① 変化する大学教育

・概念としてのUndergraduateの誕生



日本で一般的に「学部教育」と言われる「学士課程教育」すなわち「Undergraduate」について着目し、講義が行われた。今この「学士課程教育」は世界的に「履修主義」から「修得主義」へと変化している。たくさんの単位を修得したのだからたくさんの知識が身についているだろうという考え方に基づく履修主義を見直し、生きていく上で必要なコンピテンシーをいかに大学時代で身に着けるかということに重点を置いた修得主義を目指す動きがある。たくさん単位を取ればいいのではなく、履修した科目をきちんと学んで自分の能力を開発する必要がある。

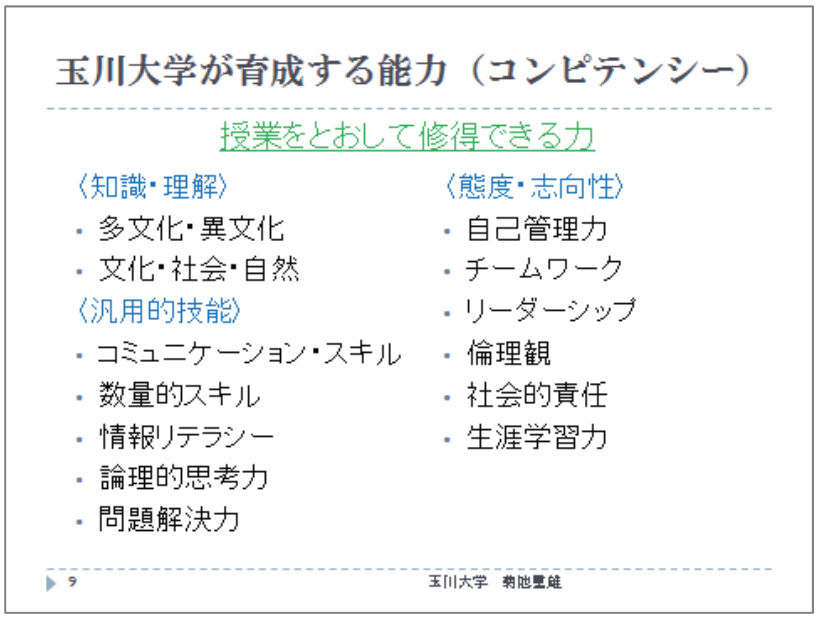


背景として、まず学問の高度化が挙げられる。学問が高度化した現代において、学問領域のピークに達するには博士課程まで進まない限り無理だと言える状況下で、学士課程は専門基礎教育にすぎないという見方がある。2つ目に、社会の変化すなわち産業構造の変化がある。大学時代は将来社会に出て、どんな仕事に就くにしても有益な汎用的能力、

上述のコンピテンシーを身に着ける必要がある。最後に、グローバリゼーションの進展という背景がある。グローバルという言葉は、国と国との関係を示すトランスナショナルもといインターナショナルとは異なる意味で、外国に住む人と日本に住む人との関係を指す。グローバリゼーションは極端に言えばローカリゼーションの裏返しでもある。これらの社会背景をベースに、中教審でも2008年に「学士課程教育の構築に向けて」という答申が出され、修得主義の推進がうたわれている。

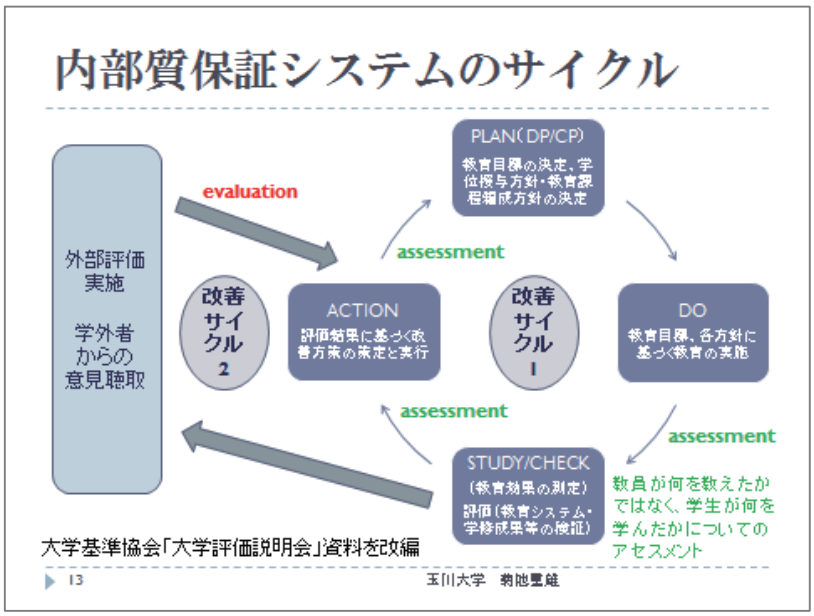
いざ修得主義を実践するにあたって、教職員の役割は学生の能力開発を支援することになる。知識量を増やすことも大事だが、併せて学生の能力開発に関わることが大変重要な課題だ。同時に、そのコンピテンシーの能力は世界的に通用するものでなければならない。日本独自のシステムで世界的に通用させる能力開発はおそらくできない。少なくとも世界と同じシステムを改良しながら能力を養成していくことが、急がば回れではあるが一番良いやり方ではないか。

今後、難関総合大学として生き残る大学と、そのおこぼれをもらって生きる大学と二極化が進むと言われている。その中で難関総合大学を目指す青山学院大学が、その目標を達成できるか否かはこの24年間にかかっている。2020年に生まれた人たちが18歳になるときが重要になってくる。



玉川大学でのコンピテンシーへの取り組みにおいて、「学修力」に重点が置かれている。特にその中でも、コミュニケーションスキルを磨くことに注力している。多くの学生はコミュニケーションスキルとは、単に人とうまくやっていく能力だととらえているが、玉川大学では駄文化、多様性を踏まえた真のコミュニケーション能力の育成を学生、教職員共に目指している。また、コンピテンシー育成のために、能動的な学修、すなわちアクティブラーニングを啓蒙している。玉川大学では、100億円をかけたアクティブラーニングにふさわしい空間づくりに取り組み、今年の12月には完成する。一方で、自学自習時におけるアクティブラーニングへの支援にも取り組んでいる。

学生にどのような能力を身に着けさせたいと考えているのか、ディプロマポリシーに掲げている。そのディプロマポリシーを、何らかの方法で測定可能な内容にすることで、社会で通用する能力を数値化している。そうするとディプロマポリシーに沿ってシラバスも変わってくることになり、授業内容よりも到達目標が重要となる。



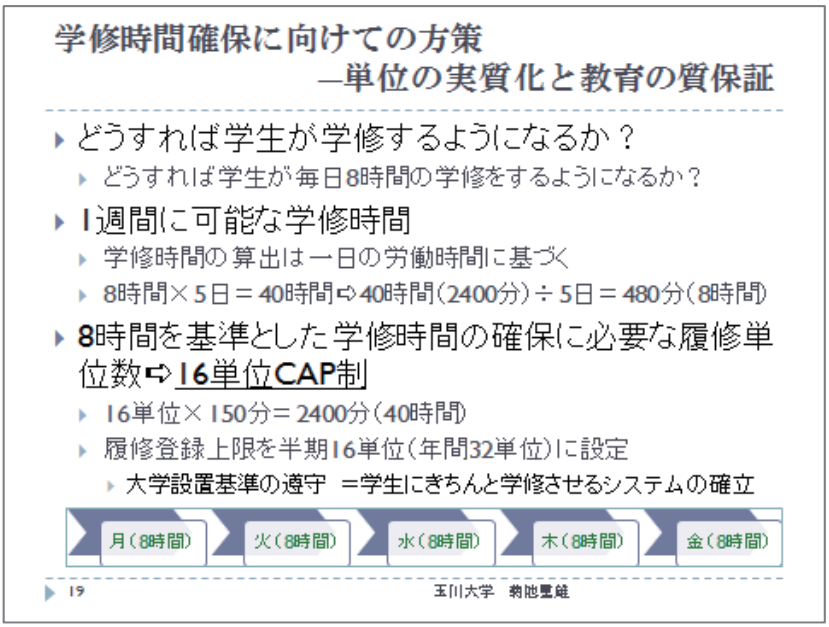
玉川大学ではPDCAサイクルでコンピテンシーの修得に取り組み、まずプランのところで各学部が適切なディプロマポリシーを設定し、アクトでそれを実行する。それが問題ないかチェックし、もっと深めることができなるのではないか研究も進める。そして次の行動に移すという流れで回している。現在の課題としては、一つの学部に複数の学科があり、それぞれが異なるディプロマポリシーを設定しているにもかかわらず同じ学位を出していることが挙げられ、改良を図っている。

② 能動的学修（主体的学修）を促進する教学マネジメントシステム

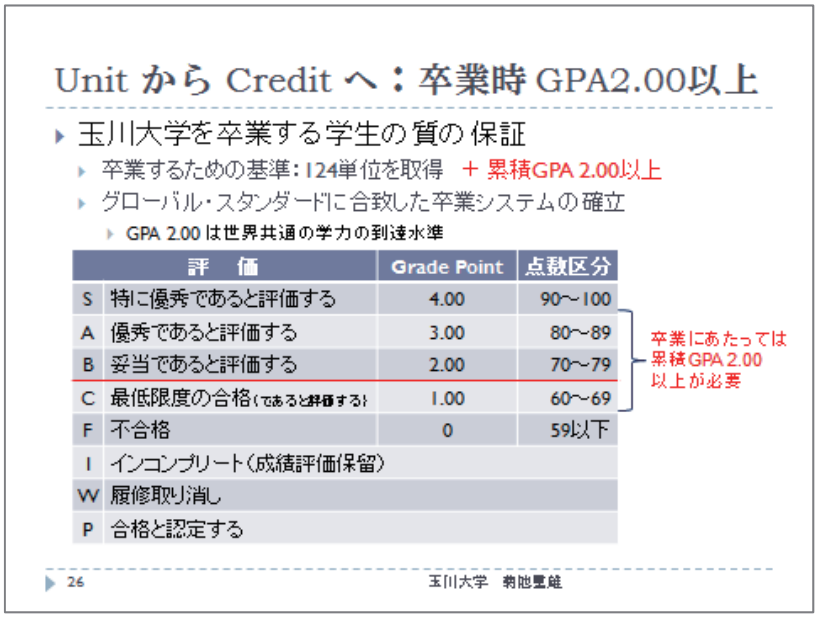
玉川大学が能動的学修を促進するマネジメントシステムを構築するにおいて、目標として下記の3つが挙げられる。

- 学修時間の確保
- 学生の主体的な学びを支援する仕組みづくり
- 学修プロセスのアセスメント

第１に学修時間を確保する、その中核になるのは授業である。きちんと受講することはもちろんのこと、予習が必要になる。MOOCsに代表されるような反転授業で、予習として講義を聴いておいて、授業ではアクティブラーニングを行うということも始まっている。授業が終わった後には復習、言い換えると研究が必要となる。さらには大学を離れてインターンシップや海外に行くこと等も必要になってくるだろう。



大学設置基準で明確に決められている、学生の総学修時間をいかに確保するかが重要になってくるのだが、玉川大学においては通学時間だけで往復4時間を超える学生も多く存在するが、これはすべての日本の大学にとっての課題だろう。そのような生活下において学修時間を確保するために、玉川大学では2013年度から16単位を上限とする、16単位キャップ制を取り入れている。その過程では教授会から猛烈な反対の声があがったが、教職課程、つまり教員養成に重きを置く玉川大学が生き延びるためには、法律である設置基準を無視するような大学であっていいのかと説得を繰り返し、その結果実現に繋がった。教職科目も別枠にせず、既定の単位内の中で免許が取得できるシステムとなっている。



また、玉川大学では卒業時にGPAが2.00を満たしていない学生は卒業させないシステムがある。さらには2.00を割り込んだ学期が3回続くと、その段階で退学通達が出て、通達が出た後はもう復学もできないという厳しいルールで動いている。7800人いる学生の中で退学する学生が250名おり、その半分がGPAを満たしていないが故の退学者である。

また、学修時間を増やす一つのポイントとして重要となってくる自学自習を支えるため、きちんとした教材、教科書

を整備することにも注力している。玉川大学では出版部があるので、必要な教科書は作成できる環境があり、電子化の支援もしている。学生の学修時間は自学自習が中心で、授業はそれを手助けするものという感覚に切り替えないと、学修時間を増やすことは難しい。そう考えるにおいて、授業案内としてのシラバスも重要となってくる。

学生の主体的な学びに向けて

- 大学における学修（一日平均8時間）のかたち：例

	火曜日	水曜日
9:00-10:00	授業“English（ELF 101）”	「比較文化論」の予習
10:00-11:00		
11:00-12:00	“English”の復習・課題（TA等による指導）	授業「会計学」
12:00-13:00		
13:00-14:00	昼休み	昼休み
14:00-15:00	「一年次セミナー」の予習	「会計学」の復習（SAとの協同学修）
15:00-16:00	授業「一年次セミナー 101」	
16:00-17:00		「一年次セミナー」の復習
17:00-18:00	「会計学」の予習	クラブ活動
18:00-19:00		
学修時間	9時間	7時間

23　玉川大学　教育開発

いざ学生に1日8時間学修させるにあたって、帰宅後の学生の監督まではできない。そこで、学生が8時間学内に滞在するような仕組みをつくっている。例えば授業と授業は連続して取れないシステムにして、その間を学修できるような状況にしている。また、昼休みは設定せず、授業も1時間刻みで設定する等の工夫がされている。空き時間に予習、復習ができるように、現在多くのティーチングアシスタント、スチューデントアシスタントも用意し、とにかく大学に滞在させ、家では勉強しなくても済むようなシステムを構築している。

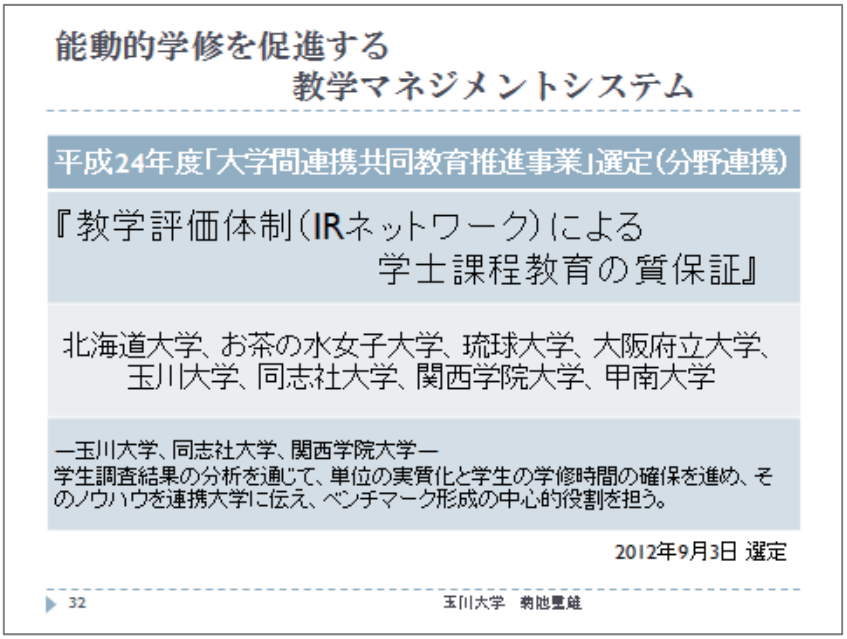
学生食堂と学生カフェの役割

- 生活スタイルの変化と連動する学修スタイルの変化
  - 自分にとって快適な学修空間＋グループ・コラボレーション
  - 許容の限度と新たな社会マナー確立の必要性
    - 多様な学修空間の区別化
- 昼食のための食堂から、朝食・夕食も視野に入れた食堂へ
  - 学生を8時間キャンパスに滞在させる（大学の）責任
  - 健康教育の場としての学生食堂

27　玉川大学　教育開発

いざ学修時間を確保すると、次には学修させる空間を用意する必要が出てくる。一番重要なのは、学生にとって学びやすい学修空間になっているかにある。同時に、これからの時代はグループ学修も強化しなくてはならない。そう考えると、学修空間として通常の教室や図書館を用意するだけではなく、もっと拡大させて考える必要があるだろう。たとえばSTARBUCKSやTully's Coffeeで勉強している学生達にヒントを得て、学生が快適に学習できる場所としてカフェをつくった。その他にも、8時間キャンパスに滞在させるのであれば、学生の健康のために、今までは単に昼食を食べる場所にすぎなかった学食で朝食や夕食も提供するようにしている。大学が快適なはずだと思う空間を提供するのではなく、学生が快適と感じる学修空間を提供することが重要なのだ。

このように学修時間を確保すべく取り組んだ結果、学生が学修した結果をチェックするシステムとして玉川大学ではポートフォリオを用意している。学生に自分でどういう力が身についたかを、コンプテンスにしたがってレーダーチャートで判定してもらい、学修成果を把握してもらう。同じように自分の学生生活に関しても分析し、最終的には学生に自分のURLを持たせて各学生の4年間がここに全て載っているというように整備し、就職活動の際にそれらを発信できるようなシステムを目指している。



また、これらの履修マネジメントシステムが独りよがりなものにならないよう、現在、教学評価体制、IRネットワークによる学士課程教育の質保証事業を文部科学省の補助金で実施している。主に英語力調査と卒業生調査が中心となるが、これを通して玉川大学の立ち位置や、学生が育っているかどうかを把握している。玉川大学が目的としているのは、学生を1人の市民として社会に送り出すことである。その核となるのは初年次教育から始まり、2年次教育、3年次教育そして4年生のゼミナールである。入学時は親に依存している学生たちが、卒業時には親からの援助なしで生きていけるように育てたいと考えている。

2. 情報交換会（16：00 ～ 17：00）

会場　総合研究所ビル11階・ホワイエ

ＦＤ講演会終了後に講師を囲んで茶話会形式で実施。

9. FDEagoプロジェクト

FD活動において、文章やメッセージでの呼びかけだけで、教員に教育の質を向上させるために改善すべき点を認識させ、意識を改革させることは難しく、その効果には限界がある。

そこで、本学のFD活動を推進するためのマスコットキャラクターとして「FDEago」（エフディーゴ）を作成し、2012・2013年度の２年間に期間を限定して、FD活動に関する周知の他、実験的な新しい企画を「FDEagoプロジェクト」として実施することにした。

2014年度は2013年度に引き続き、「Happyくらす作品コンクール」と同コンクール受賞者による座談会を実施した。

○　Happy くらす作品コンクール 2014

2014 年６月 11 日

青山学院大学
Happy くらす 作品コンクール　2014
募集要項

青山学院大学
全学 FD 委員会

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思いは、大学に集う全ての人が願っていることだと思います。そんな思いから青山学院大学での授業の思い出について、学生のみなさんに作品の形で表現していただいて、他の学生たちや教職員と広くその思いを共有してほしいと思っています。みなさんの声を聞かせてください。

1.　テーマ

「心に残る授業」

青学生のみなさんの講義の思い出、心に響いたクラス、自分を変えた授業、目の覚めた講義、元気の出た授業など、講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してください。

2.　応募資格

青山学院大学の学部生・大学院生、校友（複数名での応募可）

3.　応募ジャンル

次の３つのいずれかから選んでください。

① 散文部門：　エッセーなど、文章で表現する作品。最大 2000 字。
② 韻文部門：　詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。
③ 漫画部門：　漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）（最大 A４サイズ用紙 10 枚相当。ただし、提出原稿の用紙サイズは自由）。

※応募作品は未発表のものに限らせていただきます。また、応募作品は他者の権利（著作権、肖像権等）を侵害しないように十分な配慮をしてください。

4. 応募方法

青山学院大学ホームページ（http://www.aoyama.ac.jp/outline/effort/fd/info/detail_08.html）から応募用紙をダウンロードし、必要事項を記入した応募用紙と作品のファイルを添付のうえ、agufd@aoyamagakuin.jp あてにご提出ください。紙媒体での提出を希望する場合には、以下の問い合わせ先に記載されている各キャンパス担当者に直接提出してくださっても結構です。

※応募作品数に制限はありません。一人で複数の題材による応募も可能です。

5. 公開等

①入選した作品は、青山学院大学ウェブサイト等 FD 関連活動の情報を提供する媒体において活用させていただきます。その点、あらかじめご承知おきください。

②入賞者の方々には、１１月下旬に授賞式および座談会を行う予定です。ご出席いただきますよう、お願いします。また、当日撮影した写真及び映像は、Happy くらす作品コンクールの広報活動および青山学院大学の FD 推進活動に使用いたしますので、あらかじめご了承ください。

6. 提出期限

2014年9月27日（土）　必着

7. 選考

選考は大学 FD 推進委員会において厳格に行われます。「大学での講義のよい思い出を伝える、優れた作品になっているか」を主な選考基準とします。

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。

最優秀賞	副賞１万円分の図書カード
優秀賞	副賞５千円分の図書カード
佳　作	副賞３千円分の図書カード
学生 FD スタッフ特別賞	副賞３千円分の図書カード

選考結果は2014年10月末日に大学のウェブサイトで発表するとともに、入選者個人に通知いたします。また、表彰式等の写真につきましては、各種広報媒体に掲載させていただく場合がありますので、予めご了承いただくとともに、ご協力をお願いいたします。

8. お問い合わせ

- 青山キャンパス　学務部教育支援課
  電話　03 - 3409 - 4165
- 相模原キャンパス　事務部学務課　教育支援担当
  電話　042 - 759 - 6003
- メール　agufd@aoyamagakuin.jp

以上

2014年度

Happyくらす作品コンクール入賞作品集

いずれも力作揃いで審査に苦慮しましたが、優秀賞１作品、佳作１作品、学生FDスタッフ特別賞が１作品が選ばれました。

今年度テーマ：「心に残る授業」

講義の思い出、心に響いたクラス、自分を変えた授業、目の覚めた講義、元気の出た授業など、講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してもらいました！

授賞式次第

司会進行　全学FD委員会　副委員長　杉谷　祐美子

1．開会挨拶　学務及び学生担当副学長
全学FD委員会委員長　長谷川　信

2．各賞授与

優秀賞　文学部史学科3年　酒井　優清さん
佳作　国際政治経済学部国際経済学科2年　木村　匠さん

学生FDスタッフ特別賞　文学部史学科3年　酒井　優清さん

3．座談会

Happyくらすコンクールとは

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思い。それは青山学院大学に集う全ての人の願いだと思います。
そこで、青山学院大学での授業の思い出について学生のみなさんに作品の形で表現してもらい、他の学生たちや教職員と広くその思い出を共有できる場として、昨年度より実施しているのがこのHappyくらすコンクールです。

コンクール実施概要

応募テーマは次の３つのジャンルのいずれかから選択。
第1ジャンル：　エッセーなど、文章で表現する作品。最大2000字。
第2ジャンル：　詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。
第3ジャンル：　漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。
副賞として優秀賞には副賞5千円分、佳作には副賞３千円分、学生FDスタッフ特別賞には副賞３千円の図書カードを進呈します。

2014.11.10　青山学院大学　全学FD委員会　無断転載を禁じます

心に残る授業　ー私と韓国語

文学部史学科　３年　酒井 優清

「アニョハセヨ」のあいさつで始まるその授業は、私にとって常に緊張と不安が入り交じっていた。その授業の名は、インテンシブ・韓国語。第二外国語として、学んだ韓国語をさらに究めようとする学生のための授業である。私は今でも、第1回目の授業を覚えている。この授業を履修する際には、受講の認定試験を受けなければならなかった。教室に入ると、すでに女子学生が何名かいた。その後も入ってくるのは、女性ばかりで、チャイムが鳴ったとき、私を除いて全員が女性であった。そして、私を含め人数は10人。問題が配られ、解き始めると、私はわからない問題の多さに唖然とした。答え合わせで、指名された女子学生たちはすらすらと答えていく。英語と違って、1年間しか勉強していない韓国語。男子は自分だけ。本当に1年間、週4コマもやっていけるのだろうか。そのような思いが何度も頭をよぎった。しかし、帰宅後にポータルを見たとき、もう逃げられないと思った。すでに履修登録が完了していたのだ。私が飛び込んだインテンシブ・韓国語は、私にとって、まさに大きな試練の場となったのである。

インテンシブ・コースは、日本人の教員とネイティブの教員が担当する授業である。2回目の授業は、ネイティブの先生であった。私の予感は的中した。先生から韓国語で簡単な自己紹介をするように言われたのだ。私は、単語を書いたメモを見ながら、言うのが精一杯であった。しかし、周りの学生たちは私と違い、メモなど見ることなく、先生の目を堂々と見て、発言していた。この時、私はインテンシブ・コースを受講する意識が私と彼女たちでは大きく違うことに気付かされた。

そこで、私が意識を高めるために実践したことが、誰よりも早く教室に行き、教科書とノートを広げて待つことであった。これは一見すると無駄なことかもしれない。しかし、ひとりだけの静かな教室はいいものである。最初に来ることによって、誰よりも授業に対する思いが強いことを自然と肌で感じることができるからだ。また、余裕を持つことによって、授業に対する緊張感は和らぎ、刻一刻と迫る授業へのモチベーションも上がった。これは、いわば精神統一のようなものである。

次に、同じ授業を受ける学生たちとのコミュニケーションを大切にすることである。学び合う仲間の存在は、自分の意識を高めるための有効な方法である。きっかけは忘れてしまったが、授業を受ける毎に、女子たちといろいろな話をするようになった。特に韓国についての話は、私も勉強になったが、同時に彼女たちの韓国に対する強い関心、興味が伝わってきた。この時、私は心の中で、彼女たちに負けたくない、追いつきたいという思いでいっぱいになった。

この2つのことをとにかく続けた。すると、とんでもない変化が起きた。自然と授業へ行くのが楽しみになっている自分に気付いたのだ。そのきっかけは「早く明日にならないかな。明日のインテンシブ・韓国語の授業がとにかく楽しくて」と私が友人に言ったときであった。これは、自然に出た言葉であった。そこには、かつて授業におびえていた私は存在しなかった。いつの間に、このような変化が起きたのか、私にもよくわからない。しかし、私が自分に向かって言えることはただひとつ。「よかったな」と。こうして、私は1年間、インテンシブ・韓国語を続けることができた。最後の授業では皆で、記念写真を撮ったが、そこには4月のこわばった私の顔はなかった。あるのは、ただ笑顔があふれる私の顔であった。

大学の授業は、学問を究めるだけの場ではない。教員も学生も常に変化する環境の中で、自分自身を成長させる場である。私たちには多くの選択肢が与えられている。どんなに先生が厳しくても、どんなに単位を取るのが大変であっても、そんなことは関係ない。自分の興味や関心に従って、自分を成長させる授業を選ぶことが大切である。

最後に、インテンシブ・韓国語を担当されている金愛慶先生と、生越まり子先生に感謝を申し上げたい。金愛慶先生も生越まり子先生も、私のつたない韓国語を親身に聞いて、いろいろな指導をしてくださった。そして、何より私の努力を認めてくださったことが、本当に嬉しかった。私は現在、韓国語Ⅲの授業を履修している。私がこの最上級レベルの授業に足を踏み入れたのは、インテンシブ・韓国語で学び、鍛えられた自分がいたからである。私は今も、韓国語の習得はもちろん、新たな成長を求めて、突っ走っているのである。

講評（優秀賞）
通常ならば挫折してしまうような自らの「アウエー」な立場から、努力と苦労によって授業を楽しみに思えるところまで成長した作者の様子がよく伝わって来た。自分に対する克己心と周囲とのコミュニケーションにより、授業を何倍も意味あるものにした作者の姿勢を評価したい。「自分の興味や関心に従って、自分を成長させる授業を選ぶ」大学での学びを再確認させてくれた作品だった。学ぶことの楽しさを知り現在も韓国語の学びを進める、作者のさらなる成長に期待したい。

講評（学生FDスタッフ特別賞）
授業による心情の変化、体験を通しての成長が臨場感と共に良く伝わって来た。

真のグローバルな教育とはなんだろうか

国際政治経済学部国際経済学科2年　木村 匠

『今日から、ここがあなたたちのオフィスです』

初回の英語の講義で突然、教授から言われたのは思いもよらないものであった。

昔から授業といえば先生が一方的にある分野について語るものだと認識していた私は呆気にとられるほかなかった。グループでプレゼンテーションを行うという内容なのだが、誰と組んでもいいし、仮にもう少し準備期間が必要な場合は発表の期日を延期することも可能。教授は私たちに自由を与え、何もかも決める権利を与えてくれた。当然、だらける学生もおり、教授の優しさに付け込んで闇雲に発表の延期を求める学生も当然いた。しかし、私にとっては大学での学びそのものについて抱いた想いが180度変わる講義であった。

プレゼンテーションの内容は英語と日本語、二種類の言語で行うように言われていた。だから、どちらか片方の言語しかわからない人にもきちんと自分の意見が通るように準備をしてくる必要があった。私たちのオフィスはこの教室全部。そして、グループの仲間はオフィスでともに同じプロジェクトを進めるチームであると教授はおっしゃった。ほとんどすべての発表準備や互いのスケジューリングを自分たちの手で行わなければならないのは辛い部分もあり、時に意見が割れた際には非常に険悪な雰囲気になったりした。それでも、教授は私たちを信頼し、最後まで自主性に委ねるという方針をとっていた。

その後、二回のプレゼンテーションを経て、早くも15週間という月日が流れた。教授が最後に私たちにかけた言葉、それは、

『君たちには可能性がある。グローバルな時代に生き残っていくためには自由な発想と自由な議論を行っていく必要がある。そのためには、仲間を信じ、仲間とともに同じ目標を目指して歩むことがこれからの時代には求められている。いろんな人種の人と付き合い、理解しあうことがどれほど大切なことなのか……。それを今後の課題として自ら発見していってほしい。どうか、このことを忘れずにいてほしい。今まで、ありがとう。』

縛られたルールや縛られた価値観の下で受ける授業には自ら主体的に行動するという概念は生まれてこない。自由をどのように享受するかは学生次第だが、一方で自由を良しとする教授もいる。

さて、真のグローバルな教育とはなんだろうか。

講評

主体的な学びの場であるアクティブ・ラーニングにはじめて触れた作者が、ときに悩みながらも自分なりに学びを進めていった様子が伝わって来た。大学の自由な環境をどのように享受するかは学生次第であることを悟った作者の姿から、「主体的な学習とは何なのか」を考えさせられる作品となっている。タイトルにもなっている「真のグローバルな教育とはなんだろうか？」といった問いに対して作者が見つけた答えを聞いてみたい。

このコンクールを主催している“全学FD委員会”の“FD”って何？
“FD活動”って、学生も参加できるの？

FDとはFaculty Developmentの略で、授業改善のための組織的な取り組みをいいます。
青山学院本学では、 FD推進委員会直下の組織として学生FDスタッフが活動しています。
大学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動・企画を通して学生視点で授業や教育のあり方を考えています。
学生FDスタッフは随時募集中ですので、ご興味のある方はぜひ教育支援課(agufd@aoyamagakuin.jp)まで、お気軽にお問い合わせください！

2014年度Happyくらすコンクールにたくさんのご応募をいただき、皆さんありがとうございました。
良い授業は教職員だけでは作れません。学生の声を反映させることで、大学の授業を「学生が本当に求める授業」にしてみませんか？
学生FDスタッフも随時募集中です！

全学 FD 委員会主催

2014 年度 Happy くらす作品コンクール 授賞式・座談会

2014 年 11 月 10 日、授賞式が行われ、引き続き「青山学院大学の教育をより良くするには」というテーマの下、座談会を開催しました。
Happy な授業の思い出を作品にして提出してくれた受賞者のみなさんと、全学 FD 委員教職員で意見を交わすことで、学生が望む授業をつくるためにはどうしたらいいのか考察する有意義な時間となりました。

～はじめに～

全学 FD 委員会委員長

学務及び学生担当副学長　長谷川信

長谷川：副学長の長谷川です。私は教務関係、学務関係の仕事を主にしておりまして、その関係で全学 FD 委員会という組織の委員長をしております。所属は経営学部の教員をしています。今日は『Happy くらす作品コンクール』ということで、皆さんに応募していただいて、どうもありがとう。『Happy くらす作品コンクール』というのは、もうご存じの通り、学生の皆さんが実際に授業に参加して、どんなふうに成長したかとか、または大変楽しい授業であったという、むしろ積極的な感想をいただいて、それが先生たちの授業の励みにもなればということで、毎年行っているものです。そういう有益な場として、今後とも続けていければいいと思っています。今日は受賞おめでとうございます。昨年度の『Happy くらす作品コンクール』で、授賞式のあとに懇談会をしたのですけれども、有益なご意見をたくさんいただきました。本日はよろしくお願いします。

杉谷：全学 FD 委員会副委員長の杉谷です。学部は教育人間科学部の教育学科になります。私の専門は教育学の中でも、大学の教育や大学生のことを中心に研究していますので、本学の FD の仕事にも結構長年関わっていくようになりました。ちなみに、松本くんは私のゼミ生で、FD に積極的な学生さんです。よろしくお願いします。

大山：法学部の大山と申します。昨年から全学 FD 委員会の委員になりましたので、ここに列席している次第です。よろしくお願いします。

戸田：全学 FD 委員会の委員で、FD 活動を事務職員として支えております学務部教育支援課の戸田と申します。よろしくお願い致します。

鳥海：同じく学務部教育支援課職員の鳥海と申します。今日はよろしくお願いします。

土居：同じく教育支援課の土居です。よろしくお願いします。

松本：学生 FD スタッフの前代表で、教育人間科学部教育学科 4 年生の松本侑也と申します。本日は我々学生 FD スタッフが選定した学生 FD スタッフ特別賞の授与のため、出席させていただきました。まさか僕が賞状を渡すようなことになるとは思っていなかったのですが。よろしくお願い致します。

長谷川：では、感想からお聞きしましょうか。

酒井：今回の作品は、今まで自分が受講した授業を文章として残しておきたいという思いから応募したのですけれども、このように評価していただいて、このような賞をいただけたことは大変うれしく思っています。ウェブサイトや入賞作品集で、こうして自分が記した文章が出されるということで、多くの方に読んでいただけたらと思っています。今日はありがとうございます。

木村：自身で立てた「大学のコンクール関係に全部応募しよう」という目標が、今回の応募につながりました。「参加することに意義がある」みたいなものです。本当に立派な賞をいただけて、文字数もそれほどありませんでしたし、まさか自分が授賞できるとは思いませんでしたので、すごくうれしく思っています。

～心に残る授業～

杉谷：素晴らしい。ありがとうございました。それでは本格的に座談会を始めます。今回は、「心に残る授業」というテーマでしたけれども、振り返ってみてどうですか。青学の授業で、心に残る授業はいっぱいありますか。

酒井：心に残る授業ですか。

大山：何でこの授業を選んだのですか？酒井くんは韓国語の授業ですが、作品にも一応書いてありますけれども、どうしてこ

の授業を選んだかお聞きしたいです。

優秀賞・学生 FD スタッフ特別賞　酒井優清さん（史学科 3 年）

酒井：私がこの授業を履修したのは、シラバスを見たときに、インテンシブという徹底的に集中してすごくハードに、密度の濃い授業をすると書かれていたからです。そういうことが書かれていると、履修する人もすごく少なくなるのではないかと思いました。本気でやろうと思う人しか集まらないので、そういった中で勉強をしていくというのは、自分をすごく高められるのではないかと思って、履修しました。

佳作　木村匠さん（国際経済学科 2 年）

木村：僕の場合は必修の英語の授業で、受講しました。毎回半期ごとに先生が変わるシステムになっています。この授業は、本当に自由でした。取りあえず、出れば AA をくれます。授業終了間際に入ってきても、出席カードを書かせてくれます。人によっては、「それは良くない」と文句を言う人もいますし、「優しい」と言う人もいますけれども、いろいろな意味で賛否両論のある先生なので、すごく授業の受け応えがありました。まあ良かったと思います。

鳥海：その授業は、一番上のクラスですか。

木村：いいえ、一番下です。

鳥海：レベルごとにクラス分けがされている授業なのですが、大体 30 人もいないですよね？

大山：それで出席カードを使うのですか。

木村：出席を取るという意味ですかね。学籍番号と名前を書くボードがあって、来たときにそれを回すのですけれども、いつでも来れば渡してくれて、出席を取っていました。

大山：そういうふうにやると、「適当にやれば、いいや」ということになりそうなものですが、これを読ませていただくと、皆さん、ちゃんとやられたのですね。

木村：はい。

大山：ちゃんとというか、かなり気楽にもなったでしょうか。同じ目標を持って、みんなでチームワークを組んで、やっていたみたいですけれども、どうしてそうなったのか、何か木村くんのほうで思い当たるようなことがありますか。はっきり言うと、学級崩壊とまでは言いませんけれども、そうなる可能性があった中で。

杉谷：「易きに流れる可能性があるのに」ということですね。

木村：僕自身があまのじゃくな性格がありまして、周りがガーッと頑張ると僕は一番後ろの席に座ってフーンと周りを見ている感じですけれども、せっかくその授業を取ったのですから頑張ろうというのもありました。授業の内容はプレゼンテーションで、僕の得意分野でもありました。自由で制限がないので、パワーポイントを使わなくても、違うソフトでもいいですし、発表の仕方が何でもよかったのですね。ですから挑戦できる環境でした。「パワポしか使っちゃ駄目」とか、「制限時間は 5 分」とか、そういう縛りがあると、逆にやる気をなくしてしまいました。自分の可能性を試す上で、チームのメンバーにも話して、「めっちゃいいのを作ろう」と、やったこともありました。

大山：この授業で、皆さんが最後はそうなりましたか。それとも、多くは適当にやってしまいましたか。どちらですか。

木村：後者です。

大山：やはり後者ですか。

木村：僕らだけがガチで本気でやって、周りは原稿を読んでいたりして、中には USB を忘れてスライドがないチームもありました。寝ていたり、出席だけ取って途中で出て行ったり、確かにいろいろありました。だからこそ、こういう思いが生まれたのでしょうね。

杉谷：お二人とも、語学の授業でしたよね。他の語学と違って、やはりすごく思い入れが出たのでしょうか。

木村：そうですね。

杉谷：その辺りは、酒井さん、どうですか。

酒井：ほかのスペイン語やドイツ語はアルファベットですが、韓国語の場合は、ハングルという独特な文字形態ということで、最初に見たときは、読み方も全く分かりませんでした。「何だろう。不思議な文字の形だな」と思い、「これを勉強したら面白そうだな」と思って、韓国語を第二外国語として選んで入学しました。

大山：私も昔は韓国語をやっていましたけれども、大変でした。当時、私の大学の先生は、出てくれるとうれしいので、出席していれば AA をもらえてしまうという状態でした。なので、私

はほとんど韓国語はできないのですけれども。
杉谷：成績は良かったのですか。
大山：成績は良かったです。ただ、やっていて、辞書ハングルを引いて、同音異義語が 10 個とかあったりして、もう挫折しそうになったような記憶があります。
酒井：そうですね。
大山：漢字で書いてくれれば、こんなことないのにと思ったのですけれども。
杉谷：授業のレベルはすごく高かったということですか。
酒井：そうです。ネイティブの先生と日本人の先生がいらっしゃって、どちらかというと日本の先生方は、「皆さん、これぐらいできるでしょう」という感じで、結構高いレベルを要求されました。ネイティブの先生もレベルは高いですけれども、自分の韓国語がちょっと変でも結構フォローしてくださったりして、「ここはこうだよ」と教えてくださいました。
杉谷：課題はいっぱい出ていましたか。
酒井：はい。日本人の先生の場合は、たくさんの課題のプリントをあらかじめ何十枚も、「毎回、持ってきてください」ということで、最初に渡されました。自分の場合は、本当にこれを受けたときはちょっと韓国語が苦手だったので、毎回予習をちゃんとしました。その先生は「予習しなくていい」とおっしゃっていましたけれども、自分はちゃんと予習をして行かないと追い付けないぐらいだったので、やはり予習というのは語学においてはすごく大切だと思います。
杉谷：宿題自体は、そんなに厳しくはなかったのですか。
酒井：そうですね。宿題は特に厳しくなかったです。
杉谷：けれども、「自主的に」というお話ですね。
酒井：「自主的に」ということです。
杉谷：予習して行ったということで、一生懸命努力したということですね。
大山：普通だと、「挫折しちゃうんだろうな」という、ちゃんと行って、しかも早く行って、ノートも広げて、「すごいな」というのが正直な感想です。
酒井：自分以外の全員が女子ということで、できる人が横にいるので、絶対に負けたくないと思いました。努力の面では絶対に負けたくないと思ったので予習しました。
杉谷：履修していた人は、人数が 10 人と書いてありますけれども、みんながついていけるくらいのレベルですか。
酒井：そうです。自分は 2 年生の去年に受けて、そのときに 3 年生の方で、もうその前から韓国語を勉強されている方とか、自分は韓国にはまだ留学したことがありませんけれども、もう留学経験のある方とかで、自分よりも皆さんはできる感じでした。
杉谷：では、他の皆さんは挫折せず？
酒井：そうです。多分、皆さんは自分ほどこんなに深刻にとらえてはいなかったのではないでしょうか。
杉谷：余裕な感じですか。
酒井：こういうことを言っては失礼でしょうが、皆さんは気楽に受けられていたのではないかと思います。
杉谷：伺っていますと、両方とも授業が割に自由な感じですよね。あまり厳しいノルマを課されるわけではなく、それを自主的にやってきたというところが共通していると思いました。ただ、周りの雰囲気が、酒井さんの場合は、「一緒に履修している人に触発されて」という感じですけれども、木村さんの場合は、「あまのじゃく」と言い、「僕は頑張るぞ」という感じですね。
大山：木村くんが、「頑張るぞ」だと、チームのほかの人が乗ってくれないとか、ありそうですけれども。
木村：はい、ありました。リハーサルのときに大幅に遅刻して来たり、やってなかったこともありました。その分は、違う人がフォローしてくれましたので、助かりましたけれども、実際にありました。

～高校と大学　授業の違い～

鳥海：木村さんの授業は 1 年生の、ある意味では一番初めの授業ですよね。
木村：割と始めのほうです。
鳥海：皆さん戸惑いというか、何をしたらいいか分からないという問題などはありましたか。これまでの高校の授業ですと、先生から教えられたものを覚えたりしていたのが、大学では全然違うふうになると思います。今この読ませていただいたかぎりだと。そのときには、やはり戸惑いというか、いろいろな方向に話が飛んでしまったりということはありましたか。
木村：この授業に関してのことですか。
鳥海：はい。
木村：この授業は PC ルーム、CALL 教室でやっていました。内進生が結構多いクラスで、3 人か 4 人いました。だから内進生を中心として、だらけます。みんなが新鮮なピリッとした空気ではなくて、もう慣れている感じの子が何人かいて、一緒にだらける感じでした。
大山：確かに 1 割でもそういう人がいたら……。
木村：教授は、あまり日本語が上手ではなくて英語しかしゃべれなかったので、何を言っているのか分からないのです。聞き取れないし、課題を提示されても、何の課題か分からないし、

どうやるのか分からないから、あきらめるとか、もう聞かないという人はいます。そこは、ある程度の日本語が通じる教授だと、もう少し雰囲気が変わったかもしれないと思っています。

長谷川：今シラバスを見たら、全部英語ですよ。

杉谷：松本君は、どう感じましたか？

松本：僕にはできないような、とても勉強に真摯に向かっていっている姿勢が素晴らしいと思います。僕は常に逃げ腰の姿勢でいろいろ臨んできまして、語学に関しては、特に先生との仲をつなぐ感じでやっていましたので、こんなに朝早く、一番に授業に参加するのはすごいですね。

酒井：実は、自分が高校生のころの3年間の授業は、チャイムが鳴ると同時に先生が入って来られて、すごく厳しいというか、授業時間をたっぷり使ってきっちりやるという感じがありました。朝とても早く行くというのは、その習慣が身に付いていたのではないかと思います。

松本：一番というと、朝8時半ぐらいですか。それ以前ですか。

酒井：そんなに早くは行かないけれども、前もって教科書とかを机に置いておかないとだめですね。例えば別のことをやっていると、怒られることがありました。それぐらい、「今から始まる授業に対して、ちゃんと向き合え」というような精神を教えられたというか、すごく厳しかったです。

杉谷：それは、この授業ではなくて、高校時代に？

酒井：はい。高校のころにそういうのがあったので、大学に入っても基本的にはちゃんと、当然ですけれども、時間前に行って待っています。ちょっと失礼ですけれども、大学だと結構遅れて来る先生もいらっしゃるので、驚いたりもしています。

大山：確かに、私もチャイムが鳴り終わったら同時に始めてしまうので、そういう先生は自分たちの学生時代にはいなかったと思います。

木村：僕は今、月曜から木曜までが1限必修で、金曜日は情報メディアセンターのほうでアルバイトをしていて、それで1限に撮影の仕事をしないといけないので、逆に全部が 1 限だと、規則正しくなってしまうのです。だから今は、毎朝8時過ぎぐらいに大学に来て、朝ごはんを食べてから授業に出るみたいな、高校のころを思い出すような感じになりました。やはり日によって、「明日は 3 限から」とかになってしまうと、去年まではだらけていました。

長谷川：先生も毎日1限から、どうですか。

杉谷：厳しいです。1 限の授業を履修する学生さんは、必修とかは除いて、「熱心な学生さんが多いかな」というのがあります。一生懸命ですから、こちらも触発されて頑張ろうという気になるのですけれども。

～第二外国語の選択～

長谷川：酒井くんは、今は韓国語Ⅲを取っているのですか。

酒井：はい、そうです。

長谷川：どうですか。だいぶ韓国語に自信が付いてきましたか。

酒井：いいえ。韓国語Ⅲともなると、強者（つわもの）たちが多いので、それに追い付こう、追い付こうということで、いつになったら自分が一番できるようになる日が来るのでしょうか。

杉谷：でも、Ⅱを取っていた人が、そのままとⅢを履修しているという感じですか？

酒井：そうです。Ⅱを取っていた人や、去年このインテンシブを取って履修していた方がいますので、やりやすいと思います。

長谷川：なるほど。今は何名ぐらいでやっているのですか。

酒井：今も 10 人ぐらいです。それでも、男子は自分ともう一人です。なぜか韓国語は、あまり男子が好かないのかもしれません。女子が多いです。

大山：多分、英語の授業などでもですが、語学への関心は一般的に女性のほうが大きいのでしょうね。

酒井：ああ、そうですね。

戸田：女子のほうが真面目に勉強をしますよね。

大山：語学は真面目にやらないと駄目ですからね。

戸田：きちんとやるタイプが多いということですね。

杉谷：今回の受賞はお二人とも男性ですね。Ⅲが一番難しいですか？

酒井：インテンシブも、2年生から4年生までの履修で、韓国語Ⅲは3年生と4年生なので、いい感じであがってきていますね。Ⅲが一番上のレベルだと思います。

杉谷：韓国語を使って、留学するとか、将来に何かつなげるということは？

酒井：そうですね。韓国語は、使えればいいのですけれども。

長谷川：史学科では、どんなことをやろうと思っているのですか。

酒井：自分は史学科では韓国のほうを勉強しないで、一応西洋史をやっています。

長谷川：西洋史ですか。

酒井：「韓国語をやっている」と言うと、いろいろな方から「東洋史をやっているんでしょう」と言われます。

長谷川：そう思っていました。

戸田：原典講読で使えるでしょうし。

酒井：韓国語を履修して、もし東洋史を取っていれば、確かに東洋史を研究してやっていく上ではすごくいいと思います。た

だ自分の場合、西洋史を選んで良かったと思うのは、やはり韓国語というのは東洋、アジアのほうで韓国語を学ぼうということで、社会や文化というものを知ることができます。その一方で西洋史を勉強して、西洋のことを学ぶことで、すごく広い視野を身に付けられたのは大きな収穫というか、良かったことだと思っています。

大山：不真面目な私ですら、韓国の文化というと少しは知っています。日本の在日の人たちもどういうという話とか、授業で聞いて少しはイメージできましたので、そういう意味では少し視野が広がったかなと。韓国語については、それしか私は取りえがないのです。

杉谷：でも、そうするのに、語学というスキルだけではなくて、視野が広がったわけですね。

酒井：そうですね。

杉谷：しかも、ほかの勉強にも影響を与えるという意味では、すごく得たものが大きいですね。

酒井：はい。大きいと思います。

杉谷：そこまで行くのに、時間がかかるのですね。

長谷川：大変ですね。例えば第二外国語の授業をⅢまで受けてこられて、「こんなふうにしたほうがいいな」と、思われるところはありますか。

酒井：やはり外国語の種類を増やしてほしいです。

長谷川：ああ、第二外国語ですね。

酒井：例えばイタリア語は、第二外国語としては多分ないとか。

長谷川：ないです。

大山：イタリア語はないのですか。

戸田：文学部共通科目にはありますが、青山スタンダード科目ではないですね。

長谷川：文学部でやっているだけですね。

酒井：自分は史学科なので、例えばイタリアを専攻する人が研究をするときに第二外国語にイタリア語がないと、つらいというか、「ちょっと」という方もいますので、やはり種類がバラエティーに富んでいると、すごくいいと思っています。

～授業で得たもの～

杉谷：木村さんも、授業で得たものを生かせるような場面などありましたか？

木村：今、酒井さんが、視野を広げるために韓国語を学ばれたと言われたのですが、僕なんかは不純な動機しかありません。フランス語を取っていますけれども、フランス語はおしゃれというイメージや、国際結婚できるかもしれないと考えて取っていましたから、今、苦労しているのです。

大山：確かに、フランス語は動詞の活用や変換もすごいですしね。

木村：そうです。活用とかは難しいです。僕の場合は研究しようと思って授業を取るというよりは、幅広い科目を薄く浅く取って学ぶタイプなので、本当に逆のような気がしてきて今すごく恐れ多いのですけれども。ただ3年のゼミで、国際マネジメントや株、金融工学に詳しい方がいて、すごく具体的な学べるのかと期待はしています。そうしたら、投資とかをもっと学べるのだろうと思っています。まだマクロ経済やミクロ経済といったすごく抽象的なものしかやっていませんので、あまりイメージできないのですけれども、今やっていることが何かに生かせるのかというのは、これからちょっと見つけたいですね。

大山：プレゼンというのは、何かやったわけですね。プレゼンをやられたのは、多分初めてですよね。

木村：はい。

大山：何か2年生の演習とか、授業で生かせたりしませんでしたか。

木村：はい。生きていますね。この授業のときもそうでしたけれども、周りが真剣だと緊張してしまいますが、周りがだらけているので工夫のしがいがあります。自分が何かのジェスチャーをやっても、誰も見ていないからワーっとやっていました。それが今に生かせています。このときは、こうしたら寝ていた頭も起き上がったとか、ここで何かこういうことを言うとか、あるのですよ。それで、聞く側の視点というものを考えるようになってからは、プレゼンがすごく良くなりました。今、本当にパブリックスピーキングでは、スライドなしで英語を話さないといけないことがあるのですが、どういうジェスチャーや言葉を使えばいいか分かるようになりましたので、このときの経験は大きいですね。

杉谷：この授業では、15週間をかけて2回のプレゼンをやるということでしたね。

木村：はい。

杉谷：すごく苦労したところは、どんな点がありましたか。

木村：そうですね。

杉谷：スケジューリングのことがネックでしたか？

木村：必修科目とかが多いので、グループで4人ぐらいいると、なかなか会える時間がなくて、苦労しました。

杉谷：4人で発表ということですか。

木村：最後は2人だったのですけれども、最初は4人でした。なかなか空きコマが合わなくて、夜に Skype で話し合ったり、Google ドライブを使いながら編集したりして何とかやっていたのですけれども、直接話して物事を決めるのと比べるとすご

く苦労してしまいました。リハーサルのときに、「じゃあ、こうやろう」と言ったら、意見が擦れ違ってしまいました。直接会って話していなかったから、そういうことがあるのです。プレゼンの時間も30分と長かったですね。

杉谷：それは英語と日本語で発表するのですか。

木村：日本語も使ってよくて、ただ先生は日本語が得意でないのでメインは英語ですけれども。先生には英語で、周りの学生には日本語も使いながら発表し、みんなに分かるように伝えるというのが基本でした。7週間とか、実質5週間ぐらいをかけて、それだけの作品というかプレゼンを組み立てていくのは、苦労しました。

大山：授業の中では、プレゼンテーションの準備は、ほとんどなかったわけですか。その7週間って、ずっとプレゼンの準備ではないですよね。

木村：ええ、ずっと準備ではなかったです。先生が読み物を読ませたりしました。メインはプレゼンです。

大山：どんな内容のプレゼンでしたか。

木村：最初は、「地球環境を守ろう」みたいなプレゼンです。アースデイという環境の取り組みで、実際に代々木公園に写真を撮りに行ったりして、ここだったらちょうど近いので・後半のプレゼンは、MIT メディアラボ所長の伊藤穣一さんという人です。誰でもいいので、誰か1人を紹介するというプレゼン内容です。

大山：それは先生が指定されたのですか。

杉谷：共通のテーマということですか。

木村：そうです。大体共通でした。

杉谷：そのタイトルで各グループが工夫するということですね。共同作業はなかなか難しいですね。

木村：難しいです。

～学生の集まれる場所　学習環境・学習時間～

鳥海：学内で、そういった勉強をするための集まりやすい場所はありますか。

木村：集まりやすい場所ですか。あらかじめ時間が決まっているのでしたら、8 号館の学習室がきれいでコンセントもあります。あとは7号館のフロアがすごく空いていることが多いので、昼休みとかはあそこを利用しています。

鳥海：17号館3階にプロジェクターが付いたラウンジがあったりするのですけれども、それを使ったことはあったりしますか？

木村：それは知りませんでした。その 17 号館 3 階のラウンジのところのプロジェクターというのは、使えるのですか。

鳥海：申請すれば、自由に使っていい設備で学生生活部が管理しています。

木村：それは、どこかで情報が公開されていますか？

鳥海：しているはずですが、もしかしたら周知できていないかもしれません。周知するようにします。

戸田：もったいないな。

木村：ぜひ利用させていただきます。でもほとんどの学生は、2階のパソコン教室の228教室では自由にしゃべれるので、共同作業ではそこを使っています。

戸田：2号館2階ですか。

木村：はい。228 教室だけは、しゃべってもいいパソコン教室です。

長谷川：8号館の1階の学習室は、しゃべってもいいのですか。

木村：はい。グループ学習室の中だけは、しゃべってもいいです。きれいです。鍵が必要ですが。

杉谷：酒井さんは、予習とかの勉強は大体大学でやるのですか。

酒井：自分の場合は家でやります。家でやりやすい人もいれば、大学やそういうところでという人もいます。それぞれ勉強する学習環境は、予習の場合は人それぞれだと思います。

杉谷：これは週1回の授業ですか？

酒井：週に2回で、2コマです。

大山：違うかもしれませんけれども、普通に第二外国語をやる人よりも、確かインテンシブのほうがコマ数は多いですよね。

酒井：多いですね。

鳥海：週4コマですから、ほぼ毎週360分の韓国語の授業を受けるわけですよね。

酒井：そうです。

杉谷：日にちは全部バラバラですか。

酒井：はい。

杉谷：週に4日ですか。

酒井：僕の場合は水曜日と土曜日で、それぞれ1・2限ですね。

戸田：水曜と土曜というのは、休みにしてしまう学生さんが多いのではないですか。

酒井：ああ、そうですね。

杉谷：予習は、時間的にどれぐらいしていたんですか。

酒井：多分、去年取った授業の中で、一番予習して行ったのではないかと思います。相当、2～3時間ぐらいですかね。

杉谷：その2コマの授業に対して、ですか。

酒井：それぞれ2～3時間ぐらいです。

杉谷：それぞれですか。

大山：ということは、合計で 4〜6 時間ですね。

酒井：そうなります。

杉谷：週 4〜6 時間ぐらい予習しているのですか。

酒井：そうです。

長谷川：単位計算上は、それでいいかもしれません。

大山：まあ語学だから 2 単位だから、十分ですね。

杉谷：平均的な学生の学習時間より、はるかに長いですね。

酒井：大学生になると、勉強時間がすごく少なくなっていますよね。それというのは、やはりサークルとか、別のことに時間を使う学生が多いんですかね。

大山：むしろそれは、私たちが教えてほしいですね。お友達を見てみて、実際どうですか？

酒井：聞いていると、やはりアルバイトをすごくしています。自分としては学業が本業だと思うのですけれども、アルバイトを理由にして授業を休んでいる人も少し出てきていて、それはどうなのかなと思っています。

木村：人間関係を優先させるために、お金を稼いでしまう人が多いみたいです。例えば、よく合宿とかに行くゼミやサークルが多くあります。ユニフォームを揃えたりしてお金がなくなってしまうから、バイトに行って稼いで、頑張って空いている日は全部バイトを詰め込んで、サークル活動やゼミにいそしんで。そうすると勉強とか予習もできなくて、授業中に疲れて寝てしまったりします。また、夜は終わりまでずっと働いているという子は結構周りにいますが、すごく大変そうだと思います。

杉谷：お二人は、サークルとかアルバイトはそんなに忙しくはないのですか。

酒井：自分はやはり学業が一番大事だと思っていますので、時間の都合がつきやすいアルバイトというか、すごくシフトとかをいっぱいばんばん入れているというやり方ではないです。やはり調整しやすいような。

木村：僕は国際政治経済学部の外交・国際公務指導室に入っていて、毎週土曜日は勉強しています。それがサークル代わりになっています。バイトは、昔は集団対象の塾講師をやっていて、時給が 1,800 円位ですごく良かったのですけれども、やはり責任が重くて、スーツに着替えないといけないとか、保護者との面談をしないといけないとか、予習をしなくてはいけないとかで大変でした。それで、大学の情報メディアセンターのアルバイトに変更したらすごく楽になって、空きコマはそこで働けるし、私服でいいし、交通費はないけれどもすぐに行けるということで、周りに頼らずに学内でうまくいっているのは幸せだと思っています。

長谷川：プレゼンテーションの準備とかで集まる時間みたいなものは、なかなか確保するのが難しいですか。

木村：周りと同じ授業を受けているわけではないので、難しいです。

長谷川：そうですね、みんなバラバラですからね。

木村：それが一番困るのですよね。議論の時間は、隔週でやってくれるとうれしいのですが、中には毎週グループで活動というのが、授業によってはあるので、こちらとしては、「いつ集まれと」という、文句を言いたいぐらいです。そこを何とか、やる気がある人は放課後に集まってくれたり、朝 7 時に集まってくれたりするのですが、普通の人はバイトとか、サークルや部活で忙しかったりします。本当に組み合わせが大事です。

長谷川：最近は割とグループワークをやる授業が、だんだん増えてきています。その辺は、実際にはどうなのかと思っていたのですけれども。

木村：はい。

長谷川：大学は、集まる場所を作ろうとしているのです。17 号館のウイングのところに、ちょっと座れるようないすを作るとかですね。

木村：はい。

長谷川：図書館の中も、ちょっと作ったりしているのですがね。ただ、実際に集まる時間がないとね。

木村：そうですよね。

長谷川：はい。

鳥海：休み時間は短いと思われますか？以前よりは、少し長くはなったのですけれども。

大山：5 分でしたからね。

木村：5 分だったのですか？

大山：相模原キャンパスは 10 分か、15 分ですか。青山は 5 分でした。本当に移動するのが、われわれも大変でした。

木村：5 分では何もできないですね。途中で抜けられる授業だったらトイレに行ったりできるのですが、少数精鋭のクラスで

はそれができないので、おなかがすいても買いに行けないし、トイレもおなかが痛くなっても抜けられなくなっていたから、今の 15 分はその 5 分ときから考えると、すごくいいと思います。

鳥海：やはり、ぎりぎりというか、移動してちょっと準備して、すぐ授業が始まってしまうみたいな感じですか？

木村：はい、そんな感じです。昼休みは長いのですか。

鳥海：長くなりました。

木村：長くなったのですか。

杉谷：前は 40 分でした。

木村：それを短いという声が、いっぱい聞くのですが。

杉谷：50 分だと短いと。

木村：はい。長くなったのですね。

杉谷：そう思います。移動に結構時間がかかったり、今は混雑してしまって。

木村：そうですね。人が増えて。

大山：教室が同じようなところで、同じ階だったりすればいいのですけれども、例えば 8 号館や 9 号館でやって、次は 17 号館とか。

木村：ああ、あります。

大山：今度こっちの 14 号館とか。

戸田：ここなんかは、エレベーターを待っているだけで、もうすごい時間がかかってしまうでしょう。

木村：そうですね。

長谷川：酒井くんは大学で、授業以外で勉強する時間はどういうところで勉強するのですか。合同研究室は使いますか。史学科合同研はあまり使わないですか。

酒井：あまり使っていないです。図書館は結構行きます。図書館はすごく静かでいいと思います。

長谷川：史学科は、あまりグループワークとかはないですか。

酒井：そうですね。

長谷川：ないですよね。

酒井：木村さんの授業でのプレゼンテーションにしても、国際政治経済学部や法学部の授業は極めて実践的な学問ですが、文学部だとやはりどうしても、その学部の性質があるのでしょうけれども、机に座って大量の本と向き合って本をたくさん読んだり資料を読んだりという授業が多いです。唯一、プレゼンテーションを学べる授業というのが青スタなのですが、青スタも抽選というのがあります。プレゼンテーションとか、そういう実践的なグループワークなどに応募したのですが、全部落ちてしまいました。それで取れないと、もう取りようがないので、文学部にもそういった授業が必修等で履修できたらいいと思っています。

杉谷：一応、もうゼミに入っていて、個人発表みたいな感じですか。

酒井：はい。ゼミに入るまで、1・2 年生ではそういうのはあまりなかったので、ゼミに入って、「あっ、やっとそういう授業が始まったな」という感じです。

杉谷：史学科にも、基礎演習みたいなものがあるのですか？

酒井：2 年生のときにありました。

杉谷：それは、あまりプレゼンとかは出てこなかったのですか？

酒井：それも、プレゼンは一応あるのですが、静かな部屋で、一人が前でずっと何かを読んでいるだけみたいな感じになってしまって、みんなでわあわあ議論するというのがなかったですね。

戸田：史学科なんかは学問の性質上、一人でコツコツの世界だからかもしれないですね。

長谷川：図書館の使い勝手はどうですか？

酒井：こういうことを言っていいのかな。ちょっと古くなって、机にガタがきていて書いていると揺れたりします。椅子もちょっと劣化はあるのですが、静かで環境がすごくいいのでそれでカバーされているという感じです。

木村：図書館なんかはチャイムが鳴らないから、うっかりすると時間が過ぎてしまいます。危険ですよね。

長谷川：なるほど。

戸田：チャイムを鳴らなくしているのは、静かにということでしょうかね。

木村：チャイムは鳴らないですよね。

酒井：そうですね、あまり聞いたことがないです。

長谷川：そうですか。それは気が付かなかったです。

大山：話が少々飛びますが、私の学校はチャイムが一切ない学校だったので、逆にここへ来て「チャイムが鳴るんだ」とびっくりしました。

～いい授業とは～

杉谷：考えてみると、今回書いてくれた授業のことだけではなくて、お二人にとっていい授業というのはどういう授業なのか、もしよかったら教えてもらえますか？

大山：具体的な授業でもいいです。

木村：青スタも学部の授業もそうですが、特に法学部とかも顕著ですけれども、先生との距離がすごく遠いですよね。つまり、1 人の先生に対して、バーッと人数がいて。多分その中でやる気がある生徒にとっては、レポートの提出の際等で先生と話す

機会があったりしたときに、その授業が特別な存在になるのだと思います。僕も第二外国語がフランス語で、フランス人の先生と話したりするのですが、その先生はみんなのことをちゃんと覚えていて、例えば部活とかサークルとかそういう個人的な話題を振ってくれるので、親近感があってちゃんとまじめに受けようという気になります。それが大教室で、「はい。そこ静かに」みたいに集団単位でさされたりすると、e ラーニングの授業を受けているような感じでこちらから発言することはできないというか、一方的なものになってしまいます。今まで心に残った特別な授業というのは、全部、何かしら先生との接点がありました。

大山：耳が痛いなあ。

杉谷：距離が近い授業ということですね。大人数のものでは、あまりないですか？やはり距離が近くなるように工夫されていた先生とか。

木村：1 回だけありました。理工学部の先生だったのですが、青スタの科学と技術の視点の授業で受講者が多いのですけれども、自分で風船を大量に買ってきて全員に配ってくれました。それを伸ばして「エントロピーの実験」をみんなでやったり、レーザーポインターを頭のところに持ってきて光をこうやったりして、みんながラフな感じになりました。誰かチョコレートを食べている人がいたら、先生がそこにやってきて、「俺にもくれ」みたいに話しかけていました。その授業は心に残りました。「ああ、理工のほうは、こんな面白い先生がいるのか」とか、「じゃあ、そっちに行こうかな」と思ったりもしました。違いますよ、やはり。実際に教科書とかスライドで淡々とやられるより、大教室でも、先生が近くに来て話してくれたりしたら、それでもいいのです、本当に。さすがに風船を配っていたのには、びっくりしました。

杉谷：はい。酒井さんは、どうですか。

酒井：私は、学生と先生の距離が近い授業がいいと思います。少人数だとそうなると思うのですが、大教室はなりにくいというのがあります。でも、自分が今年の前期に受けた青スタの授業で、先生が「書いてください」とリアクションペーパーを配って、その中から先生が「ああ、いいな」と思ったものを次の実習の最初に発表するというのがありました。自分もそこで読まれたときはすごくうれしいし、次の授業の励みにもなります。何よりも、ほかの学生がどういうことを考えているのか聞けるので、直接的にはその学生との関わりはないのですが、そうやってほかの学生のいろいろな意見を聞くと間接的にすごく結びついているようで、決して先生が一方的にやるのではなくてすごく密になっていると感じました。

杉谷：では、フィードバックがあって、ほかの人との関係性というか、コミュニケーションを少し擬似的に体験できるということかしら。

木村：僕らは、高校のときから何も変わっていないので、正直に言うと、大学でも高校 4 年生だから、相手にされないというのが一番つらいのです。大学では、よく友達がいないと本当に駄目コースに走るとか、すぐ家に帰ってしまうとか言われていると思うのですが、やはり大学の先生と高校の先生は違いますからそれが大きいところですね。僕らは何も変わっていないので、本当に積極的に話しかけてきてほしいし、褒めてもほしいし、ときには厳しく叱ってほしいです。適当に「もう寝てていいよ」とか、「うるさいから」と言うのではなくて。やはり本音で教授が向かってきていないというのは分かりますね、そういうところでは。「すごいな」と思う教授もいますし、バックグラウンドはすごいけれども「授業は一方的だな」という感じの先生もいます。

杉谷：せっかくですから、松本くんは？

大山：いや、なんだったら、ほかの大学を訪問もしている松本くんの意見をぜひ。

杉谷：「いい授業って、なあに」というテーマで、学生 FD でイベントをやってなかったですか？

松本：そうですね。先日、神奈川大学の FD 研修会で、ちょうど先生方とお話しする機会がありました。やはり先生方も学生さんと仲良くなりたいという本当におっしゃっていて、先生方も学生とうまく接することができないし、学生もその先生が持っている力を引き出すことができていないというお話を諸先生から伺いました。学生自身も変わらないといけないと僕自身も非常に思っていまして、「それをどうすればいいんだ」というところで議論では終わってしまったのですけれども。例えば、授業で質問したいときがあります。大教室でみんなと集まって授業を受けるにしても、「この先生、今どういうことを言ってるの？」みたいな感じで質問したいときがあるのに、先生がもう授業をやってしまっていてとても質問できる雰囲気ではないので、「じゃあ、最後にやるか」となるのですけれども、最後になるというときにはもう忘れています。そこで、どうにか先生とうまく対話ができるような空間を作り出せたらいいという話がありました。ある大学ではクリッカー等を使用して、「いま君たちはどういう感じで考えているの？」という質問に学生達がクリッカーで回答し、それをプロジェクターに映し出して「これをやったのは誰？」といった風にやりとりをして、教員と学生の溝を埋めるような努力は結構されているというお話を伺いました。先生方もそうですが、僕自身も「うまく先

生方とコミュニケーションを取るような何かをしなければいけないのかな」と思った次第です。そんな感じです。いい授業というのはなかなか難しいですけれども、信頼関係や人との関係性が非常に重要なのかなと僕自身は思いました。

大山：『坊主憎けりゃ袈裟（けさ）まで憎い』ではないですけれども、先生との相性で「この科目は嫌い」というのは、率直に言ってありましたものね。今、それが全部、自分に返ってくるのですけれども。

杉谷：確かに、先生のほうがどう関わってくるかというのも結構難しいと思うのかもしれません。世代間のギャップもあります。

長谷川：ただ、さっきのリアクションペーパーの使い方とかは「具体的にこういう使い方があります」と、題材としてそういうのを少し作ったりすると役に立つかもしれません。

杉谷：そうですね。基本的に全部の授業で、そういうのができればいいのでしょうけれども、なかなか。

長谷川：それは、なかなか難しいところがありますよね。いろいろ反省するところはありますけれども。確かに「質問ありますか」と言われても、なかなかしにくいですよね。

松本：大教室とかだとかなり質問しにくいという話が、学生の皆さんから挙がりました。

大山：私は前に、授業が終わったあとに学生が何か聞いていたりすると、そこへ行って「どうしたの」というふうにやっていたことがありましたが、それもあまり良くないらしいです。つまり学生同士で教え合うのが一番良くて、それを横で聞いていて解決するのを待つということです。次の時間とかがなければそれができるのですが、あったりするとお互いが、学生さん側がそういうことをできないでしょう。

鳥海：木村さんも国際公務指導室では、上級生が下級生を教えるという機会が結構あると思います。やはり教えるということは、自分の勉強にもなりますか。

木村：なります。指導室に入っていると、経済と国際法と憲法それぞれで毎週担当が変わって、自分でレジュメを作らないといけないので、教科書を読んであらかじめレジュメを作って、毎週木曜までに全員にメールで配布して、実際に前に立って教えるという流れになっています。先生が関与しない分だけたぶんお互いに厳しくて、指導室に入っている人たちは教えることがうまいし、教え合って学んできたので優秀な学生同士のコネクションを非常に大切にしています。

大山：憲法とか国際法といった教科の内容についてたぶん今言われたと思うのですが、それだけではなくて、やはり先輩から言われたことは、自分たちもそうでしたけれどもちゃんと聞いていました。もっと言ってしまうと、教員が言ったことなんて「ふーん」という感じでした。そういう場ができればいいなというのがありますね。

木村：そうですね。一番近い人から言われると言葉が沁みますね。

大山：ですから相模原だと、私は厚木の頃は知らないのですけれども、放牧、つまりほったらかしとか言われていたのですが、皆さんから見てもやはりまだ放牧のように感じますか。さっきの話ですと、やはり距離が遠いとか。

木村：放牧ですか。

大山：学生はほったらかしで、教員は授業があるときだけで、すぐに帰ってしまうという。

長谷川：昔は厚木という山奥にキャンパスがありました。牧場みたいな感覚で、授業のときは学生を羊さんみたいに集めて授業をやりまして、学生は放牧されているから適当に聞いて、先生は授業が終わるとすぐに、研究室もないので、帰ってしまいます。学生さんは適当に遊んでいるというイメージなのです。

戸田：駅までバスで 30 分かかるし、簡単には戻れないので。

長谷川：でも最近、だんだん学部の管理が厳しくなりまして、1 年生のときからゼミをやるところも出てきています。大学側の学生管理というとちょっと言葉が悪いのですけれども、大学のほうも勉強させる仕組みを少し工夫しているというのが今の姿ですよね。

～学生同士での学び～

木村：授業で、学生同士のまとまりとかを作っていただくとうれしいですね。すごくたくさん人数がいても、例えば Course Power である程度その班分けをして分からないことがあったらお互いに聞くとか、課題はこの人たちと一緒に出すとか、強制的に組まされたほうが実はやりやすかったりします。

大山：そうですか。

木村：はい。本当に友達がいないときに「じゃあ、親しい人で組んで」となると、「コミュ障で無理」となってしまいます。もう決まっているから話せるというのがあって、その中で新しい人間関係や友達ができるというのは強いですね。仲良しでやるよりも。

杉谷：木村さん、この授業では自由に誰と組んでもいいような感じだったのですね。

木村：そうです。

杉谷：そこら辺は、うまくばらけて組めたのですか？

木村：教室の右が女子で左が男子で、多分普通のクラス単位もそうですけれども、しばらくすると分離するというか、混ざっ

ているというか、男子・女子で別れるのですね。そうすると、男子の中で組んで、女子の中で組んでというふうになります。クラスにいる内進生を中心に集まち、そこはうまくできるのです。

長谷川：そうですか。でも文学部だと圧倒的に女の子が多いですよね。

酒井：そうですね。でも史学科だと、まだ男子が多いですね。英米文だと女子ばっかりです。

杉谷：やはり、その学び合うような機会づくりや環境づくりということで、ある程度強制的にでもグループをつくると、新しい人間関係もできるし、となるでしょうね。全てがその教員の教育力だけというよりは、学生同士の学習力を極力高めていくという意味でも非常に大事なことだと思います。

木村：一人で勉強することほどつらいことはないです、僕の場合は。

大山：まさにそうですね、周りがやっていると自然にね。

鳥海：やはり場所とか環境をまず作るという意味で、今は設備よりもみんなが集まる時間が足りないということのほうが学びにくい要因ですか？

木村：昼休みがもう 10 分長かったら、ご飯を食べて「じゃ、昼休みに集まろうか」となるのですが、今の段階では 2 時間目が押してしまってご飯を食べている人がいるということになってしまいます。放課後は高校のときは自由に使えたのですが、今はみんなバラバラで、アルバイトとかで絶対に集まれません。1 限の前とか、朝はもちろん来たくない人がいます。そうすれば、休み時間がすごく活かさなきゃいけない時間になってきます。

杉谷：友達とかは、どんな感じでどういう場で作っていくのかしら。一番はクラスとかサークルですか。

木村：僕は、結構特殊な人間関係が多いです。学内の催し物にインターンで行って、同じ大学の違う学部や学年の人と仲良くなりました。あとは指導室の友達の友達や、メディアセンターの中に集まってきた違う学生とかです。最初はこのクラスでしたが、合宿というか、オリエンテーションがありましたよね。

鳥海：フレッシュマンキャンプですか。

木村：フレッシュマンキャンプです。それで仲良くなったような感じはしたのですが、実際はそうではなかったです。今振り返ってみて、「分かんないものだな、人生は」という感じです。

杉谷：自分が積極的に関わってきた場所や人間関係の中で、だんだん広がってということですね。

木村：そうですね、動いていった先ですね。そう考えると、さっき言ったことと矛盾しますが、一時的に組まされた人間関係というのは続かないですよね。

大山：そうですか。

木村：はい。ただ、女の子だと LINE 交換をして仲良くなってその後もやりとりがあるのですが、男同士だと、もう終わったから終わり、みたいな、学年が違っても。続かない人間関係なので、それはそれであまり意味はなかったりします。そうすると友達の友達と食堂で一緒になったとか、そういった経験のほうが大きくて、話すきっかけというのは分からないものですね。

大山：少人数の授業でもすごく仲良くなるときと、今年なんかは 4 人しかいないのに休み時間とか全然しゃべらないこともあったりしました。仲良くなってくれるほうがやりやすいという部分もあるのですけれども。せっかくなのにもったいないなと、ちょっと私なんかは見ていて思ったりするのですけれども。それは仮のパターンですかね、いま木村くんが言われたように。

木村：はい。僕が思うには、目的が違うので一時的でしかないです。

杉谷：酒井さんは 3 年目ですけれども、どうですか？

酒井：自分は性格が内気なものですから、なかなか自分から積極的に声を掛けられません。やはり大学というのは、本当にいろいろな都道府県から来ています。自分も地方から来ていますし、しかも多分そこから来ているのは自分一人だと思うのです。ほかに高校のときの友達というは一緒に来てなくて、いきなり誰も知らないところに飛び込んで。最初の新入生オリエンテーションでそれぞれの学科ごとに集まるのがあって、そのときに話した人と仲良くなったりはしたのですが、その後授業をいろいろ取っていく上でその授業の人と仲良くなっていきました。文学部ではそういうグループワークもないし、やはり一人一人が多いので、人間関係を作るというのはすごく難しいと感じました。

木村：サークルに入っていないと、圧倒的に人間関係が不利になるみたいな感じになってしまっているのですね、今は。

大山：そうでしょうね。

木村：去年は本当に痛感しました。

杉谷：松本くんは、もう 4 年生で卒業前ですが。

松本：友達ですか。教育は 40 人が 1 クラスで、英語等の授業が全部クラスごとに受講するため、一緒にいることが多かったのでそこは全然難しくなかったですね。すぐ団結して、その先生のもとで仲良くやっていく感じです。教育はどのクラスもそんな感じで仲良くなれたので、友達づくりという面では結構恵まれた環境にいたのかもしれません。ただ、そういったほかの学部のお話とかを聞くと、やはり同じクラスでも全然知らない人というのはたくさんいるし、そこで、どういった感じに仲良

くなっていこうかというのが非常に難しいということをみんな言っているので、そういった環境というのが結構大きく左右するのかなと思いました。

杉谷：そうなのですね。

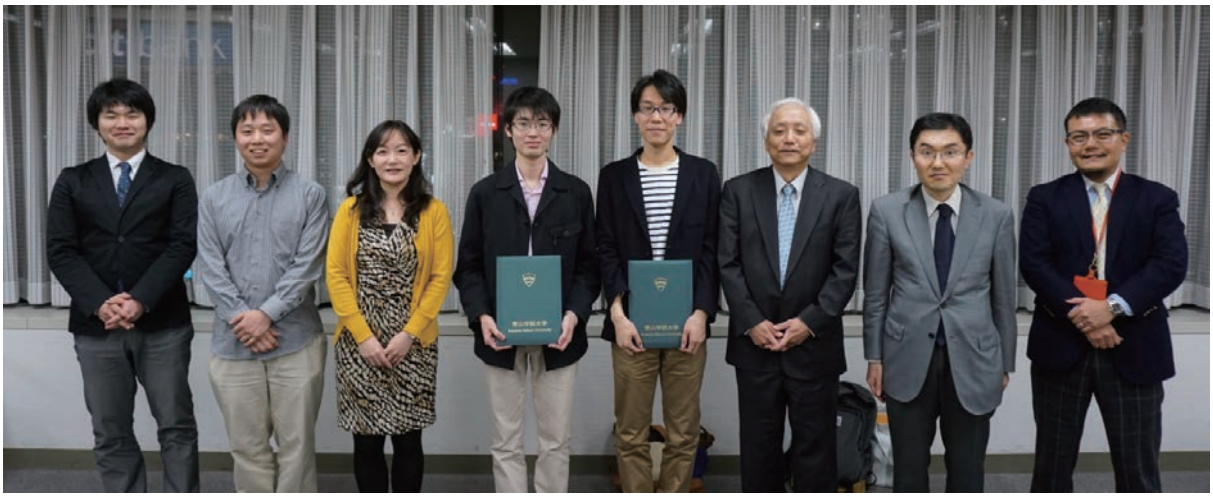
長谷川：社会系の学部だとなかなか難しいかもしれないですね。規模が大きいし、今は、あまり語学のクラス単位が機能しなくなっていますから。

大山：そうですね。昔だと、私も松本くんと似たような授業でした。こういう中で仲良くなっていくということがあったのですけれども。今は能力別に割り振ってしまって、クラスが違うと、同じでも違うのです。

杉谷：そろそろお時間のようです。今日はいろいろお話を聞かせていただいてありがとうございます。受賞されたお二人は、本当に自分から積極的に授業にコミットされているということがすごくよく分かりました。非常に望ましい理想的な学生さんだと思います。ぜひ、これからも勉強を頑張ってほしいと思います。おめでとうございました。

長谷川：おめでとうございます。

酒井・木村：ありがとうございます。



表彰式および座談会に出席された受賞者と 学生 FD スタッフ代表ならびに全学 FD 委員教職員

10.　その他のFD活動

2014年度より、本学教員を対象とした「教員のための英語研修プログラム」を2回開催し、英語での講義を行うにあたって必要な技術やノウハウを得るための研修を実施した。

また、2013年度に制作した「FDハンドブック」の内容を拡充し、第2版として新たに発行した他、FD推進委員会において、タブレット端末を用いたペーパーレス会議の導入を行った。

○　2014 年度　教員のための英語研修プログラム

2014年度初の試みとして、教員のための英語研修プログラムを計２回実施。講師は、英国の公的国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルから招き、研修はすべて英語で実施した。実施後のアンケートについても、スキルアップにつながった、この研修を継続して欲しいなどの意見が多く見られた。詳細は下記のとおりである。

（第１回目）
日　時：2014年6月25日（水）10：00 ～ 17：10
参加者：9名
内　容：「アカデミック・ライティング」英語で論理的な文章を書くための様々な手法を含め、今後学生を指導するために必要な知識の習得および技術の向上

（第２回目）
日　時：2014年12月3日（水）10：00 ～ 17：10
参加者：10名
内　容：「講義とプレゼンテーション（導入）」教員が英語で講義やプレゼンテーションを行うにあたり、明確で論理的、かつ分かりやすいように行う方法を学ぶ

（アンケート）
● コースについて
Ｑ１．コースのレベルは適切でしたか。

回答		合計	
		6月25日	12月3日
難しい	難しすぎた	0	0
	やや難しかった	2	1
適切		5	5
簡単	やや易しかった	0	0
	易しすぎた	0	0
無回答		0	0
合計		7	6

コメント：何を聞かれているのか理解するのが難しいときがあった（6/25）
：内容は適切ですが、聞き取りが得意でないので大分聞き逃してしまったのが残念です（12/3）
：英語が分かりやすかった。スピードも適切だった（12/3）

Ｑ２．研修の長さはいかがでしたか。

回答		合計	
		6月25日	12月3日
長い	長すぎた	0	0
	長かった	2	3
適切		4	3
短い	短かった	1	0
	短すぎた	0	0
無回答		0	0
合計		7	6

Q３．研修の内容はご自身のニーズに合っていましたか。

回答		合計	
		6月25日	12月3日
肯定	常にあっていた	3	3
	大体あっていた	3	3
中間	時々あっていた	1	0
否定	あまり合っていない	0	0
	全く合っていない	0	0
無回答		0	0
合計		7	6

コメント：普段英語を書くときを比較して考えるためそれが解決できた（6/25）
：最後のページまでやりたかったです（6/25）
：学会向けの有用なフレーズが多々あってよかった（12/3）
：知りたいことと合っていました（12/3）
：このような研修を初めて受けたが、面白かった（12/3）

Q4. 研修を受講して英語力/英語スキルが上がったと思いますか。

回答	合計	
	6月25日	12月3日
はい	4	5
いいえ	2	1
無回答	1	0
合計	7	6

コメント：自分で問題を解けたのでよかった（6/25）
：欧米人が使うフレーズが分かった（12/3）
：Presentationのスキルは身についた（12/3）
：1日では難しいです（12/3）

○　FD ハンドブック

「授業改善のための学生アンケート」結果の活用に資することを目的に2013年度に制作した「FDハンドブック」について、内容の追加を中心とした改訂を行った。新たに追加された主な内容は、本学の授業支援システム（LMS）等の教育環境に関する説明や各学部の教育方針（DP、CP、AP）等。2015年3月に発行した。

はじめに

FD（Faculty Development）は、「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究」といわれますが、その内容は多岐にわたり、現状ではより幅広い活動が展開されています。本学の FD 活動においても、単なる授業改善にとどまらず、さまざまな教育支援が組織的に展開され始めており、これまでに G.P.A. 制度の導入、「講義内容」の整備、「授業改善のための学生アンケート」の公開、「学生意識調査」の実施、新任教職員研修、「教育改善・教育プログラム支援制度」等が推進され、教育力の強化が図られてきました。

教育支援をさらに進めるための一つの試みとして、2014 年度から本学の教育に関する各種情報、そして「授業改善のための学生アンケート」を活用するための授業改善アイディア等をまとめた FD ハンドブックを制作し、教職員に配布しております。日々の教育研究活動の合間等にこの FD ハンドブックを手に取っていただき、何らかのヒントを得られることがあれば幸いです。

2015 年 3 月
青山学院大学　全学 FD 委員会
委員長　長谷川　儀

目次

第１部　青山学院大学の教育に関する基本情報 …2
授業時間　学生数　教職員数 …2
教室数　開講授業数　学生平均履修科目数 …3
第２部　授業改善のアイディア …4
授業改善のアイディアについて、「授業改善のための学生アンケート」設問・回答一覧 …4
「授業改善のための学生アンケート」実施状況 …5
1 授業の心構え …6
2 授業のデザイン …7
3 シラバスの作成 …8
4 教材の選択・作成 …10
5 最初の授業 …11
6 多様な授業方法 …12
7 授業の展開Ⅰ・Ⅱ …14
8 授業のアイディアⅠ・Ⅱ・Ⅲ …16
9 授業の秩序 …19
10 学生への対応 …20
11 学生とのインタラクション …21
12 ICT の活用 …22
13 試験と採点 …23
14 授業評価の活用 …24
15 授業改善のために …25
第３部　青山学院大学の教育に関する制度及び設備・サービス … 26
1 成績評価 …26
2 試験 …27
3 休講・補講 …28
4 教学関連事務 …28
5 教室設備(通常教室・演習室) …30
6 無線 LAN の利用(学内) …32
7 授業支援システム(LMS) …33
8 Aoyama-Portal …34
9 学生へのソーシャルメディア利用に関する注意喚起 …35
10 障がいのある学生への支援 …35
11 教材・補助プリントの印刷 …36
12 講師控室 …36
13 ラウンジ・学生の自習用スペース …37
14 教育補助員(TA) …38
13 FD 活動について …38
第４部　青山学院大学の教育内容 …40
1 青山学院教育方針・青山学院大学の理念 …40
2 キリスト教教育 …40
3 青山スタンダード科目 …41
4 各学部の教育方針―教育研究上の目的と３つのポリシー …42
参考文献 … 56

1

11.　諸規則

○青山学院大学 FD 規則

（2009年3月26日理事会承認）

（趣旨）

第１条　この規則は、大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）第25条の3に基づき、青山学院大学（以下「本学」という。）全体の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組みであるファカルティ・ディベロップメント活動（以下「FD活動」という。）について必要な事項を定めるものとする。

（組織）

第２条　本学のFD活動を適切に実施するため、次の委員会を置く。

(1)　全学FD委員会

(2)　FD推進委員会

2　全学FD委員会は、FD活動を円滑に運営するために必要な事項等を審議する。

3　FD推進委員会は、FD活動の企画、立案及び実施に必要な事項等を審議する。

4　全学FD委員会及びFD推進委員会について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項は、別に定める細則による。

（所管）

第３条　この規則は、学務部教務課が所管する。

（改廃手続）

第４条　この規則の改廃は、全学FD委員会、学部長会及び教授会の議を経たのち、常務委員会及び理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附　則

この規則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学全学 FD 委員会運営細則

（2009年3月16日学部長会承認）

（趣旨）

第１条　この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、全学FD委員会（以下「FD委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。

（構成）

第２条　FD委員会は、次の委員をもって構成する。

(1)　青山学院大学FD推進委員会運営細則第2条第1項に規定するFD推進委員会委員

(2)　青山学院大学全学教務委員会規則（以下「全学教務委員会規則」という。）第2条第1項に規定する全学教務委員会委員

(3)　全学教務委員会規則第9条に規定する全学教務委員会出席者

2　FD委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。

（委員長）

第３条　FD委員会に、委員長を置き、学務及び学生担当の副学長をこれに充てる。

2　委員長は、委員会を代表し、委員会の業務を統括する。

（副委員長）

第４条　FD委員会に、副委員長1名を置く。

2　副委員長は、委員長が委員の中から指名する。

3　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。

4　副委員長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

（招集、開催及び定足数）
第５条　FD委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。
2　FD委員会の定足数は、構成員の過半数とする。
（審議事項）
第６条　FD委員会は、次の事項を審議する。
(1)　FD活動全般に関する事項
(2)　FD推進委員会の審議結果に関する事項
(3)　その他FD活動を円滑に運営するために必要な事項
（審議結果）
第７条　委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。
（事務の所管）
第８条　FD委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。
（改廃手続）
第９条　この細則の改廃は、FD委員会、学部長会及び教授会の議を経て、学長がこれを行う。

附　則
この細則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学 FD 推進委員会運営細則

（2008年10月6日学部長会承認）
改正 2009年3月2日 2012年2月27日

（趣旨）
第１条　この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、FD推進委員会（以下「委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。
（構成）
第２条　委員会は、次の委員をもって構成する。
(1)　副学長（学務及び学生担当）
(2)　専任教員の中から学長が指名する者　若干名
(3)　事務職員の中から学長が指名する者　若干名
2　前項第2号及び第3号に規定する委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
3　委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。
（委員長）
第３条　委員会に、委員長を置き、前条第1項第1号に規定する副学長をこれに充てる。
2　委員長は、委員会を代表し、委員会の業務を統括する。
（副委員長）
第４条　委員会に、副委員長1名を置く。
2　副委員長は、委員長が委員の中から指名する。
3　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。
4　副委員長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
（招集、開催及び定足数）
第５条　委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。
2　委員会の定足数は、構成員の過半数とする。
（審議事項）
第６条　委員会は、次の事項を審議する。

(1)　FD活動の啓発に関する事項
(2)　FD活動の企画、立案及び実施に関する事項
(3)　学長の諮問する事項
(4)　その他FD活動全般に関する事項
（審議結果）
第７条　委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。
（学生FDスタッフ）
第８条　必要な場合には、委員会の下に学生FDスタッフ（以下「スタッフ」という。）を置くことができる。
2　スタッフは、委員会の委員の指示により、FD活動に係る業務に当たる。
3　スタッフは、学部又は大学院研究科に在籍する学生で、FD活動への参加を希望する者の中から、委員会が任命する。
（事務の所管）
第９条　委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。
（改廃手続）
第10条　この細則の改廃は、委員会及び学部長会の議を経て、学長がこれを行う。

附　則
この細則は、2008年10月7日から施行する。

附　則（2009年3月2日）
この細則は、2009年3月27日から施行する。

附　則（2012年2月27日）
この細則は、2012年4月1日から施行する。

○青山学院大学 FD に係るデータ取扱に関する要領

（2009年2月4日制定）

（趣旨）
第１条　この要領は、学校法人青山学院個人情報保護に関する規則に基づき、青山学院大学のファカルティ・ディベロップメント（授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み。以下「FD」という。）活動において必要なデータの収集、集計と取り扱いについて、必要な事項を定める。
（目的）
第２条　データについては、以下の目的に使用される。
(1)　FD活動における企画・立案に資する
(2)　FD活動の報告に資する
2　前項以外の目的で、FD推進委員会（以下委員会）委員長が必要と認めたもの。
（データの範囲）
第３条　本要領が予定するデータとは、以下に掲げる各別から個人を特定できる情報を除いた匿名化データをいう。
(1)　広報入試センターが業務上収集する入試及び広報関連データ
(2)　学生部が管理するデータ
(3)　教務課が管理するデータ
(4)　進路・就職センターが業務上収集する就職関連データ
(5)　委員会が実施する調査データ・アンケートデータ
(6)　その他委員会が必要とするデータ

（データの収集）
第４条　FD活動に関わる必要なデータは、委員長が各部署と協議の上、学長名に基づき収集を行う。
（データ管理責任者）
第５条　データ管理責任者は委員会委員長とし、データは、各部署より委員長宛に提出する。
（データ利用者と利用時の注意義務、集計場所及び目的外利用の禁止）
第６条　データは委員会で認められた集計目的にのみ用いられ、その集計は同委員会から委嘱された専任教員（以下データ利用者）が、委員長の任命を受けてこれを行う。
2　データ利用者は集計期間中、原データや中間生成ファイルの保管に遺漏なく努めなければならない。ネットワークを介した当該情報の漏洩や集計場所への第三者の立ち入り、保存メディアの管理に対し、データ利用者は細心の注意を払う義務を負う。
3　データの使用場所は、原則として本学内とするが、データに十分な匿名化処理が施されていて、かつ委員長が特に必要と認めた場合についてはこの限りでない。
（結果の公表と守秘義務）
第７条　データ利用者は、係る集計が終了した後、速やかに委員長に報告する。委員長は集計結果について、委員会の議を経たのち、必要に応じて公表することができる。結果の正規公表がなされない限り、データ利用者と及び委員会委員は、集計過程で知りえた情報を一切口外してはならない。
（データの利用期間と破棄）
第８条　委員会で認められた目的に係る集計が終了した後、データ利用者は、速やかに中間生成ファイルを含む全ての利用データを削除し、データ管理責任者は、データの破棄を確認するとともに、これを学長に報告しなければならない。
（事故等への対応）
第９条　前条及び前条以外の項目について、事故等が発生した場合は、「学校法人青山学院個人情報保護に関する規則」を準用するものとする。
（改廃手続）
第10条　この要領の改廃は、委員会が行う。

附　則
この要領は、2009年2月4日から施行する。

12.　FD 推進委員会及び全学 FD 委員会　委員一覧

1. FD推進委員会委員

氏名		所属等	備考
委員長	長谷川　信	副学長、経営学部経営学科	
副委員長	杉谷　祐美子	教育人間科学部教育学科	
委員	大山　和寿	法学部法学科	
委員	加藤　篤史	経営学部マーケティング学科	
委員	中野　昌宏	総合文化政策学部総合文化政策学科	
委員	中邨　良樹	経営学部経営学科	
委員	米山　淳	理工学部電気電子工学科	
委員	宮川　裕之	社会情報学部社会情報学科	
委員	鈴木　寛也	事務局長	
委員	髙野　悦子	学務部　部長	
委員	戸田　隆也	学務部　教育支援課　課長	
委員	鳥海　貴裕	学務部　教育支援課	
委員	土居　美菜子	学務部　教育支援課	
委員	蓬田　豊子	相模原事務部　学務課　主任	～2014年5月
委員	萩原　とよ子	相模原事務部　学務課　主任	2014年6月～

2. 全学教務委員会委員

所属等	氏名	備考
委員長、副学長（学務及び学生担当）	長谷川　信	
副委員長、副学長（将来構想及び第二部担当）	平澤　典男	
大学宗教部長	伊藤　悟	
青山スタンダード教育機構副機構長	篠原　進	
文学部	佐野　弘子	
教育人間科学部	北村　文昭	
経済学部	矢吹　初	
法学部	大石　泰彦	
経営学部	島田　淳二	
国際政治経済学部	渡邊　千秋	
総合文化政策学部	竹内　孝宏	
理工学部	谷口　健二	
社会情報学部	長橋　透	
学務部　部長	髙野　悦子	
相模原事務部　学務課　課長	鈴木　あつ子	
政策・企画部　部長	白濱　哲郎	
学務部　教務課　課長	中津　昌義	

2014年度
青山学院大学 FD 活動報告書

発　行　日　2015 年 10 月 1 日
発　　行　青山学院大学全学 FD 委員会
　　学務部教育支援課
　　〒150-8366　渋谷区渋谷 4-4-25　17号館2階 スチューデントセンター
　　TEL 03-3409-4165　　FAX 03-3409-9423
発行責任者　長谷川　信

150th
140th